

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

教会学校 教案誌



church school curriculum



天におられるわたしたちの父よ、
御名が崇められますように。

マタイによる福音書 6章9節

vol. **63**
2016年10-12月

「子どもと親のカテキズム」
に基づく二年サイクル 第2年

【巻頭説教】「母なる教会の役割」…………… 長田詠喜

教会・国家・平和・人権（4）…………… 木下裕也

【若者たちとともに（3）】

若者たちのおかれている現状…………… 大嶋重徳

神様のみこころを祈る…………… 保田広輝

【日曜学校・教会学校訪問】名古屋岩の上教会子どもの教会のご紹介

2016年10～12月カリキュラム（第63号）

—『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第2年—

月 日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
10月2日	第四戒 主の日の安息	問68, 69 使徒言行録13:44～52	ウ小57～62 創世記20:8
	安息日に神さまの愛を味わう		
	10月9日	第五戒 父母を敬う	問70, 71 テサロニケー5:12～15
神さまが与えてくださった人間関係を大切にする			
10月16日		第六戒 殺すな	問72, 73 ヨハネー3:11～18
	自分も他の人も愛する		
	10月23日	第七戒 姦淫するな	問74, 75 創世記2:18～25
神さまが創られた秩序、神さまとの約束を大切にする			
10月30日		第八戒 盗むな	問76, 77 エフェソ4:25～32
	神さまからいただいたものを大切にもちいる		
	11月6日	第九戒 偽証するな	問78, 79 マタイ26:69～75
聖霊に生かされ、神さまの真実に生きる者となる			
11月13日		第十戒 むさぼるな	問80, 81 マタイ6:25～34
	私たちを満たして下さる神さまに信頼を置く		
	11月20日	憐れみを求めさせる戒め	問82 ローマ7:14～25
十戒を通して、イエスさまの赦しの憐れみに依り頼む生活へ			
11月27日		神の愛の戒めを喜ぶ	問83 エフェソ5:6～10
	戒めは私たちへの愛の導き		
	12月4日 待降節	祈りの手本、主の祈り。 祈りとは何か	問84 マタイ6:7～15、ルカ11:1～4
祈りはすべてをご存じの神さまに対する私たちの応答			
12月11日 待降節		キリスト誕生の予告	— マタイ1:1～17
	神の約束が守られ、その約束通りにキリストがお生まれになった		
	12月18日 待降節	キリストの誕生	問26 マタイ1:18～25
キリストはまことの人となるほどに私たちを愛される			
12月25日 降誕祭		博士たちの礼拝	— マタイ2:1～12
	神さまの導きを素直にうけて主を礼拝する		

も く じ

2016年10・11・12月カリキュラム

まえがき	小宮山裕一	4
巻頭説教	長田 詠喜	6
日曜学校・教会学校訪問		
子どもの教会のご紹介 名古屋岩の上教会	相馬 直子	9
絵本に心を耕されて		
「マローンおばさん」	望月 鈴子	18
教会・国家・平和・人権		
—とくに若い人々のために (4)—	木下 裕也	21
神様のみこころを祈る	保田 広輝	24
若者たちとともに (3)		
ポストモダン社会と若者たち	大嶋 重徳	27

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

10月 2日	32
10月 9日	38
10月16日	44
10月23日	50
10月30日	56
11月 6日	62
11月13日	68
11月20日	74
11月27日	80
12月 4日	86
12月11日	92
12月18日	98
12月25日	104

2016年度年間カリキュラム	110
救済史に基づく二年サイクル	112
「子どもと親のカテキズム」案内	114
執筆者よりひとこと・あとがき	115
崖っぷちです！ 教案誌の財政	115

まえがき

高神派の教会教育シンポジウムに参加して

小宮山裕一（ひたちなか教会牧師）

6月21日から23日にかけて、大韓国イエス教長老会高神派の教会教育シンポジウムが韓国の慶州にて行われました。高神派は私たちの改革派教会ともつながりの深い教派です。幸いにして、このシンポジウムに行く機会が与えられましたので、この場を借りてその報告をさせていただきますと思います。

シンポジウムは2泊3日で行われました。会場は風光明媚な普門湖のほとりのリゾートホテルです。会場の慶州は韓国の古都であり世界遺産に登録されている建物群が有名です。この慶州に韓国国土から300人近い人が集まりました。参加者の多くが牧師や伝道師、教会スタッフです。韓国以外では、アメリカ、オーストラリア、イギリスにある韓国系の教会の関係者や宣教師の方が集い非常ににぎやかなシンポジウムとなりました。

シンポジウムは1日ごとにテーマがきめられており、1日目が「Catch」2日目が「Check」3日目が「Change」です。テーマごとの講演や分科会、教会教育関係の教材の見本市などが開かれました。講演も分科会も深い内容のあるもので、韓国教会の規模と教会教育への情熱をかいまみることができました。

今回は特にシンポジウム全体の基調講演だった1日目の主題講演の内容を分かち合いたいと思います。タイトルは「教会・教育・絶望から救い出す」。内容を簡単にまとめると以下のような内容でした。

①教会には5つの機能がある。レイトゥルギア（礼拝）、コイノーニア（交わり）、ディダケー（教育）、ケリュグマ（宣教）、ディアコニア（奉仕）。この5つをきちんと行うことが大切。韓国教会においては宣教が熱心に行われてきた

が、教会にも力を入れることが大切である。

②韓国教会の危機。最近の韓国教会の一つの傾向としてプロテスタントからカトリックへの流入が増加している。仏教とプロテスタント教会の教勢は横ばいもしくは微減だが、カトリックは上昇傾向にある。こうした傾向なのは教会が信仰教育を怠ったことにある。洗礼を目的としたものだけではなく、洗礼後も教え続けることが大切である。そうでないと、数だけでなく質も低下してしまう

③教会の信頼の低下。「困っていたらどこにいく？」というアンケートをとった結果、教会が最下位になった。社会的な教会の影響力が低下しつつある。それは信徒が社会に対して影響力を持たず、自分の教会にのみ関心をもってしまふことが原因である。社会に対して証をたてるためにも、教会でふさわしい教育を行うことが大切。

④では、どうするか。これらの問題点に十分対応するために、牧師が教育に関心をもつことが大切。特に、量的に成長させたいという思いが問題。量ではなくて、一人一人の人格を大切にすることが大切。今までは伝道中心だったが、これからは一人一人の変化に目を向ける。また、生活の中でキリストを証するように教えることも大切。

以上が主な内容です。実際には礼拝のことや教会が変化することの大切さも語られましたが、主な内容は上に記したように、量に注目する教会から質を重んじる教会に向かうように、ということでした。

この他の講演も、重厚な内容をもったものでした。すべてを紹介することはできませんが、それぞれの講演に共通していたことは以下のも

のだったと思います。

①現状の分析。教会の現状分析のみならず、韓国社会の分析（出生率、高齢化、平均初婚年齢、国際化、過大な教育熱）などをきちんと行い、教会が置かれている現状を教会内部の傾向や数字ではなく、より広い視野で行っているということ。

②神学的作業。教会教育を神学的なものとしてとらえる。ただ実践神学的な見方だけではなくて、聖書学、組織神学的な見地からとらえる。ただ実践せよ、ということではない。

③御言葉を教えるということ。様々なプログ

ラムに頼るのではなくて、聖書の御言葉を信頼すること。

以上が簡単な報告です。韓国と日本の教会では規模も置かれている社会的な状況も異なります。しかし、聖書を教え、一人一人をキリストに導き人格的な成長を促すという問題は共通しているように思えます。そのためにも、教会教育の神学が不可欠です。また、こうした教会教育を大会レベルで議論し、検証することが大切でしょう。私たちの教会でもこうした働きが活発になることを願っています。

「母なる教会」の役割

長田詠喜（新所沢教会）

主なる神は言われた。

「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助けける者を造ろう。」

こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

一昨年、政治規準が改正されて、牧師や長老になる資格として「男性」であることが除かれました。新しい規定が発効してから一年ほど経ちました。待ちわびていたかのように、幾つかの教会で実際に女性の長老が立てられ、女性の教師候補者も生まれ、女性役員が現実のものとなりました。それ自体はとても喜ばしいことと思いますが、その過程の中で、ちょっと気になることがありました。

「女性は教会で語ることが許されていない」「女性は教会を治める賜物が与えられていない」といった言い方が、女性役員に反対する方達から言われることは、その方達の聖書理解や解釈から生じてくることですから、わからないわけではありません。けれども、女性役員に賛成する立場の方から「女性の説教の方が男性の説教よりも素晴らしい」とか「女性の方が信徒を受け入れる賜物がある」などという言い方がされると、その言葉自体は役員としての女性の賜物を認めるものであるにもかかわらず、違和感を覚えてしまうのです。また、実際に女性役員を認める規定が成立した後、その具体的な実現を議論するときに、「特に女性の長老を立てるときには配慮しなければならぬ」と言われるならばまだしも、「女性の長老は中会が直接教育・試問した方が良い」などという意見が出たと聞くと、一体どのような理解で女性に役員の道を開いたのか、疑問を持ってしまうのです。

事の本質は、今回の改正が「女性に教師・長老の道を開いた」ものではないということです。そうではなくて「教師・長老の条件として『男性』という限定を除く」ものであるということです。これまで私たち改革派教会は、教会の役員、牧師・長老になるには、信仰を持ったクリスチャンであるということと並んで、男性である事が挙げられておりました。どんなに信仰が厚くても、賜物が豊かでも、男性という賜物を持たなければ教会役員となれなかったのです。

なぜ男性だけが役員を務める事が許されているのか、一言で言えば「聖書がそう命じていると理解されていた」からなのですが、そこからさらに「男性は治める賜物があるから」「論理的に語る事ができるから」「会議に長けているから」などと説明されてきました。聖書がそのように定義していないにもかかわらず、男性であることがそのまま何かの特質と結びつけられたのです。これは二重の意味で不幸な事です。つまり一つは、具体的な賜物を問われる以前に、女性であるという事だけで、賜物があり召命を感じてもいる方が、務めから除かれたという事、もう一つは逆に、男性であるというだけで、その種の賜物を持つかのように強いられる事が往々にしてあったという事です。更に加えると、職務そのものも「男性」性と必然的に結びつけられ、「男性」的な働きであるとみなされるようになってしまった事。これもまた不幸な事であるでしょう。

今回の改正によって、牧師や長老は「男性」的な働きであるという思い込みから解放されます。また、牧師や長老を目指す人は「男性」的であるか問われるのではなく、本当にその人が牧師や長老を務める賜物を持っているかという

事が問われるようになるはずなのです。

冒頭で、気になる、違和感を覚えるといったのは、今回の改定を進める立場の人たちの中に、相変わらずその人の賜物を「男性」「女性」という枠組みで捉えようとしたり、逆に「女性」性に当てはめようとする傾向が見えるからなのです。本来、「性幻想」から解放されるべき改正が、新しい「性幻想」を作り出す皮肉な結果になっているのです。

聖書は人間が「男と女に創造された（創世記1:27）」と記しています。人間が創造の秩序として男性と女性であるという事は間違いのない事です。しかし、その男性と女性がどのような違いであるかをこの箇所は記していません。聖書の様々な箇所に記されている男性や女性の有り様が、創造された人間の「男と女」に当てはまるのか、それとも墮落後のエバに言われた「お前は男を求め、彼はお前を支配する（創世記3:16）」という呪いの状況に属するものなのかは、それぞれ個別の箇所で議論されなければならないでしょう。そしてその結果として「男性幻想」「女性幻想」から解放された「男性」性「女性」性が必然的に示されなければならないでしょう。

男性性、女性性が新たに問われると時に、必然的に家庭についての理解、そこにおける「父」と「母」の理解も問われる事になります。いみじくも、70周年宣言は教会を「母なる教会」と改めて語りました。一体「母」とはなんであるのか。通り一遍の型どおりの母のイメージに留まらない、「母」の本質を問う事は、私たちの教会の課題となるはずです。

家庭、夫婦についても聖書は「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる（創世記2:24）」と述べています。男性と女性が夫婦となり、家庭を形成して、子どもを育てる。改革派教会は家庭形成を前提に牧会や教育を行っ

ている事は言うまでもありません。しかし現実には、むしろ夫婦子ども揃って教会に出席している家族の方が少数でしょう。夫が未信者の家庭、親が未信者の家庭、子どもが教会を離れてしまっている家庭があります。更にそもそも家庭のあり方自体が、型どおりの夫婦と子ども揃った家庭ばかりではありません。型どおりではない家庭に型どおりの家庭モデルや型どおりの家族の役割を示しても意味がないばかりではなく、むしろつまづきを与えるものになってしまいます。

聖書が、人を男と女に造られたものであるとし、その男と女が家庭を築く事を示しているのは事実です。その際、機械的に「父親である男は治め、母親である女は受け容れる」というところに留まらない、もっと本質的な「男と女」「父親と母親」その父母によって形成される家族像が見出されていなくてはならないのです。

「男と女」がなんであるかということについては、今日はまだ語るだけのものを持ちませんが、今日は一つこれだけは明らかであろうという事を示したいと思います。それは子どもを育てる場である家庭というものが、男と女という異なる賜物を持った複数の人によって形成され機能するものであるということです。前述のように現在の家族の形態は極めて多様になっております。その中で核家族化はまだ良い方で、中には親と子が一対一の関係だけの孤立した家族、孤立した一人一人がただ同居している家族も少なくありません。しかし、家族が「（男と女の）二人は一体となる」ものであるならば、これらの家族は、家族としては補われる必要がある存在であるといわなくてはならないかもしれません。

そのような孤立した家庭、孤立した家庭の構成員を補う役割を果たす事ができるのは、神の家族である教会の役割の一つでしょう。教会には、男も女もおり、多様な世代、多様な人間関

係が存在します。子どもを育てる、特に契約の子である子どもを育てる務めが夫婦だけ、女性だけに押し付けられるのではなく、神の家族である教会の務めとして受け入れられる事、それは教会の持つ本質的な務めの可能性と言えるの

ではないでしょうか。

教会が固定化した人間関係を押し付けるのではなく、本当に本来的な人の賜物を活かし、神の前にある人間関係を築き、次の世代を育てる場となる事ができるように祈ります。

子どもの教会のご紹介

名古屋岩の上教会

「若者を歩むべき道の初めに教育せよ。年老いてもそこからそれることがないであろう。」

(箴言22:6)

●2015年の子どもの教会の歩みにおいても、「主御自身があなたに先立って行き、主御自身があなたと共におられる」(申命記31:8)の約束どおり、先立ち、導き、養い多くの恵みをお与えくださいました。

昨年度は、3月15日の父母懇談会に始まり、毎回の教師会で主日礼拝式の子どもたちの過ごし方について、熱心に話し合われました。とても感謝なことに小学校低学年男子が教会にたくさん与えられているからです。ヨシュア記では、人々は困難にぶつかると“人”であるヨシュアに求めました。しかしカレブは、どんな問題・困難にも“主”に祈り求め(ヨシュア14:6～12)、それによって嗣業の土地を与えられました。主イエスに依り頼むならば、困難にみえる事柄にも、対処「できる」道が開かれ「嗣業の地」が与えられます。試行錯誤の段階で、礼拝中まだまだ迷惑をおかけすることが多い状態です。しかし座る場所等を工夫しながら「おしゃべりの声がちょっと大きかったね」「礼拝にいっしょにあずかれて嬉しかったよ。静かにできたね」等、率直なご意見やご指導を子どもたちに直接与えられ、今しばらく子どもたちの成長を見守っていただけるよう、祈りのうちにあります。

「子どもの教会礼拝式」は、子どもと大人を合わせて「毎週30名余の礼拝」をささげています。契約の子どもたちは、ほとんどお休みをしないで毎週出席し、そのために出席人数の

平均が3名増となりました。「サマーキャンプ」には10名、「クリスマス会」には28名の新しいお友だちが、契約の子どもたちのおさそいによって参加することができました。「クリスマス会」直前のチラシ配りや、会場準備・清掃など積極的に奉仕を担う姿が見受けられました。また、5月にはひとりの赤ちゃんが、「幼児洗礼入会式」の恵みに与りました。契約の子どもの信仰告白はありませんでしたが「子どもと親のカテキズム」を用いて、中高生のための「信仰告白準備学び会」が引き続きなされています。「子どもの教会の礼拝式」における司会の奉仕・奏楽の奉仕、「主日礼拝式」においては献金のお祈りの奉仕に加えて、去年はキャロリングでの聖歌隊の奉仕をささげることができました。子どもたちの美しい賛美の歌声は、高齢者・乳幼児の心に暖かく響きました。また、戦争反対のデモパレードやスタンディングにも参加しました。「殺してはならない」の第六戒を告白する子どもたちが、これからも“戦後”に生き続けるための信仰の戦いも経験しました。契約の子どもたちは、主イエスの教会の交わりの中で、時には三步進んで二歩下がるようなことがあっても、毎週確実に成長しています。神さまから与えられた「主を畏れる」信仰は、主以外のものを恐れない勇気と自由を養います。教会の祈りのうちに生まれた「主を愛する」信仰は、自分と隣人を愛し生かします。この奉仕に召された子どもの教会の教師が、御言葉により「忍耐強く、十分に教え」(テモテⅡ4:2)、子どもと共に祈り、更に信仰を一つにして献げていくことができますよう、教会の祈りに支えられていることを感謝しています。

出席人数（平均）

教師14名

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
幼 小	10	9	13	12	9	14	13	10	10	10	10	10	11
中高生	1	2	2	3	5	2	3	1	3	2	2	2	2
子ども合計	11	11	15	15	14	16	16	15	16	12	15	12	14 ↑
（昨年）	12	9	10	14	11	11	10	10	12	9	10	12	11
大 人	16	16	16	16	15	16	18	15	16	15	15	13	16
全体合計	27	27	31	31	29	32	34	30	32	27	30	25	30

●「子どもの教会」礼拝式

「子どもの教会」は、毎主日9時～10時まで礼拝式、その後分級に分かれます。分級は、嬰兒・幼稚科、小学科男子下級、小学科男子上級、小学科女子、中学科男子、高校科男子、中高科女子、学生科の八つに分かれ、それぞれが工夫を凝らして子どもたちに向き合っています。ほとんどのクラスが二人の教師で担当しています。月初めの主日は、合同分級をします。誕生児が、前に出て皆からの質問を受けたり、賛美・牧師の祈り・担任からのお誕生日のカードのプレゼントの後、ゲームをしたりして楽しい時を持ちます。分級が終われば、子どもたちは外に出て、体を動かします。特に男の子たちにとって一番、楽しい時なのかもしれません。

毎週、週報を作成し（※写真添付P.17）、礼拝式の中で主の祈り、十戒、カテキズムの交唱、暗唱聖句を唱えます。昨年から教師と一緒に子ども、司式の奉仕を担っています。献金は、かつて地域の子どもたちが大半来ていた関係で、子どもの教会では行っていません。その代わり、主日礼拝式では子どもたちは、自分たちで献金を集め、大人の献金の祈りの前に、感謝の祈りをささげます。教会で編んだ祈りをささげますが、この奉仕を喜んで担ってくれるのは嬉しいことです。（※添付、感謝のお祈り例文）大人たちと共に、礼拝の中で一番大きな「アーメン」の声が会堂に響きます。

説教は、かつては、牧師が担当していましたが、献堂後しばらくしてからは、教師たちが年に2～5回の割合で担当しています。毎回の説

教は、祈り備えられた見事な子ども説教がなされ、各々の信仰と賜物が生かされています。私たちの教会の大きな誇りです。

●今年度に入って、中学1年生と小学6年の子の二人の洗礼入会式・信仰告白のための準備クラスが始まりました。クリスマスを目指して自覚的な良き学びと訓練が始まっています。二人が主の御体を弁える共同体に加えられるための信仰が深められていますことを感謝いたします。

昨年度までは、「おはなしの部屋」（絵本の読み聞かせ・クッキングや手芸・交わり昼食会）や「クリスマス会」「イースター」から繋がった地域の子どもたちが通っていましたが、現在は、大半が契約の子となっています。二年間続けられた「おはなしの部屋」の奉仕者が与えられ再開できるよう、地域の子どもたちのための取り組み（例えば“子ども食堂”や“中高生のためのテラコヤ”など）、伝道を願う祈りが捧げられているところです。

※献金感謝のお祈り 例文

天のお父さま。

わたしたちは、イエスさまによって神さまの子どもです。今週も、イエスさまを信じて、感謝しながら、あそんだり、勉強したり、喜んで過ごせますように。うれしいときもかなしいときも、天のお父さまのお名前を呼んで過ごせますように。意地悪な心とたたかって、お友達に親切にしてあげられますように。自分のことだ

けでなく、お友達のためにお祈りできますように助けてください。神さまのお名前がほめられたるように僕たち私たちこの献金をお使いください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

天のお父さま。

この献金を神さまのおはたらきのためにお使いください。私たちも、神さまのおはたらきのためにお使いください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

天のお父さま。

先週の一週間、神さまは、僕たち私たちに食べもの飲みもの、着るものや住む家など、必要なものをすべて与えて下さいました。けれども一番すばらしいお恵みは、イエスさまが私たちと一緒にいてくださったことです。汚い心や悪い行い、僕たち私たちの罪をイエスさまの十字架によって赦して、神さまの子どもとして、愛して下さいましたことを心から感謝します。今、献金しましたお金を神さまのお働きのために、教会のためにお使いください。イエスさまの救いがすべての人に伝えられますように。僕たち私たちも、神さまに喜ばれるようにお祈りを忘れないで過ごせますように。

イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

天のお父さま。

わたしたちは、イエスさまによって神さまの子どもです。わたしたちが生きるのは、神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光を現すためです。そのために今、喜びと感謝をもって献金を捧げました。教会の働きのためにお使いください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

天のお父さま。

わたしたちにどうしてもひつようなものをまいにちお与えてください。それは、日ごとの食べ物と罪の赦しです。そのためにこの献金をお使いください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

天のお父さま。

この献金を神さまのおはたらきのためにお使いください。私たちも、神さまのおはたらきのためにお使いください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

天のお父さま。

わたしたちにどうしても必要なものを毎日お与えてください。それは、日ごとの食べ物と罪の赦しです。そのためにこの献金をお使いください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

天のお父さま。

わたしたちは、イエスさまによって神さまの子どもです。わたしたちが生きるのは、神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光を現すためです。そのために今、喜びと感謝をもって献金を捧げました。教会の働きのためにお使いください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。 (校長 相馬直子)

現状と課題

1. 近隣の子どもたちへの伝道

「現状と課題」という題を与えられ、黙想したとき3点の課題を示されました。私どもは、以前から祈りの課題として「教会近隣の子どもたちを教会に集めてください。」があります。切実な祈祷課題です。現在、近隣からの子どもたちの礼拝出席者は皆無に等しいからです。現在の子どもの教会出席者構成は、会員の子（契約の子）がほとんどで1名が近隣から来てくださっ

ています。(2015年度 子ども出席平均14名)
ただし、クリスマスや夏期キャンプなどの集会には、近隣から多くの子どもたちが集います。しかし、主日礼拝式にはつながりません。近隣の子もたちが導かれることを心から祈っています。

2. 信仰継承

今年、小会は、子どもたちが中学校入学前に牧師と個別な面談と学びの時を設けることを決議しました。これまでは、子どもたちが自覚的に信仰告白、洗礼入会の意思を述べることを促しつつ見守ってきました。しかし、中学入学を迎える子どもたちにとって、教会生活を送る大きな選択の時となります。その時こそ、神と向き合い与えられた信仰について熟慮するときとするためのものです。

「信仰継承」の課題は、今、日本において特に意識しなければならない時代なのかもしれません。聖書と違う価値観、多様な情報は無菌状態の教会生活から一歩外に出てみれば、「善悪の知識の木」のように魅力的に見えるものです。年齢に応じた彼らの日々の悩みに耳を傾け、信仰を温かく見守り育てていただくことを教会共同体で携わっていくことの大切さを感じています。

3. 「楽しい教会」

子どもたちが神から与えられる「喜び」を受け止め損なえば、教会生活も礼拝時間も「苦」になってしまいます。ときに、子どもたちから「教会はつまらない」「行きたくない」という言葉を聞きます。本音でしょう。そんなときこそ彼らを孤立させず、注意深くその話を聴き取る必要があるのではないのでしょうか。神の御手のなかで自由にフィールドを走る喜びを実感してほしいからです。私どもは、子どもたちに「あなたは神さまに愛されている」と伝え、心から喜びのうちに生きて欲しいと願っています。「教会は楽しいな！」といえる実感は、主イエスを通し神と出会い、主イエスと共に生きる喜びに

包まれたときに持てると思うのです。

4. 課題に向き合う姿勢

これらの3つの課題は、名古屋岩の上教会固有のものではないでしょう。もう語りつくされた古典的課題かもしれません。確かに、現状を把握し課題を見出すことは必要です。しかし、その現状に落胆しすぎてはならないと思うのです。教師たちは、説教奉仕のとき、誰よりも語る者自身が御言葉によって教えられ、聖霊の導きにより語るべき言葉が備えられることを経験していると思います。これは、主イエスに焦点を合わせ、祈り、聖霊によって導かれる恵みに他なりません。ですから私たちは、「教会の課題」に対して、教会の頭、信仰の源である主イエスに焦点を合わせ、そこから信仰の姿勢を正していただくしかないと思うのです。あのトマスが、主イエスの脇腹に目を移し、手を伸ばしたとき、初めて見える真実の光景があったはずで。子どもは「課題」に対して、感謝をもって主イエスを見つめ、祈りをもって始め、閉じたいと願います。神の愛は、既にキリストのからだなる共同体である「教会」に鮮やかに十分に注がれ、映しだされているからです。(長老 渡辺史朗)

教師会について

当教会の子どもの教会は第三主日に教師会を開催しています。教師会には、教師に加え補助教師も参加しています。毎回、15名余の教師が集まる会議ですから当教会のもっとも大きな会議と言っても過言ではありません。わたし自身は、牧師として必ず陪席しています。わたしの出番は、主に「教案研究」に対するコメントです。翌月の担当日の説教奉仕者が教案研究を担当します。最後に「このようなことを話したいと思う」と結ばれます。このことはとても大切です。何を告げるべきか、語るべきか、およそひと月の間に、黙想は深められ、また伝えたいことは修正させられたり、変化させられたりします。それで構いません。しかし、何を告げ

るのか、そこを絞り込むことができていれば、教案研究は相互に有益な時間となります。ただし問題は、ここに力を入れると時間超過になってしまうと言う事です。そして、わたしのコメントも時に長くなって、さらに超過させてしまうことも少なくないので、悩ましいところです。しかし、基本的にはこの時間はまさに教師会の一つの大切な要となるプログラムであることは間違いがありません。

現在の課題は、分級の内容、状況、子どもたちの霊的な成長について分かち合う時間が欠けているという点です。とりわけ、私自身は分級を担当していませんのでひとり一人の信仰について、もっとも把握できていない教師かもしれません。それを克服するために、第五主日には「カテキッズ」という集会を継続しています。本来のコンセプトは、契約の子たちと少なくとも一年に一度、必ず一対一で祈りの時を持つというものです。しかし、実際には「遊び」の面に比重が置かれて来ています。そしてそれもまた悪いことではありません。

今夏、小会と教師会とはそれぞれ熟議を重ね（教師会には必ず長老は陪席しています。教師でもあるからです）、一つの重大な決議へと導かれました。中学に入学する前の契約の子には、「信仰告白」を意識した個別の面談と学びの時を必ずもうけるということです。これまで、契約の子に「そろそろ……」と勧めることはほとんどしたことはありませんでした。しかし、これからはこの時期にすべての子たちに促すこととなります。その経緯について記すスペースがありません。それを強力に促すきっかけとなったのは、小学校6年生と中学校1年生の信仰告白、成人洗礼の願いを父母から伺ったことがありました。この二人の女の子たちと共に「子どもと親のカテキズム」を用いて、準備の学びを7回ほど重ねました。主日の夕刻のこの学びは牧師自身にとっても疲れが癒されるほどの楽しい時ともなりました。当初、二人とも志願され

たのですが、諸事情によって延期となりました。しかし、それぞれこれまで以上に深く信仰を求めて励んでいることは大きな励みです。一方で、ローティーンの子もたちが現住陪餐会員となる事に対する教会と親による配慮の問題については、やはり継続的に親の信仰教育の重要性について相互に確認しあいました。教会は生きた共同体です。絶えず脱皮して行く側面があります。とりわけ歴史の浅い教会ですから教師会としての経験をいよいよ深めて行きながら、聖書の信仰と現状に即した歩みを重ねて行けるようにと期待しつつ親と子と共に歩んでまいりたいと願っています。

（※実際の様子につきましては、ぜひ教会のフェイスブックをご覧ください。）

※参考資料

教会学校教案誌第20号所収

「連載 日曜学校教師会のために」より転載 第11回「教師会形成」（一部、加筆修正）

福音の本質と教会共同体

日曜学校の姿や雰囲気は、集う子ども達によって異なると思います。しかしそこで、決定的に影響を与えるのは、教師自身の存在であろうと思います。日曜学校の営みは、日曜学校教師によって担われ、一人ひとりが担任の子ども達と向き合うのですから当然のことです。そこで、教師個人の信仰の資質が決定的に問われてまいります。この点をなおざりにして議論することは、机上の空論になるおそれがあります。この世の学校組織において、教師個人の資質が決定的に重要であることは、お互いに経験済みのことではないでしょうか。

確かに神のみ業も、ひとりの突出した賜物と信仰の教師によって担われる面があります。使徒たちの例を挙げれば、すぐに分かるだろうと思います。2000年の教会の歴史においても「特別の名前」が無数に与えられてまいりました。

しかし同時に、歴史に編まれなかった無名の奉仕者たちが厳然と存在しています。熱心で献身的な信徒たち、とりわけ婦人信徒たちの奉仕なしに神の民の歴史を語ることはできません。

そもそも教会の業は常に、共同体的なものです。簡単に言えば、チームプレーで担われるものです。日曜学校もまたまさに教会の業です。教会の教育と教育的伝道のための機関に他なりません。たとえば、まさに突出した、個性的な伝道者の代表のような使徒パウロは、その手紙の冒頭で、ほとんど「パウロとシルワノとテモテ」から書き送りますと告げています。いわばこの手紙は「共著」であると言うわけです。しかし、実際の著者は、パウロ一人です。それなら何故、そのような書き方をしたのでしょうか。それは、パウロの伝道はいつでも、共に働く同業者との「交わり」に支えられてのものであったからです。使徒パウロは、「キリストの福音」という公的、普遍的福音を実に「わたしの福音」（ローマの信徒への手紙第2章16節）とすら呼びました。それほどまでに福音を自分のものとしていた彼が、何故、「シルワノとテモテ」と書き加えたのでしょうか。シルワノやテモテはパウロの単なる助手ではありません。彼らの名前をきちんと記したのは、人間的な礼儀や配慮からではなかったはずです。キリストの福音とは、実に、彼らとの具体的な交わりの中で学びとらされ、体得されたものに他ならないからです。逆に言えば、共に奉仕し、共に祈りあう交わりなしに、キリストの福音の全貌を知ること、その本質を究めることもできなかったのだと思います。そして決定的に大切な真理は、福音が語られ、信じられるところには、必ず、キリストの教会（交わり・共同体）が生み出され、形成されるということです。そして福音の真理と恵みは、交わりのなかで確かめられて行くのです。新約聖書のほとんどが、教会宛、共同体宛に書き送られているのを見るだけで自明のことだだと思います。個人への手紙もまた、当然、

交わりを深めるためのツールに他なりません。要するに、キリストの福音は、教会共同体を生み出し、形成させる力そのものなのです。福音はまた、教会の交わりのなかで、真実に証されるものです。ここに福音の本質があります。スピーカー（本体）は響かせる箱に組み合わされたとき豊かな音色を響かせることができます。福音もまたまさにそれが生み出す信仰共同体と不可分なものです。キリスト者相互の交わりによって、交わりにおいて、交わりを通して豊かに響き渡るものなのです。

子ども達の福音的共同体の中核としての日曜学校教師会

上述の真理に基づけば、日曜学校の営みが正しく実るためには、子ども達による、子ども達のための福音的な共同体の存在が求められることも自明になるのではないのでしょうか。

（※私どもは、すでに連載後ほどなくして名称を「子どもの教会」として活動を始めて現在に至っています。—そもそも、「日曜学校」の名称に現れている重要な課題についても、既刊において何度か論じています—その中核は、契約の子たちです。しかし、ここにおいても悪戦苦闘は続けられています。契約の子たちどうしが仲良くなるための工夫や手助けも必要となります。一方で、まさに子どもどうして励ましあったり、教会から離れかかっている仲間に声掛け（メール、ライン）をしているようです。子どもたちお信仰の成長にとって同世代の友の存在は、まさに決定的な影響を与えます。親も教会も中大会へのキャンプや集会出席を、諦めずに促し、励ますことがどれほど重要であるかと思います。）

このような子どもたちの交わりを養い、育てる中核になるのが日曜学校教師会に他なりません。子ども達は、最初は、福音の言葉のなかにその力を見、これにあずかるよりも、むしろ福音によって共鳴させられている教師の存在と教

師同士の交わりの中に福音の力を見るのだと思います。しばしば言われることですが、教会が好きになるのは、教師同士が互いを受け入れあい、自分を受け入れてくれているその安心感にあるのだと思います。まさに、居心地のよい場所となるのです。そして、子どもたちは教会の交わりへと招き入れられることによって福音を「見」また「知る」ようになるのではないのでしょうか。

これはまた、教師自身が体験していることではないのでしょうか。もしも、教師会に出席することが苦痛であれば、よい奉仕を望むことは難しくなると思います。逆に、共に祈り、支え、励ましてくれる先輩、後輩の信仰の仲間たちがいれば、説教の準備に苦しみ、分級教案準備に焦って、責任の重さに押しつぶされるようなときでもまた新しくやる気がわくと思います。

さらに求めたいことは、分級の生徒との交わりそのものから教師が福音的な慰めを受けることです。第10号でも取り扱いましたが、分級において、単に、教える人と教えられる人という区別だけではなく、福音による交わりを育てるという意識をもって、教師が奉仕することが重要です。子どもの信仰と成長から教師が慰められるのです。子どもたちとの福音的な交わりからも教師は育てられるのです。そしておそらく長く教師を続けておられる方々は、子どもたちから教えられ、励まされる経験を積み重ねて来られたからではないのでしょうか。

楽しい教師会をめざして

「楽しい教師会」あるいは「楽しい奉仕」などという表現は、よろしくないのでしょうか。確かに奉仕には犠牲が伴います。しかし、奉仕によって喜びや楽しさが与えられることも事実です。そして日曜学校こそ楽しい奉仕にすることがあると思います。なぜなら、教師が楽しんでいなければ、子ども達に楽しい日曜学校を味あわせることなどできないからです。

個人的な感想で恐縮ですが、中会会議や大会に出席して、会議そのものから恵みを受け、励まされたという経験は、残念ながら、ほとんどありません。しかし、各個教会の諸会議は、そうではありません。それは、会議が取り扱う範疇が異なるからです。もしも、各個教会の各会議、諸委員会が、出席者にただ重荷となるようであればその教会や、会自体が不健康な状況にあると診断することは的外れではありません。

日曜学校教師会を、楽しい会議にするためには、子ども達を生かすために、楽しい教師会は不可欠だという「理解」の共有と、「心がけ」が大切です。その基本は、「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。」(ローマの信徒への手紙第12章10節)に求められるでしょう。また、交わりを育てるための鍵となる信仰の真理は、「詩篇と賛歌と霊的な歌によって語り合い」(エフェソの信徒への手紙第5章19節)という御言葉にあると思います。賛美とは、まさに神に向かうべきものです。人に聴かせるための賛美歌は、芸術でしかないでしょう。しかし、ここでパウロは、歌を歌うその心のままに、お互いに向かって語り合いなさいと勧めるのです。神に感謝し、賛美する思いのままに、兄弟を見るわけです。わたしは、ここに、交わりを育てる鍵があると考えています。会議においてこの御言葉を意識することが大切です。言うまでもなく、これらの本質は、信仰の課題です。これらを、精神論(品性とか性格)で扱うことは大変に危険です。同時に、案外、これは人間の普遍的な真理ですが、交わりを築く「技術」(言い方)を磨く修練に欠けることが交わりを損なう場合が少なくないことも指摘しておきたいと思います。

教師会で何をするのか

1. 教師会は、現実には、ごく限られた時間でなされると思います(名古屋岩の上传道所では、毎月第三主日の1時30分から4時過ぎまで

行われています。中高科は、その後さらに、独自に打ち合わせのときを持ちます)。もし、月に一度の教師会であれば、どれほど少なくとも2時間は必要となるでしょう。

多くの教師会の現実はいきおい、事務的なことを優先する傾向にあるかと思います。年間計画、行事計画、当月の礼拝式・分級の課題・問題の処理、賛美歌練習、子ども達の信仰的状况・課題の共有、翌月の計画・準備・確認などなど。それだけでもきちんとなすのは、大変なことです。しかし、もとより、それだけで終わらせてはなりません。教師会の主要な目的は、教師の信仰の研鑽にあるからです。

2. 教案研究にどれだけ時間を費やすことができるか、それが、教師会の充実の一つの要素となります。弊誌発行の一つの大きな意図はまさにそこにありました。弊誌を採用しておられる教師会は、時間のある限り、聖書研究、カテキズム研究、説教展開例を共同で読んでいただきたいと思います。しかし、一月4週のすべてを読むことも大変です。一週分だけを集中的に取り上げてくださることも一つの方法です。あるいは、それに加えて、「単元のねらい」だけでも、すべて読んでいただくことも助けになるかと思います

3. 「説教の演習」「教授法の研究」など、教師としての技術の研鑽の場を設けることも大切です。毎月持つことは、おそらく不可能でしょうから、行事計画の少ない月や、あるいはそのために特別の教師研修会を開くこともすばらしいと思います。自分の分級を牧師や他の教師に陪席してもらい、批評を受けることも有意義です。そのように、仲間の声に心を開いて、耳を傾けることができれば、それだけですでに十分な効果があると言っても過言ではありません。

4. 教師の動機付けが常に新鮮になされることも重要です。読者の皆様に、教案編集部と執筆陣の日曜学校への情熱が伝われば、それだけでも発行の労苦が報われます。なぜなら、教師

たちが、もしも「情性」で奉仕し始めるなら、子ども達を躓かせることにさえなると考えるからです。そのような日曜学校であれば、子ども達を主に導き、ささげることなどどうして望めるでしょうか。牧師を始め、校長の重要な務めの一つは、常に、教師を召しに応えるように励ますことです。豊かな実りを期待する信仰を富ましめるように、動機づける務めが与えられていることを自覚していただきたいと思います。現在は、各中会で、教師研修会・訓練会が行われています。牧師や校長は率先して出席し、教師たちに参加と研鑽の必要性を訴えていただきたいと思います。

5. 教師会は、自分自身の課題、また担任の子ども達の課題を皆で祈ってもらう場所でもあります。教師会は、共に祈る仲間たちの集いです。祈りの課題は、山ほどあるはずですが、筆者は、日曜学校教師方は、週日の祈禱会に出席してほしいと考えております。それは、以下のこととも関連しますが、この尊い務めが、教師会だけの課題ではなく、教会全体の課題であることを祈りの課題とすることに通じるからです。

日曜学校教師会と小会・牧師との関係

「教会学校とは、教会の教育事業が主として行われる組織」(礼拝指針第28条)(※すべては97年発行の旧礼拝指針の条文です。09年に改訂された現行の条文(第113条)をご参照ください。第108条～115条)とありますように、日曜学校は、教会学校の監督、管理の下になされるものです。また、「小会は、すべての教会学校を監督し、その校長を選任する。校長は、牧師の同意を得て教師を小会に推薦し、小会はこれを任命する。小会は、教会学校の状況とその必要について常に報告を受け、その充分な活動に必要なものを備えるように配慮すべきである。」(第31条 ※→第114条)と日曜学校との緊密な関係を規定しています。日曜学校、とりわけ、契約の子の教育は、教会全体の最重要な

責務です。現在、憲法第三委員会では、礼拝指針の改訂作業がなされています。その第一次改正案では、幼児洗礼において、会衆の誓約を求めています。これは、大切なことと思います。現在の日本キリスト改革派教会式文には、受洗後の「宣言」において、「親と教会は、この幼子がイエス・キリストを、主また救い主として

信じ告白するように教え育てなければなりません。」と記してあります。つまり、教会をあげて、契約の子の信仰告白に向けて養い育てるべきことが勧告されているのです。そうであれば、日曜学校が、教会をあげて支援され、祈られ、関心を注がれてしかるべきです。小会と牧師の責任は重大です。
(牧師 相馬伸郎)

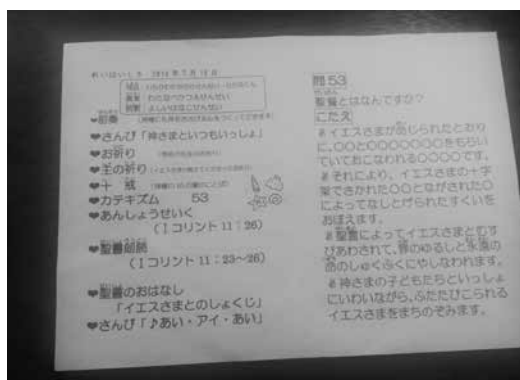
2015年 子どもクリスマス



ある日の教師会風景



週報



絵本に心を耕されて

「マローンおばさん」

(絵／エリナー・ファージョン、エドワード・アーディゾーニ
訳／阿部公子、茨木啓子 こぐま社)

望月鈴子（浜松伝道所信徒）

先進諸国と言われる国々の中で日本は自死率が非常に高いと言われています。貧困による生活不安や持病があって先の希望が持てない等、いろいろな理由が考えられますが、突き詰めてみると、安心して心と体と魂を休ませる居場所がないということではないかと思いました。

日本では、夏休みが明ける頃に子どもの自殺が増える傾向があるので、昨年夏休みの終わる頃、鎌倉市立図書館の司書をしている方が、図書館の公式ツイッターで次のようにつぶやき、注目を集めました。「もうすぐ二学期。学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしやい。マンガもライトノベルもあるよ。一日いても誰も何も言わないよ。9月から学校へ行くくらいなら死んじゃおうと思ったら、逃げ場所に図書館も思いだしてね。」この報道を知った時、教会がこういうメッセージを出せる状況が整えられるといいな、という思いが湧きました。

また近年、地球の自然環境の悪化によって世界的にさまざまな大きな災害が起っています。長い年月をかけて築いた家、家族、財産、故郷のぬくもり、それぞれの人々の心安らぐ居場所が奪われ、大きな痛み、悲しみ、困難を抱えて避難生活を余儀なくされている方々など多いことでしょう。世界には紛争・戦い等により、自国に居場所が無くなり、難民として国を出ざるを得なくなった人もたくさんいます。

人が「命」を与えられてこの世に誕生する時、ほとんどの場合、「たんじょうおめでとう!」と父・母・家族に心から喜ばれ、気持ち良い安



らげる居場所が用意されています。成長して活動範囲が広がっていくにつれ、居場所と言える所が増えていくことがあるかもしれません。反対に、何らかの理由によって心安らぐ居場所がない状況におかれる人もいるかもしれません。

「マローンおばさん」という小さな絵本があります。絵本というより、詩に黒いペンで挿絵をつけたものです。作者のエリナー・ファージョンは英国の児童文学者・詩人として活躍した方です。日本の児童文学者・おはなし会の語り手・ストーリーテリングをする方々にはファンも多いということです。この本から、私の心安らぐ“居場所”について考えました。

この本の帯には「その人のまわりには、いつも心安らぐ“居場所”があった」とあります。この本の主人公・マローンおばさんは著者ファージョン自身に似ているといわれており、ファージョンは人も動物も大好きで、彼女のところにはみんなの「居場所」があったということです。私たちにとって本当に心安らぐ居場所とは、“どこか”の場所でしょうか。あるいは“だ

れか”の傍らでしょうか。

私はこの本を時折手に取りページをめくることがありましたが、その度にマローンおばさんの孤独な暮らしに胸をしめつけられるような切なさを感じていました。今回、何度も何度も読み返しているうちに、今までとは全く違う思いが湧いてきました。内容はとても深い味わいのある豊かさをたたえていることに気づきました。

「マローンおばさん 森のそばで ひとり貧しく くらしていた。お皿には ひときれのパン だんろには なべひとつ 話し相手も じぶんだけ ひとりぼっちの さびしい暮らし。」物語はおばさんの孤独で貧しい暮らしぶりを描いて始まります。だれひとりたずねる人も、気遣う人もいません。そんなマローンおばさんのところに、ある冬の月曜日、弱りはてた一羽のスズメがやってきます。「まぶたは半分ふさがってくちばしもこおりついていた」小鳥を、おばさんは家の中に入れてやり、胸に抱いて言います。「こんなによごれて つかれきって！ あんたの居場所くらい ここにはあるよ」と。かわいたパンを一緒にかじりながら、仲間がいることを心から喜びます。

火曜日ネコが、水曜日母さんギツネと6匹の子ギツネが、木曜日ロバが、金曜日にはクマがおなかをすかせてやってきます。みんな傷つき、弱り、薄汚れ、お腹をすかしています。おばさんは、生きることに疲れ果てた動物たちを「あんたの居場所くらい ここには あるよ」、「神さまは ご存じさ、どんな動物たちだって みんな 生きていかなきゃいけないってことを」と言って家の中に迎え入れ、わずかな食べ物も、身を温める衣類、布も分け与えました。

ところが、土曜日の夜、ごはんの時間になってもおばさんは起きてきません。動物たちはロバの背におばさんを乗せ、木立をくぐり、山を越えて歩き続け、天国の門までおばさんを運びます。日曜日の朝、天国の門の前で目をさまし

たおばさんはびっくりして「ここは 私の来る ところじゃないよ」と言って帰ろうとします。すると門番をしている聖ペテロさまがおばさんに言います。「母よ、入って王座のそばへ おゆきなさい。あなたの居場所が ここにはありますよ、マローンおばさん」。

マローンおばさんの貧しさ、孤独で寂しい姿は、とても哀れで不幸に見えるかもしれない。でも、おばさん自身は養ってくださる神さま（ルカによる福音書12:22～34）、報いてくださる神さま（ルカによる福音書6:20～26）を知っており、信じていたのでちっとも不幸とは思っていなかった。心の中は平安に満ちていたのではないと思う。そして自身が誰からも顧みられない、どこにも行き場所のない人であったからこそ「あんたの居場所くらい ここには あるよ」と弱り、疲れ果てている者を迎え入れ、貧しい食卓でも分かち合うことのできる温かで 広く大きな心を内に宿していたのです。

貧しく孤独で、暖炉の火を一人で見つめていたマローンおばさんのもとに、神さまは、彼女に頼る傷ついた弱い動物たちをお送りになり、仲間として、家族として身を寄せ合い、共に暖炉の温もりを感じる喜びの時をお与えになった。地上の命が終わりに近くなった時、だれ一人看取るものがなく召されたのではなく、天国への道行きを見守る者をそばに送られ、王座のそばに居場所が用意されていました。マローンおばさんの孤独で貧しい暮らしぶりを描いて始まったこの物語は、大きなどんでん返しがあり、栄光の神さまのそばに迎えられたのでした。天国に、神さまの傍らに居場所が用意されているとは何という慰めでしょう。

イエス様は、「私の父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか」（ヨハネ福音書14:2）と語られました。また、「わたしたちの本国は天にあります」（フィリピの信徒への手紙3:20）。私たちは、イエス様ご自

身が、居場所を天国の神さまの傍らに用意してくださるという喜びを与えられているのですね。

「マローンおばさん」を集中して何度も読み返し、この本の中に流れているのは孤独な切な

さ、寂しさではなく、暖炉のそばで心を通わせ合う仲間と共にいて味わう温もり、豊かな慰めでした。「教会に、神さまのもとにあなたの居場所がありますよ」。いつも温かく、この言葉で呼びかけたいと思います。

教会・国家・平和・人権

—とくに若い人々のために (4)

木下裕也（名古屋教会牧師）

十五年戦争期の日本 (1)

昭和の時代に入るとともに、日本は急激に方向転換します。大正デモクラシーを吹き飛ばすような軍部独走の暗黒時代、戦争の時代に入りますのです。

1929年、アメリカの金融市場から世界恐慌^{注1}が発生し、これが日本にも及んで昭和恐慌と呼ばれる大不況となります。国民の生活は深刻な危機におちいり、会社の倒産があいつぎ、失業者が街にあふれます。とくに農民の生活は極度の貧しさに見舞われ、農村は解体の危機に見舞われます。都市でも農村でも労働運動やストライキ^{注2}がひんばんに起こりますが、警察の厳しい抑圧によってその力はそがれていきます。

そうした不安定な状況の中でにわかに台頭してきたのが軍部です。大日本帝国憲法には、国家の権力をおさえるしくみがもともと欠けていました。軍事作戦等については、国会も大臣も軍に口出しできないことになっていました。もともと軍部の独走を許しがちな背景があったのです。とくに危機の時代には戦争を起こすことで国民の目を行き詰まりの現実からそらせるという短絡的な考えにおちいりやすいのです。

軍部の暴走をだれも止めることができませんでした。1931年、満州^{注3}にとどまっていた陸軍部隊がいつせいに中国軍に攻撃をくわえ、南満州鉄道沿線のおもな都市を占領します。これが満州事変で、日本が戦争に踏み込んだ第一歩です。新聞等のマスコミはこの軍部の行動を支持し、国民の間にも戦争をあおる空気がひろが

ります。翌年には満州を日本の植民地としますが、国際連盟^{注4}はこれを非難し、このことを契機に日本は国際連盟を脱退し、世界の中で孤立をふかめていきます。

国内ではこの前後から軍部による独裁政権の樹立がぐわだてられ、1932年5月には当時の犬養毅首相が暗殺されて^{注5}政党内閣がたおれ、海軍大將を首相とする挙国一致^{注6}内閣が成立します。1936年2月には昭和維新をうたい、いっきに軍部独裁政権の実現をねらった青年将校らがクーデター^{注7}をおこし、主な大臣を殺傷し、陸軍省、参謀本部、国会、首相官邸等を占拠し、戒厳^{注8}令がしかれます^{注9}。クーデターそのものは鎮圧されますが、時の内閣はたおれ、軍部の力はさらに強まっていきます。

注1 経済がパニックの状態になること。商品価格の暴落や破産、失業者の増大等が起こる。

注2 労働者たちが働く条件の向上をもとめて業務を停止すること。

注3 中国東北部。

注4 世界平和と国際協力を目的として1920年につくられた組織。加盟国50以上。

注5 5・15事件。

注6 国民全体が国の方向に染められること。

注7 法に従わない、しかも急激なやりかたで政権を奪うこと。

注8 戦時等に国の立法、司法、行政を軍の機関にゆだねること。

注9 2・26事件。

十五年戦争期の日本 (2)

戦争の影が色濃くなるにつれ、軍部に対するいっさいの批判をゆるさない風潮が国をおおいます。1925年には治安維持法^{ちあんいじ}が制定されます。軍国主義、国家主義的なありかたに反対する人々を厳しく取り締まる法律です^{注1}。大学教授の学説が国体に背くという理由で非難されたり、多くの学校の先生が警察に引かれたりしました。プロレタリア^{注2}作家の小林多喜二はこの法律により捕えられ、拷問を受けてなくなりました。大正の時期のデモクラシーの空気はまたたく間に消し去られ、戦争反対の意見は封じられました。人々の権利や自由が極限まで奪われ、国民が戦争にかりたてられる時代となったのです。

1937年7月、日本軍は中国のおもな都市を攻撃、占領し、中国との全面戦争に突入します。日中戦争が拡大していく中、政府は国家総動員法を制定します。議会での承認なしに勅令^{注3}によって戦争に必要な人や物を集め、動かすことができるとするものです。これによって労働者たちもマスコミも、あらゆるものが戦争のために動員されることとなりました。

政府はその前の年から国民精神総動員運動を展開し、挙国一致、尽忠報国、堅忍持久といったスローガンをかけて国民の生活をくまなく監視し、統制する体制を強化します。あわせて皇国史観^{注4}にもとづく「国体の本義」という文書をつくって学校や役所に配り、小学校では国定教科書を用いて歴史教育の定着をはかりました。

植民地の朝鮮では内鮮一体のかけ声のもと、皇民化教育が徹底されました。朝鮮の文化はいっさい否定され、天皇崇拝と日本語の学習が強制され、朝鮮語を用いることに歯止めがかけられました。教育勅語が教育の理念とされ、日の丸、君が代が強いられました。

とくに日中戦争以後、日本は同化政策の一層の徹底をはかります。ソウルには朝鮮神社がたてられ、神社参拝が強要されるようになります。これを拒んだ朝鮮のクリスチャンたちは逮捕投獄され、多くの人々が殉教の死をとげました。さらに朝鮮の人々から名前を奪い、日本名を名乗ることを押し付けます^{注5}。そうした中、朝鮮の人々も日本の戦争にかりたてられていくことになるのです。

注1 ホーリネス教会の牧師たちもこの法律によって取り調べを受け、投獄され、中には命を落とす人もありました。キリストの再臨によってそれまでの国家の秩序があらたまり、神の国が到来するとのホーリネスの教えが国体の尊厳をそこなうものと見なされたためです。

注2 資本家たちに酷使される労働者の苦しみを描くプロレタリア文学運動が大正から昭和のはじめにかけて大きな勢力となりますが、弾圧されます。

注3 天皇の命令。

注4 国家神道にもとづき、日本の歴史を現人^{あらひと}神天皇^{かみ}が永遠に支配する神国とみる見方。

注5 ^{そうし かいいい}創氏改名。

十五年戦争期の日本 (3)

日中戦争が中国の抵抗^{こうちやく}にあって膠着状態におちいり、泥沼化し、中国から兵をひき上げることをめぐるアメリカとの交渉も暗礁にのりあげたことで、政府はついにアメリカ、イギリスとの戦争に活路を見出す決断にいたり、ドイツやイタリアと手を結んで暴走します。この戦争すなわち太平洋戦争は、戦争を指導した者たち自身にも勝算のなかった無謀なくわだてでした。

太平洋戦争が始まるとともに、国民生活は戦争一色に塗りつぶされました。日中戦争以来の

徴兵の強化によって国民は国家に徴用されて国の定める職場で働かされ、学徒動員^{注1}や婦人たちの勤労働員も行われました。学徒出陣^{注2}により多くの若い命が失われました。

太平洋戦争に突入すると、朝鮮半島は戦争の兵站基地^{注3}とされます。戦争が長びき、兵や労働力が足りなくなると、朝鮮人の強制連行^{注4}が始まり、日本の炭鉱等で酷使されました。その数は少なくとも73万人、その一割ほどが過労や栄養失調で命をおとすにいたります。従軍慰安婦として送られた女性は14万人と言われ、多くの人がなくなっています。また「皇軍」兵士としてかり出され、戦死をとげた人も2万人を超えました。日本はみずからの侵略の犠牲者である朝鮮人を、みずからの侵略戦争の最前線に立たせたのです。

戦争の長期化とともに国民の生活は苦しさを増し、とくに食糧の不足は命にかかわるほど深刻となりました。戦局は悪化の一途をたどり、多くの都市が空襲により焼け野原となりました。1945年7月にアメリカ、イギリス、中華民国は日本に対してポツダム宣言^{注5}を発表し、無

条件降伏を迫りますが、日本ははじめはなかなか承諾しませんでした。戦争指導者たちが国民の命と生活を守ることよりも国体の護持、天皇主権の維持にこだわっていたためです。受諾をしつつある間に戦争の被害はさらに拡大し、広島と長崎に原爆が投下されました。

8月14日、日本はようやくポツダム宣言を受諾し、悲惨な戦争は終わりを告げました。

注1 戦争による労働力の不足をおぎなうため、学生や生徒たちが軍需工場等で働かされました。

注2 学生、生徒たちが陸海軍に入隊し、戦地におもむきました。

注3 武器や車両を補給したり、修理したり、連絡をとったりする場所。

注4 本人の意志とかかわりなく、無理やり連れていくこと。

注5 朝鮮半島、台湾、樺太等^{からふと}を日本の領土から切り離すこと、軍隊を完全に武装解除し、戦争犯罪者を罰すること、国民主権の原理にのっとった新しい憲法を制定し、新しい政府を樹立すること等を求めています。

神様のみこころを祈る

保田広輝（長丘教会員）

【エフェソの信徒への手紙 6章18節】

「どのような時にも、“霊”に助けられて祈り、
願い求め」

聖書は、「どのような時にも祈りなさい」と言います。これは幸いな招きです。祈りに対する条件や状況など一切ありません。常に祈ることを神様はよしとし、どんな祈りも受け入れてくださいます。言い換えると、神様は私たちとの交わりを常に求めておられるのです。私たちには、いつでも神様と話すことができる特権が与えられています。

祈りは、イエス・キリストの御名の権威によって、天の父なる神様に届けられます。人間の熱心や努力によって、祈りが聞かれるのではありません。祈りは、イエス・キリストを通して、確実に父なる神様に聞かれます。イエス・キリストの御名によってのみ、私たちは神様の御前に来る特権が与えられ、神様に祈りを聞いていただくことができ、受け入れられるのです。

祈りは、神様が人間に与えられた素晴らしい特権です。世界の創造主である神様の御前に出て、話すことができ、交わることができるのは驚きです。自分のことを心から愛してくれる恋人や配偶者でさえ、どんな時も自分の話を聞いてくれるとは限りませんが、神様はどんな時も私たちの祈りを聞いてくださるのです。

でも、多くの場合、祈りは単に「～してください」と願い事をするだけにとどまり、自分からの一方的な会話で終わってしまいます。または、「苦しいときの神頼み」と言いますが、痛

みや苦難を経験しても、どこか自分の力で何とかかなと思っていて、自分の小手先で解決しようとしたり、上手くその場をしのいでしまったり、現状に甘んじて、何となく時を過ごしていることはないでしょうか。神様から答えを待とうとせずに、祈り終えた次の瞬間、すぐに解決に乗り出し、自分の行動に出てしまうことはないでしょうか。

しかし、痛みと苦難の中で、神様は私たちを取り扱われるのです。作家のC・S・ルイスは「痛みは神の拡声器である」と言いました。苦難を通して、人間の限界を思い知らされ、いかに自分が無力な存在であるかを示されます。どこにも行き場がありません。それで、ようやく私たちは神様を求めるようになり、神様に近づけられ、神様に身を委ねて、当たり前での日常では求めることのなかった、本気の祈りへと導かれるのです。

クリスチャンは祈ります。朝ごとに夕ごとに、習慣的に祈ることも幸いです。しかし、あるとき、私たちは本気で祈る必要があります。痛みや苦しみに押し出されて、とことん神様と話し合い、愚痴も嘆きも含めた自分の思いをすべて注ぎ出して、神様と真剣勝負の交わりをするのです。

でも、苦難のただ中で祈るとき、すぐに答えや助けをくださらない神様の沈黙に対して、私たちは不安を覚えます。救いの道が見えないので、不安しかありません。このような試練は私への裁きであろうか。神様のことが分からなくなります。それでも私たちは神様を無視することができずに、苦しみます。様々な考えが頭に

よぎり、こころ乱れて、眠ることができません。見える現実ばかりに目を留めてしまい、ますます苦悩してしまうのです。

でも、クリスチャンには特別な恵みが与えられています。イエス様を信じた私たちの内には、神様の霊が住んでおられるのです。神様が祈りを導いてくださるのです。長く続く真っ暗なトンネルの中で、信仰の揺らぎを感じたとしても、私たちの浮き沈む心の動きの中に、神様の御手が確かにあるのです。

私は難病のデュシェンヌ型筋ジストロフィーを抱えています。この持病の悪化で、手の親指以外は動かせない不自由な身体になり、19歳の時に、余命宣告を受けて、人工呼吸器を使うようになってから、「こんな人生では生きる意味がない」と、ずっと絶望しながら祈っていました。祈っていても、いつも暗い気持ちでしたし、「病気を治してください」と自分の願いを主張するばかりで、私は神様に思いを寄せていなかったで、いつまでも絶望していたのです。だから、これほどの苦しみの中に置いた神様にいらだちをぶつけ続けました。ひたすら神様の沈黙を感じる日々でしたが、それでも旧約聖書のハンナのように祈り続けました。まさに神様と格闘する祈りでした。

【新改訳 サムエル記第一 1章15～16節】

「私は主の前に、私の心を注ぎ出していたのです。……私はつのる憂いといらだちのため、今まで祈っていたのです。」

でも、日曜日はいつも礼拝に行き、毎日のように聖書を読んで祈る中で、少しずつ変えられていきました。この苦難が長く続き、いつまでも解放されないのはなぜだろうか。たまたまそうなっているのではなく、神様が意図的にそうしておられるのかもしれない。私は自分の直面

している苦難と神様の御心を関係づけていきました。み言葉に目を向けて、神様の御心に目を留めるように、変えられていったのです。

神様は、聖書の中で、私たちに対する神様の御心とご計画を表しておられます。聖書と祈りを通して、神様が私たちにお話しになることを聞くのが、神様との交わりです。祈りの時間に聖書を読み、神様の御心をみ言葉から見つけるのです。神様は、み言葉を通して、語りかけてくださり、人生に対する神様の御心とご計画を示してくださいます。

祈りとは、私たちの願い通りになることではなく、神様の御心が実現することであり、神様のご計画が成就されるために、私たちが変われることです。神様は私たちひとりひとりを通して働かれるからです。祈りによって、私たちが変えられていきます。

私はこういうプロセスで、聖書と祈りを通して、神様の御心を受け取り、変えられていきました。まず、【ヨハネによる福音書 15章】のみ言葉を通して、難病の自分を受け入れることができました。それまでの私は自分を拠りどころとしていたのです。ひとりで生きていける健康な自分、弱さのない自分、社会で成功する自分、そういう自分を目指していました。だから、不自由な体になった自分は、なんと惨めなんだ、何もできない自分は生きる意味すらない、と自分の価値を自分で決めていました。だから、ずっと絶望していたのです。

でも、聖書と祈りを通して、神様の愛を実感できました。神様が生まれつき難病の私をつくってくださった、私は神様から望まれて生まれてきた、私も神様の作品で、難病の私は神様の失敗作ではない、と神様の愛を感じることができました。そして、「難病の人生を通して神

様を伝える。難病の人生で、育まれる信仰と希望を伝える。」と、私は難病クリスチャンとして生きる使命を感じるようになったのです。

ここから、少しずつ人生が変えられていきました。神様のお導きで、私の難病では世界トップレベルの八雲病院で治療できるようになってから、それまでのベッドで過ごす生活から解放されました。そして、神様の不思議なお導きにより、数多くの教会で集会に呼んでいただき、また色々な所で、難病の人生を通して神様の証しをする機会がたくさん与えられるようになりました。私の証しを聞いて、イエス様を信じてくださる方々も、神様は起こしてくださいました。本当に感謝です。

「どのような時にも祈りなさい」というのは、「絶えず神様のことを考えなさい」という意味なのだと思います。神様のことをいつも考えるようになるのが、祈りです。聖書を読み、み言葉を黙想し、神様に思いを寄せて、神様という

御方について考えるとき、不思議に恵みの転換があります。そうして、私の思いと神様のご計画がひとつになり、神様の御心を自分の思いとしていけるのです。解決は、自分の中ではなく、神様にあります。神様のご計画は、私たちの苦難のただ中でも、確実に備えられているからです。

【詩編 77編12～13節】

「わたしは主の御業を思い続け、いにしえに、あなたのなさった奇跡を思い続け、あなたの働きをひとつひとつ口ずさみながら、あなたの御業を思いめぐらします。」

【口語訳 ヨハネの第一の手紙 5章14節】

「わたしたちが神に対していただいている確信は、こうである。すなわち、わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。」

ポストモダン社会と若者たち

大嶋重徳 (KGK 総主事)

KGK という学生伝道の現場で働く主事たちが、「学生達が変わった」という異変を感じ始めたのは、「価値観は多様だ」という時代に取り囲まれてきた学生が現れてきた1990年代に入ってからだ。いわゆるポストモダンと呼ばれた社会真っ只中を生きてきた世代である。ポストモダン社会は、絶対的な真理や科学的な知見すらも「作られた知の一形態」に過ぎない。その結果、正常な思考を展開する基軸も多種多様なかたちをとり、すべては相対化される。

このように「価値観は多様である」ポストモダン社会で育ってきた現代の若者にとって、「権威」という言葉は、「決定的」なものではない。むしろ「決定的、絶対的な権威」という言葉は、耳慣れない、高圧的でネガティブなイメージを伴った言葉となっていると言えるだろう。現代の若者が育ってきた世代では、価値は多種多様な形をとり、決定的な権威などは存在しない。そして「権威」は多様な価値観の中で細分化し、それゆえ「権威」は自発的に服従する価値のあるものとしての「決定的」な性格を持つものではなく、「このテーマのことを聞くならば、彼だよな。」といったあるテーマに詳しいことに過ぎないものでしかなくなっている。

そのような若者達に「聖書の語るようにこう生きるべきだ」と力を込めて語っても、「ふーん。そういう考え方もあるよね。」と受け止められ、かつて聖書の絶対的な真理に心から同意し、深い葛藤と議論の末、聖書の権威性を認めざるを得なかった世代にとっては、のれんに腕押し状態を感じてしまう。

学生伝道の現場において、「聖書がこう言っているから」という言葉は、力を持たなくなっ

ていることをひしひしと感じる。「聖書がそう言っているのは分かるけど、私の気持ちは……」と聖書の権威も自分の感情と相対化され、聖書と自分が等しい価値を持ってしまっているのである。聖書も数ある「権威」の一つであるだろうけれども、それだけが「絶対的な権威」であると言われることに若者達は強い抵抗感を感じている。「聖書がこう言っている」と強く断言する人よりも、むしろ「聖書はそう言っているけれども、あなたの言っていることはよく分かる。」と気持ちを理解してくれる人のほうを若者達は求める傾向にあるのだ。

また一方でゆがんだ権威であるカルトにはまる若者がいる。彼らの多くは人生を本気で考えている。「多様化した価値観」という閉塞状態のなかで、「そうは言っても、確かなものはある筈だ」と人生の絶対的な真理を求め、全てを超越した「権威」を探している若者達だ。彼らの数は決して少なくない。大学の授業でも超越した神を問題とする「宗教学」の授業は、満席であることが多い。TV番組に頻繁に登場する星占いの女性が「ズバリ」言ってくれる番組を、若者が涙を流しながら見つめている。あるいは深夜にスピリチュアルカウンセラーと称する男性が、自分の人生にとって不可解であった出来事に対し、その出来事の意味(背後に隠された？物語)を超越的に解き明かしてくれる番組は高視聴率を誇る。

かつて大学内で伝道集会をするならば、一昔前「一体、何を語ろうと言うんだ」と斜に構えて聞いていた学生達が今や「この相対化された価値観の中で、『愛だ』と胸を張って語るこの

人はなんだ？」と興味深々にメッセージに耳を傾ける。さらにそれが彼らのフィーリングにあるならば、メッセージの内容に心酔したかのようには話しかけてくる。

ポストモダン社会の問題は「権威の喪失」だけではなく、悩み続けた先には、必ず確かな真理に会うという「希望の不確かさ」を生んだ。一生懸命に悩んだところで決定的な価値に出会える筈がないという失望は、「悩む」「深く考える」「苦しむ」ことはネガティブで全く意味のないことだと思わせてしまう。そしてまじめで、深く悩んでしまう傾向にある自分は駄目な存在で、早く「すっきり」したい、「さっぱり」したいと願う。そして絶対的な真理を知っていそうなカルト教団の指導者の「すっきり」「さっぱり」した物語の解き明かしを聞き、心酔していく。彼らは深く悩んだり考えたり、疑ったり、真理かどうかという吟味することを、いとも簡単にカルト教団の指導者に委ねてしまう。確かな真理を求める若者達もまた、「悩む」ことの下手なポストモダン社会の申し子なのである。そしてその教団の語る教義が、真理かどうかという吟味はなく、自分の気持ちを受け止めてくれるならば、それが価値として優先される。所詮本当の真理かどうかなどは誰にも分からず、それならば自分のフィーリングで「よい感じがした」ものを選ぶより他はないと思ってしまうからだ。彼らにとって服従すべき権威を見極める鍵は、真理かどうかではなく、フィーリング的に「いい感じ」がするかどうか優先されるからである。

教会でも「先生、先生」と牧師に何でも助言を求めて、さも牧師の権威を認めているかのように見える若者は危ない存在だ。時に「先生」と呼ばれる存在にとって、そのような一見従順に見える若者の存在は心地よく、必要とされている感が生まれ、張り切っていろいろと指導をしようとする。しかし一旦、牧師や教師の指

導や助言が本人のフィーリングにあわなくなれば、それまでの従順ぶりが嘘のように離れていくことが多々あるのが実際なのではないか。

これは「聖書に対する権威」の承認についても同じことが言える。「聖書がそう言ってるのも分かるんですけどね…。でもやっぱり自分の心にストンと落ちてこないんですよね。」聖書の権威に従うことよりも、自分のフィーリングが「すっきり」するかどうかによって行動が決まってくる。

以前よく相談しにきた学生に、「もう少し、きちんと自分で悩んで、葛藤して、グダグダしてからもう一度話してくれる？」と言うと、すぐさま教会内の話を聞いてくれる優しい女性の伝道師に相談に行った若者がいた。それで、「結局、君はいつまでたっても聖書の言葉に出会うことなしに、人から人へと流れていくんだね。しっかりと聖書の言葉の前に立ち止まることをしないとイケない。」と強く言ったところ、ハラハラと涙を流し、「なぜ泣いているの？」と聞いても、「なぜ涙が流れるのかわかりません。でもそういう風に自分以上に自分を知っていてくれることに、気持ちがすっきりしてきました。」とうつむき加減に話したことに、愕然とした。彼女は「権威」を持っているように見える人に相談している自分自身に安心しているにすぎない。

若者に「信仰をもてば、黒白ははっきりついて、すっきり、さっぱり生きていける。」と語るとは危険だ。そのようなメッセージを聞きながら育つと、信仰を持っても「すっきり」「さっぱり」感を全然もてない自分を責める。「いつまでも悩み続けてしまうこんな信仰生活は駄目なはずだ」という強い思い込みが彼らにはある。この時代において光り輝く聖書の魅力は、聖書の言葉に従えば従うほど、きちんとそこには悩み多き人生が待っていることであり、従いきれない罪を脱ぎきれない人間の姿が聖書の中に

ははっきりと記されていることだ。しかしその悩みは決して意味のない悩みではない。きちんと自分の罪に悩みぬいた先には、十字架の赦しと聖霊による聖化の道のりがあることが、私たちの悩みの先に確かにある希望だ。その「悩み」の道のりを聖書の光に照らされながら歩き続けることによって、細分化された「権威」の一つであった聖書が、決して多様な権威の一つではなく絶対的な権威としてかたちをもってくる。そのプロセスに丁寧に付き合っていくことこそ、現代の「権威なき時代の権威」を語る牧師、説教者、若者たちを取り巻く大人の責任である。

私は、「すっきり、さっぱり」聖書の権威を認めることよりも、出来るだけ「きちんと聖書の前で悩む」ことを励まそうとしている。そして自分もまた「深く悩んでいる一人だ」ということを若者達に告白しようと思っている。若者達が本当に「聖書の権威」に出会うためには、聖書の権威の前で深く屈服し、悔い改め、今後の生き方を悩みながら生きていこうとする大人との出会いが必要だからだ。

若者達の優れたところは、権威の服従が上辺だけかどうかをすぐに見極めることが出来るところにある。そして若者達は大人が御言葉に対し真剣に献身をし、御言葉の語るように生きようとしているかどうか、に強い関心を持っている。彼らにとって「言葉だけの聖書」には意味がない。一見、牧師の権威に従っているように見える信徒リーダーを父に持つ息子が、家に帰ると父親が牧師批判ばかりしていることに深い失望を持っている。

現代の若者達はただ年齢や地位が上だからというだけで先輩や上司に一目置く、敬意を払うということはない。あくまでその人自身かどうという人が問題なのである。逆に相手が後輩であっても、部下であっても、その人に自分がない魅力があれば、「すごいね」と素直に言えるのも今の若者の特徴である。これは自分や相手

の年齢や肩書きで上下の関係が決まる、という考えに慣れている年代にとっては、とてもやりにくい。自分がどんな人間か、中身を知らせたり、伝えるまでにはかなりの時間が掛かることだからだ。むしろ、「先生」「先輩」「部長」と言った肩書きで関係を持つほうが、随分楽な人間関係を結ぶことが出来る。

エマオの途上で復活されたイエス・キリストは、復活の主を認めることが出来ず、その権威を認めることが出来ずに、「暗い顔」になっている二人の弟子の話に「それはどういうことですか？」と耳を傾けられる。「あなただけが知らないのですか？」と復活の主人公であるイエス様に対して馬鹿にした態度を取る彼らは、復活の事実も「……と女達が言っている」と第三者の立場に立って福音の外側にしようとしている。しかしイエス・キリストはその彼らの「暗い顔」に耳を傾けながら、聖書全体からご自分の権威を語り始められる。切り貼りの、対処療法的な、その場しのぎ的なアドバイスではなく、二人の弟子達に聖書全体の「ものの考え方」を語られたのである。

しかもその語り方は彼らの心に深く届いた。「もっと話を聞きたい」と思わせる内容であった。そしてその後、客であるイエス様がパンを割いて、言葉だけではなく仕え、愛する姿を見せられた。その行動を伴いながら示されたとき、最後の晩餐でのイエス・キリストの姿と繋がり、二人の弟子達の目が開かれた。

大切なことは、牧師が、教職が、大人のキリスト者が、全生活において神の言葉への服従を徹底することである。牧師も教会の役員も悔い改めから逃げないことであり、教会で起きる喧騒からの和解を諦めず、誠実を尽くし続けることであり、御言葉に従い続ける姿勢こそ、若者達の前で神の言葉の権威が光り輝く時なのである。繰り返す言うが、若者は神の言葉の権威

を求めている。そして神の言葉の權威に従うキリスト者の本物の生き方に会いたいと思っている。真に主体的に彼らが神の御前に生きていくためには、若者達には權威が必要である。神の言葉の權威に従うことを諦めない大人の姿が必要なのだ。そうした一人の大人のキリスト者の存在から、神の言葉に従う教会共同体の群れ全体から、「權威なき時代の權威」は回復することが出来ると信じている。

私達は若者達から悩むことを奪わず、聖書の權威を手触りをもって確かめる時間を大切にしていきたい。その時こそ、次の時代の教会を担う若者たちは、キリストの權威を帯びる教会で責任を果たしていくことが出来るようになるからだ。教会がキリストから委託されている權威とは、振りかざすものではなく、エマオとの途上を歩かれたイエス・キリストと同じく若者達と真摯に向き合うことから継承されていく。

聖書默想・説教展開例・分級展開例

テキスト

使徒言行録 13章44～52節

子どもと親のカテキズム 問68, 69

参考教理問答

ウェストミンスター小教理問答 問57～62

問68 第四戒は何ですか。

答 「安息日を心に留め、これを聖別せよ」です。

問69 第四戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 私たちの安息日は、キリストが復活された日曜日です。神さまは、この日を主の日として、特別に取りわけ、教会で礼拝をささげ、救いの祝福を喜び、きよく休んで六日間の歩みに備えることを求めておられます。安息日の恵みに励まされて、私たちは御国を目指して神さまと共に歩みます。

〈聖書テキストの解説〉

神様は週のうちの第七の日を安息日とし、その日を「聖なる集会の日」(レビ記23:3)と定められました。そのために信仰者は安息日ごとに集まっていました。今日の箇所は使徒パウロが伝道旅行の初めに安息日に聖書の解き明かしをしたという場面です。

パウロが語る言葉によってある人々は信仰に入り、イエス様による永遠の命の恵みに与らせて頂き、喜び、賛美をしました。一方でパウロの言葉に反発し怒りを覚えて、パウロを追い出した人たちもいました。

私たちが安息日に受け取るべきものとは何でしょうか。神様は安息日に何を私たちに与えようとしておられるのか、そもそも安息日とは何なのか。第四戒にさかのぼって考えたいと思います。

〈第四戒について〉(Vol.59のp.30以降を参照)

安息日に関する規定である第四戒は創世記20章によると次の通りです。

「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福

して聖別されたのである」。

第四戒は他の戒めより長い文言となっており、また「子どもと親のカテキズム」では他の戒めと同様に二問にまとめられていますが、ウェストミンスター小教理問答書では他の戒めが三問か四問なのに対して六問にわたっています。それだけ第四戒は重要な戒めとすることが出来ます。

ところで十戒は申命記5章にも記されています。そこにある第四戒には、創世記に記されている文言に次のような言葉が足されています。

「そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる。あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである」。

この言葉が足されているのは、第四戒が誤解して受け取られることがあったからとも考えられます。この言葉にも、神様が安息日を定められた真意が示されていると言えます。

〈祝福を喜ぶ〉

安息日を「心に留め、これを聖別せよ」というのは神様からの命令です。絶対に遵守しなければならないことです。なぜこの命令が与えられているのか？ 根拠は天地創造にあると記されています。そもそも神様がこの天地を創造された目的は、

私たち間が神様の栄光を褒め称え、喜ぶためです。それ以前に神様が私たちを喜ぶためでもあります。安息日を守りなさいという命令は、私たちが神様と共に喜ぶためのものなのです。そのことを意識して日々の生活で実行して欲しいという気持ちがこの命令には込められています。

ただし神様からの命令と言われ、しかもそれが7日間に一回と言われると窮屈な感じがして反発を感じるかもしれません。安息日に時間を取られずにその時間を勉強に費やせばもっと成績が上がるのでないか、クラブ活動にも十分な時間を割くことが出来ればもっと活躍できるのではないか、遊びの時間を我慢したり友達付き合いの悪い奴と思われるのは嫌だと感じてしまうかもしれません。しかしあくまでも安息日を聖別することは私たちの喜びの土台を築くためです。これを疎かにした所ではいかなる喜びもむなしなものになってしまいかねないのです。神様は私たちの人生が喜びで満たされるように、そのために神様の祝福を受け取り損ねないために強制力のあるものとして第四戒を与えて下さっているのです。

〈祝福が広がるために〉

また十戒が記されている直後の創世記23章にはこう記されています。

「あなたは六日の間、あなたの仕事を行い、七日目には、仕事をやめねばならない。それは、あなたの牛やろばが休み、女奴隷の子や寄留者が元気を回復するためである」。

神様は隣人だけではなくて家畜も含めて元気を回復させるようにしなければならないとおっしゃっています。私たちは自分さえ休めたらよい、

自分さえ神様から祝福を受けられたら良いと考えてしまいがちです。しかし神様はそのような利己的、個人的な形で私たちに祝福を与えようとしておられるのではありません。神様は祝福を多くの人々に広げたい、その中で祝福に与ってもらいたい、そして私たち自身を通して祝福が広がって欲しいと思っておられるのです。ですから神様が望んでおられるように、私たちも周りに配慮する努力が必要なのです。

〈キリストの復活〉

ところでキリスト教会ではイエス様が復活された日曜日が安息日となりました。なぜこの日を安息日としたのか、それは第四戒で示されていた安息の意味が本当に明らかになったからです。私たちの安息はイエス様の贖いの業が根拠です。ですから私たちはイエス様による祝福が与えられていることを喜び、私たち自身が復活させられる日を待ち望みます。そして自らの救いの喜びを深めるため、また隣人を神様の喜びへ招くために安息日を過ごすのです。

安息日にはこういう意味があるのですから日曜日だけ神様を慕い求めて他の日は神様そっちのけで生きることは相応しくありません。毎日を神様の恵みを受け取るために用いることを神様は求めておられると考えるのは当然です。

神様の恵みから遠ざけようとする誘惑が私たちの周りにはいくらかでもあります。神様の無限の恵みを受け取るためにそれらを捨てる決断をしたいと思います。そして教会に集まって励まし合って、互いのために努力をして、神様が用意して下さる安息の内に安らぎたいと思います。（常石召一）

テキスト 使徒言行録 13章44～52節
子どもと親のカテキズム 問68, 69

〔単元のねらい〕

神様は安息日を守るようにと命じておられます。しかしなぜ毎週教会に来なければならないのかという疑問が湧いてきます。さらに日曜日には教会に来たとしても他の日は全く神様を忘れてしまうということがあります。イエス様は安息日をどのように考えるようにおっしゃっているのか、何を与えようとしておられるのかを考えましょう。

喜びに満たされる安息日

イエス様に出会って、イエス様こそ本当の救い主だと信じたパウロは、その喜びを伝えるために伝道の旅に出ます。パウロは三回にわたる大きな旅行をしますがその第一回目の旅のことです。

パウロとその一行はアンティオキアという町に着いた時、安息日に会堂に入りました。そこでは礼拝が行われ、聖書が朗読されていました。そこに集う全ての人は静かに黙って聞いていました。さて朗読が終わった時、そこにいた会堂長がパウロに「何か励ましの言葉を話して下さい」とお願いしました。そこでパウロは立ち上がって語り始めました。その内容は、神様はイスラエルの歴史に関わって下さりついにはイエス様を送って下さったこと、しかしエルサレムに住む人々やその指導者たちはイエス様を認めず、また安息日ごとに読まれる預言者の言葉を理解せずイエス様を罪に定めたこと、信じる者は皆この方によって義とされること、でした。その言葉を聞いて人々は、次の安息日にも同じことを話してほしいと願いました。パウロはその願いを受け入れ翌週再び会堂にやって来ます。会堂には神様の言葉を聞こうと町中の人々がやって来ました。しかしその様子を見てパウロを強くねたむ人がいました。そういう人々たちに対してパウロとバルナバは、「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている」と言いました。彼らはますます怒り、いろいろな人を煽ってパウロとバ

ルナバその地方から追い出しました。つまり神の言葉を追放したのです。

一方でパウロが語る神様の言葉を聞いて、自分たちにも救いが語られていると感じる人たちもいました。彼らは大変喜び、神様を賛美しました。そうしてイエス様を信じ受け入れ、イエス様が用意して下さった永遠の命の中に入っていったのです。

どちらの人たちも安息日に礼拝に集った人たちでした。神様が定めて下さった時に、神様の言葉を聞くために集まったのです。それは本当に素晴らしいことでした。しかしある人は神様の言葉を拒否して恵みを受け取り損ね、ある人は神様の言葉を聞いて永遠の命に与りました。全く正反対の反応を示したのです。

今日は安息日です。みなさんが安息日に、神様の言葉を聞くために教会に来て下さったことが本当にうれしいです。神様も喜んでおられます。では神様は安息日にみなさんに何を受け取って欲しいと願っておられるのでしょうか。

そもそも安息日というのはどういう日でしょうか。実は安息日は神様が全世界をお造りになったことと深い関係があるのです。創世記には世界がどのように造られたかが記されています。神様が天地を五日間でお造りになったこと、六日目に動物を造られ全てを整えた上で人間をお造りになり満足なさったこと、そして七日目は神様が安息なさったことが記されています。神様は私たち人間

が平安の内に生き、神様と豊かな交わりに生きることを願い、そのことを楽しもうと思って世界をお造りになったのです。神様が安息日を守るように定められたのは、このことを覚えるためです。ですから安息日というのは、神様が私たちを喜んで下さっていることを思い出す日なのです。そのことを深く味わい、神様を喜ぶ日なのです。私たちにとって神様を喜ぶことほど大切なことはありません。そのことによって私たちは私たち自身を喜ぶことも出来るのです。これは全ての喜びの土台なのです。

第四戒である「安息日を心に留め、これを聖別せよ」は父なる神様からの命令です。しかし命令と聞きますと皆さんは窮屈に思うかもしれません。私たちは勉強やスポーツや遊びや、いろいろなしなければならぬことがあります。日曜日もそのために用いることが出来れば良いのにとすることがあります。ですが神様を喜ぶことほど大切なことはありません。こういう命令がなければ私たちは次第に神様をそっちのけにして自分たちのしたいことやしなければならぬと考えることを中心にしてしまうのです。神様は私たちを縛ろうとして安息日を守るようにと命じておられるではありません。あくまでも私たちが間違った歩みをしないためなのです。神様が安息日をお定めになったところに、神様の深い愛が現れているということを感じてほしいと思います。

では、安息日にちゃんと礼拝を守っていたのに、

パウロが語る神さまの言葉を拒み、神様の恵みを受け取り損ねてしまった人がいたのは何故でしょう。それは、神様から恵みを頂かなければ生きていけないということを忘れてしまっていたからではないでしょうか。安息日の礼拝においてこそ、全世界をお造りになった無限なるお方とつながることが出来るのだということが分からなくなっていたからなのだと思います。

神様がこの私を愛して下さっていることを味わい、そしてイエス様が勝ち取って下さった復活の恵みに与る。これが、神様が安息日に私たちに与えようとしておられることです。復活とは死んでも生きることです。これは人間の理解を越えています。私たちはこの世にある目に見えるものによって喜びを得たいと思うかもしれません。しかし私たちは私たちを超えたものに触れることでしか本当に喜び安心することが出来ないのです。神様はその恵みを与えようとしておられます。そのために安息日があるのです。

私たちは私たちのこの世における生活、生きている間だけが全てだと思っはいけないのです。神様は無限なるお方です。私たちはこの方によって造られ、愛されています。私たちは無限で永遠なるお方につながるようにと招かれています。この恵みに与らせまいとする誘惑に打ち勝ちたいと思います。そのために安息日を大切に過ごしたいと思います。 (常石 召一)

[今週の暗唱聖句] 創世記 20章8節

安息日を心に留め、これを聖別せよ。

しとげんこうろく13:44～52をよみましょう

1. 人々はなんのために、あんそくにちにあつまりましたか。

2. そのとき、ユダヤ人たちは、どんな気持ちになりましたか。

3. ユダヤ人たちは、どんなたいどをとりましたか。

4. パウロとバルナバは、ユダヤ人たちになんといいましたか。

5. 神さまのことは、はじめに、だれに語られるはずでしたか。

6. 神さまのことはたいして、ユダヤ人たちはどんなたいどをとりましたか。

7. ユダヤ人たちのたいどを見て、でしたちはどうしましたか。

8. いほうじんたちは、どんなはんのうをしめましたか。

9. そのけっか、いほうじんはどうなりましたか。

10. いほうじんにむけられたかみさまのことは、そのあとどうなりましたか。

11. あなたはあんそくにちをどのようにすごしていますか。

使徒言行録13:44～52を読みましょう

1. 人々が安息日に集まった目的は何ですか。
2. ユダヤ人たちの反応はどうでしたか。
3. パウロとバルナバは、ユダヤ人たちに何と語りましたか。
4. 神様の言葉は、はじめに誰に語られるはずでしたか。
5. ユダヤ人たちが神様の言葉を拒んだ結果、どうになりましたか。
6. 異邦人たちは、神様の言葉に対して、どのような態度をとりましたか。
7. その結果、神様の言葉はどうになりましたか。
8. わたしたちはユダヤ人ですか。
9. わたしたちは、なぜ、今、教会に来ているのですか。

テキスト テサロニケの信徒への手紙一 5章12～15節
子どもと親のカテキズム 問70, 71
参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問63～66

問70 第五戒は何ですか。

答 「あなたの父母を敬え」です。

問71 第五戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 神さまのみをあがめ、聖書に従い、父と母を心から敬い、先生や目上の人たちを尊敬し、友だちや年下の人たちも大切にすることを求めておられます。神さまは、そのような人に祝福を豊かに与えると、特別に約束してくださっています。

〈聖書テキストの解説〉

今回の聖書箇所はテサロニケの教会に対して送られた手紙の最後の挨拶の部分です。テサロニケの信徒へ手紙一は、パウロが、テサロニケの教会の人々が苦難の中でもなお「主にしっかりと結ばれている(3:8)」知らせに喜び、励まされ、更にテサロニケの教会の人々がしっかりと支えられるように手紙をもって励まし、教えています。

手紙の最後の挨拶の部分では、教会の人々に対して、教会の他の兄弟たちに、また更に広く、すべての人々に対して、「いつも善を行うよう努め(5:15)」ることを勧めています。

この箇所で勧められている平和に過ごすことや、戒め、励まし、助けること等は、その行動そのものが価値あることとされるのではなく、「主に結ばれた者」同士が「愛」に拠って行う行動です。「律法の行い」が主に救われた人々が、その救いに示されている神さまの愛に満たされ、その愛を証しするために律法に示される善い行いをするという構造であることが改めて確かめられます。

また、善い行いの対象が、「怠けている者たち」「気落ちしている者たち」「弱者たち」つまり群の中で模範的とは言えないメンバーを対象とし、更には「すべての人」すなわち、教会員、信仰者以外の未信者や敵対する人々さえ含む全ての人々を対象としていることが示されており、「善い行い」の対象が広く全ての人々に向かっていていることを示します。

〈子どもカテキズムの解説〉

第五戒は、直接的には父母に対する子どもの在り方を指示していますが、本カテキズムは、この戒めが指示する人間関係が、父母との関係だけでなく、「先生や目上の人たち」更には「友だちや年下の人たち」との関係も含んで指示していると理解されます(ウ小教理問答問64参照)。ちなみに、あらゆる人間関係の代表として、親子の関係が挙げられていることは、聖書が私たちの社会の基本単位、人間同士の関係の基礎が家庭であると理解していることを示しています。

人間が社会的存在として、他の人間との関係性の中で生きるべきことは、創造の際に「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう(創世記2:18)」と言われていることから分かります。神さまはそのためにもまず動物を造られましたが、彼らは人間に合う助ける者とはならず、人格を持った同じ人間だけが助け手となることができました。人間関係が人格と人格の関係であり、たとえ上下の関係であっても助け合う関係であることが分かります。人格同士の関係の理想的な姿は、三位一体の神さま、特に御父と御子の間の愛の関係です。全ての人間関係において愛をもって助け合い仕え合うことが、この戒めが進める人間関係です。

本カテキズムでは省略されていますが、この第五戒には特に戒めを守った時に与えられる祝福が約束されています。それは「そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きるこ

とができる（出エジプト20:12）」という約束です。この祝福の約束には、「主が与えられる土地」において「長く生きる」ことができるという二つの側面があります。「長く生きる」と言うのは、聖書の神さまが与えてくださる祝福が、目に見えない天国の領域の事柄に限らず、この世における人生、目に見える物質的な世界の幸いを積極的に認めているという理解を表しています。それと同時に、その長く生きる約束は「主が与えられる土地」における長命であり、その地上の生涯において私たちが最も大きな幸いとして長く受けるのは神さまが与えてくださった約束の実現という幸いであることが示されております。

私たちが神さまから与えられた全ての人間関係において愛をもって仕える時、神さまの恵みを地上の生涯において長く享受することができるのです。

〈黙想〉

聖書の中には様々な愛憎渦巻く親子の関係が記されておりますが、根本的には親は子を受容する者、子は親の愛を受ける者という、親と子の間の無条件の愛情の関係を前提としています。しかし現在では様々な家族関係があり、子どもであっても複雑な親子関係の中に置かれている子どもも少なくありません。子どもがどのような家庭環境にあるかということについて、最低限の知識を持って向き合うことは必要なことでしょう。

しかし同時に、この戒めが単純に愛や尊敬を

持って築かれている人間関係を前提にしているのではなく、様々な複雑な人間関係を前提にしていると理解することで、私たちが上手くいっているかどうかを別にして、あらゆる人間関係において「敬う」事を求めていると理解することは、この戒めの本来の意味を示すことになるでしょう。

本カテキズムは、ウェストミンスター大小教理問答が「目上、目下、対等といういろいろの地位と関係において（ウ小教理問64）」と言うところに沿って、この戒めの対象の範囲を広げますが、「親子」の関係は単純な上下関係ではなく、社会一般の人間関係も地位や立場の上下だけで規定できないものです。「父母」を全ての人間関係へと広げて理解する場合、その人間関係の前提となるような愛憎や、上下関係を前提としないで適用することが必要でしょう。

〈子どもたちに対して〉

子どもたちの人間関係は大人よりも狭く、学校に置ける人間関係は無条件に上下関係や平等性を求められています。良い関係や悪い関係も沢山ある中で、「理想的な善い人間関係」が求められる中で、何が理想的な人間関係であるか、そのような人間関係を築くのは動機によるのかを伝えることが必要でしょう。神さまの愛が親や教会の人間関係を通して、自分たちに注がれていることを実感し、その愛をもって私たちも隣人たち全ての人々を愛し、仕えていくことが伝えられればと思います。（長田詠喜）

テキスト
子どもと親のカテキズム

テサロニケの信徒への手紙一 5章12～15節
問70, 71

〔単元のねらい〕

人間同士の関係について規定する戒めにおいて、愛をもって仕える事を促す。その根拠として、十戒の前半、神さまから私たちに与えられている愛の契約の関係が前提とされる。キリストが神と敵対する人間をも愛し、仕えてくださったからこそ、それと同じように私たちも全てのの人々に対して愛をもって仕えるという仕組みを受けとめることで戒めを身につけていく。

周りの人に仕える

・すべての人に対する戒め

今日は十戒の五番目の戒めの言葉を読んで参ります。「父と母を敬え」という戒めです。皆さんお父さんやお母さんを敬っていますか？「敬う」というのは、もしかすると小さい子たちには難しい言葉かも知れません。尊敬する、大切にする、もう少し簡単に言うと、そうですね、たとえば、相手のいう事をきちんと聞くというような意味です。皆さん。お父さんやお母さんのいう事をきちんと聞いていますか？

「うん、聞いているよ」って人もいるね。あんまりそうでないような人もいるみたいだね。いつもはお父さんやお母さんのいうことを聞いている人も、時々はあることを聞きたくない時もあるんじゃないかな。お父さんやお母さんだけだったらまだいいかもしれないけれども、今日のカテキズムには、先生や友だち、年下の人まで尊敬したり、大切にしたりしなさいと言われてます。つまり、今日の戒めはただお父さんやお母さんに対してだけのこと、家の中のことでなく、家の外の人、の事も、学校の人、も、それだけではなくて、他の場所でも、すべての人々に対して、その人を「敬う」尊敬したり大切にしたりするように教えているんですね。

学校でも、その他のところでも、仲のいい友だちや親切な人優しい人だったらいいかもしれません。けれども中にはあまり仲良くない人もいます。もしかしたら、少し意地悪な人、

喧嘩をしている人もいるかもしれません。けれども神さまは、そんな人たちもみんな、私たちは敬って、相手の言うことを聞いて、従うようにと教えているんですね。

・イエスさまの愛を実現する

どうして、そんなことをしなければならないのでしょうか。お父さんやお母さんだって、時には自分のイヤなことを言って来たり、やりたくないことをやらせようとしたり、逆にやりたいことを止めるようにと言われたりします。そんな時はお父さんやお母さんでも、言うことを聞きたくなくなる、敬いたくなくなる気持ちが出て来てしまいます。先生やお友達もそうです。ましてちょっと仲の悪い相手、喧嘩している相手だったりしたら、決して相手のいう事なんか聞くものか、相手の言う通りにしたら悪いことがあるに決まっている、そんな風に思うかもしれません。そんな人たちの言うことを聞かなければならないなんてとんでもないことだと思うかもしれません。

でも、聖書には、そんな風に、相手の言うことを聞いて、仲の良い人だけでなく、すべての人を敬った人の事が出て来ます。誰だと思いませんか？

それはイエスさまです。本当だったらイエスさまは神の子なんですから、イエスさまの方が敬われる方、他のすべての人たちがイエスさまの言うことを聞いて、イエスさまに従わなければならないお方です。けれども、イエスさまはそんなこと

を全く気にしないで、すべての人たちに親切にし、すべての人たちの話を聞き、すべての人たちの願を実現してあげました。それだけではありません。イエスさまのことをねたんで、憎んで、イエスさまが何も悪いことをしていないのにイエスさまのことを捕まえて十字架につけてしまった人たちに對しても、イエスさまは何も文句を言わず、その人たちを赦してくださるよう天の神様にお祈りしてくださいました。それは、イエスさまが十字架についたときに生きていた人たちのためだけではありません。その後、イエスさまの話を書くすべての人たち、イエスさまを信じるすべての人たちのために、イエスさまは十字架にかかってくださいました。私たちもイエスさまに何かしてあげたわけではありません。けれどもイエスさまはわたしたちの事を愛してください、罪を赦すために十字架についてくださり、そして、今も私たちのために天国から私たちを見守り、私たちの祈りを聞いていてくださっているのです。

イエスさまの声は私たちに直接聞こえるわけではありませんが、私たちがお祈りのたびに、イエスさまの名前を呼ぶたびに、イエスさまは、私たちに返事してくださっています。イエスさまは今この瞬間も私たちに仕えていてくださっているのです。このことを忘れるわけにはいかないのです。

・家族の愛の中にイエスさまの愛を見いだす

そうはいっても、イエスさまの姿は目に見えません。お祈りの時に応えて下さるといってもその声は聞こえません。イエスさまが私たちを愛してくださるといっても、イエスさまが何をしているかは私たちには分からないことがほとんどなのです。そんな中でどうやって、イエスさまの愛を確かめていったら良いでしょうか。ここでまた私たちは、最初に戻ります。この第五戒では、「父と母」を私たちの敬う人たちの代表として挙げておりました。なぜなら、お父さんやお母さんは私たちのことを敬い愛していてくださいます。(長田詠喜)

〔今週の暗唱聖句〕 テサロニケの信徒への手紙一 5章15節

だれも、悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい。

お互いの間でも、すべての人に対して、いつも善を行うよう努めなさい。

テサロニケのしんとへのてがみ1 5:12～15をよみましょう

1. パウロはなにをおねがいしていますか。

2. パウロはどのようにすごすようにすすめていますか。

3. なまけている人にたいして、どうするようすすめていますか。

4. きおちしている人にたいして、どうするようすすめていますか。

5. よわい人にたいして、どうするようすすめていますか。

6. すべての人にたいして、どのようにせつするようすすめていますか。

7. わたしたちは人にかかわるとき、どんなたいどをとるのがよいでしょうか。

テサロニケの信徒への手紙1 5:12～15を読みましょう。

1. パウロは何をお願いしていますか。
2. パウロはどのように過ごすよう勧めていますか。
3. 怠けている人、気落ちしている人、弱い者に対して、それぞれどう対応するよう勧めていますか。
4. すべての人に対して、どのように接するよう勧めていますか。
5. すべての人に対して、なにを行うよう教えていますか。
6. この箇所全体を読んで、人との関わり方はどうあるべきだと思いますか。

テキスト

ヨハネの手紙一 3章11～18節

子どもと親のカテキズム 問72, 73

参考教理問答

ウェストミンスター小教理問答 問67～69

問72 第六戒は何ですか。

答 「殺してはならない」です。

問73 第六戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 神さまは、人間をご自分のかたちに似せて造られたので、他の人の命も、自分の命も大切にすることを求めておられます。人をにくむこと、無視すること、いじわるをすることは心の中の人殺しです。私たちは、自分のように他の人をも愛します。

〈聖書テキストの解説〉

ヨハネの手紙一は、「命の言」(1:1)であり私たちの弁護者であるイエス・キリスト(2:1)が、「光」(1:5)である神の前で私たちを弁護してくださり、その人の内で神の愛が実現する者(2:5)としてくださる事を指摘し、それ故に、私たちはイエス・キリストが与えてくださる、新しい掟(2:8)、すなわち愛に生きる者(2:10)となるように祈り求めます。神さまは私たちが愛に生きる者となることができるように、私たちを「神の子」(3:1)すなわち、神から生まれた者(3:9)としてくださるのです。

以上から分かるように、互いに愛し合って生きることが、単に生活上の勧めや、ましてや救いのために必要な条件ではなく、「私たちが死から命へと移ったこと」(3:14)すなわち、私たちの救われていることのしるしです。だからこそ私たちは自身が救われているを表すために、愛をもって生きることを目指すのです。

〈子どもカテキズムの解説〉

第六戒は「殺すな」という戒めですが、それは単に殺人行為だけを禁じているわけではありません。どこまでが殺人行為で、どんな行為までは許され、何をすることは禁じられるのか、その教会を厳密にしようとすることは、いわゆる律法主義的な思考に陥ってしまいます。イエスさまが教える「新しい掟」としての律法理解は、その掟の根

本の姿勢や方向性を汲み取り、それを通常の信仰生活に適用していくことが求められています。第六戒でいえば、「殺すな」という戒めは、命を大切にするという事であり、命の源泉である神さまを尊重すること、その神様が与えてくださるすべての恵みを喜んで受けることを意味します。私たちの命は、単に生命を維持することだけでなく、精神的にも社会的にも霊的にも健全であることを意味します。自分自身についても、隣人についても、他の全ての人についても、肉体はもちろん、精神的にも社会的にも霊的にも健全であること、そのように目指し、実現に努めることが「殺すな」という戒めの指し示すものです。

全ての戒めについて言えることですが、対人関係の戒めは、相手と自分の関係だけで理解しようとすると解決できません。自分に対して善意や信愛を示してくれる相手であればともかく、自分を嫌い、対立している相手に対して、愛をもって臨むことはほとんど不可能です。しかし、この私と隣人二者の関係の前に、全ての源であり、特に私たちの命と愛の源である神さまの存在を置くと、私たちは既に自分が神さまから溢れる命と愛に満たされていることを気づきます。また私たちの眼前にいる隣人も同じ神さまから命と愛を受けている存在であることにも気づきます。この神さまの前における自分と隣人の関係を意識する時、私たちは私たち相互の命を重んじる戒めを実現することができるのです。

〈黙想〉

「殺すな」という戒めは、あらゆる宗教や宗教と関係ない社会通念としてもひろく受入れられた一般的な規範として理解されています。その一方で、人類は歴史に常に争い、人を傷つけ、命を奪い、その行為を正当化されています。「なぜ殺してはいけないのか？」という問いが、答えに窮する問いとして取り上げられています。実際、現代の日本でも自殺や死刑、人工妊娠中絶等、「殺人」とは見做されない人の命を奪う行為が広く行われています（政府の統計では、2015年の他殺者数はおよそ300人、自殺者数は2万4千人、死刑執行数は3人、人工妊娠中絶数は18万人）。もちろん前述のように、これらの数字をゼロにすることだけで「殺すな」という戒めを守っているということではできませんが、この現状の中で、私たちが「私たちは『殺すな』という戒めを守っています」ということはできません。これらの行為が正当であると考えるならば、改めてその意味が問われなければならないでしょう。

更にこのカテキズムは、この戒めが持つ積極的な愛の人間関係への促しを指摘しています。この理解はイエスさまが福音書の中で指摘していることに基づく正当な理解ですが、それによって私たちは、私たちのあらゆる隣人たちの社会的状況にも目を向けることが求められます。かろうじて命を保ち、生活を送ることができているとは言え、困難な中に置かれている人々は少なくありません。近年は「子どもの貧困」の問題も注目されており、教会に集う子どもたちの周囲にもそういった状況にある子ども達がいるかもしれませ

ん。

貧困や困窮の中にある人々に、教会がどのような援助を行うことができるか、また教会がどのような援助を行うべきかという問いに簡単な答えはありません。しかし、それらの諸々の課題が私たちの目の前にある課題であり、私たちがそれらに目をつぶることなく、かえってそれらの課題を通して、キリストの愛を証しすべきことを意識しなければならないと思います。

〈子どもたちに対して〉

子ども達に限らず、現代の人々は、マニュアル化された、すぐ結果を見いだすことができる解決法を欲します。「こんな時は、こういう風にすれば、必ず解決します」と言う答えを期待します。しかし、イエスさまが私たちに示した戒めへの態度は、私たち自身が違わされた場所において、実現不可能なほどに徹底的に神の愛を実現する事を求めています。現代の日本社会の良識とされることとは相容れないような選択も聖書の中から導き出すことは可能ですし、そのような選択をすべきこともあるでしょう。神さまの愛とはどのようなものか、私たちはそれをどのように証しすべきなのか、私たちが向き合い続け、考え続け、選択し続けるべき課題として、十戒の戒めを受けとめていくことができればと願います。

簡単に答えを示すのではなく、むしろ子ども達とともに大人である教師たちも共に歩む者として、共に悩んでいくことを示すことを目指したいと思います。

（長田詠喜）

テキスト ヨハネの手紙一 3章11～18節
子どもと親のカテキズム 問72, 73

〔単元のねらい〕

戒めの根底にある、神さまの救いに示された愛を確認すると共に、戒めが示す課題が私たちの身近に存在し続けていること、私たちが信仰の生涯を通してそれらの課題に向き合い続けなければならないことを指摘する。

あなたは殺していませんが

・殺人の反対は愛すること

今日の戒めは「殺してはならない」です。まさかとは思いますが、皆さんの中に人を殺したことがある人はいませんよね。先生も殺したことはありません。そもそも「誰か他の人を殺してはいけません」そんなことはわざわざ教会で教わらなくてもみんなよく知っていることです。ニュースでは人が亡くなったり殺されたりするニュースをよく聞きますが、「殺してはいけない」なんてことは小学生でもみんなよく知っています。

では、どうしてわざわざ「殺してはならない」なんてことを教えられなければならないのでしょうか。今日のこの、戒めだけでなく、聖書の十戒を学びます時に、「してはいけない」という戒めは、裏返して「しましょう」という戒めにして考えてみるのが大切です。例えば、「わたしの他になにももの神としてはならない」という戒めであれば、「真の生ける神様ただ一人だけを神様として信じましょう」という戒めになるわけです。では「殺してはいけない」の裏返しはなんでしょう。それは「生きましょう、生かしましょう」でしょうか。ただ心臓が動いていれば生きているというわけではありません。私たちが死んでいない、生きているという時には、どうしても必要なものがあります。それは、私たちがこの十戒について学び始めた最初に確認しました、十戒の中心、「神様を愛すること」と「人を愛すること」です。人は、神様と隣人を愛して、また神様と隣人に愛されることで初めて本当に生きる者となることです。

きるのです。ですから、「殺してはならない」の裏返しは「愛しましょう」なのです。

・人はイエスさまを憎みイエスさまは人を愛した

人を愛するというのは、実はとても難しいことです。でも中には「わたしは人を愛しているよ」という人がいるかもしれません。友達とも、兄弟とも、お父さんお母さんとも仲良くやっているし、親切にしている。大切に思っているから、大丈夫。十分愛してます。という人がいるかもしれません。けれどもなかなかそうではありません。今日のこの戒めに限らず、私たちが聖書の様々な教えを学んでいきます時にお手本になりますのは、イエス様です。イエス様はどんな風に人を愛されたのでしょうか。イエス様は誰にでも親切でした。イエス様に助けてもらおうとした人のことは、いつでもどこでも親切に助けてあげました。弟子たちと一緒に休みしようと荒野に行っていた時にも、数え切れないほどのたくさんの人たちを朝から晩まで助けて、病気を治し、お話をし、最後には食事まで食べさせてあげました。

さらに、イエス様はご自分の子を嫌う人、憎んでいる人のことも愛しました。イエス様はその人たちがイエス様のことを嫌い憎んでいて、殺そうとしていることをよく知っていました。また人を助けようとしないう、威張ってばかりいる人たちのことは好きではありませんでした。でもその人たちがイエス様をつかまえて十字架につけて殺そうとした時に、イエス様はその人たちのために祈

り、その人たちが赦されるように父なる神様に願いました。これがイエス様の愛なのです。

それじゃあ改めて、聞いてみますね。「みなさん他の人を愛していますか？ 自分のことを好きな人だけではなく、すべての人を、自分と仲の悪い人、嫌いな人のことも愛していますか？」どうでしょう？ 今度はみんなあまり手が上がらなかったようですね。難しいですね。先生も難しいと思います。

・愛は生活となって表れる

もちろん、人が嫌いで、憎らしくて、やつつけてしまいたいということばかりでないことはよくわかります。いろんな人と仲良く暮らすことができれば、その方が良いのは当然です。でも自分がどんなに仲良くしようと思っても、親切にしようと思っても、相手の人が自分に意地悪をする。仲良くしてくれない、気が合わない。だから仲良くできないんだと思うのです。けれどもイエス様はそんなことはありませんでした。私たちも別にイエス様に親切にしたことはありません。イエス様の言うことを一生懸命聞いたわけでもありません。でも、イエス様はわたしのことを大切に愛してくれました。「大切にしてるよ」「愛してるよ」というだけでなく、本当に私たちのためにご自分の持っているすべてのものを差し出してくださいました。大切な大切なものを、それこそご自分の命まで捨ててくださいました。そうやって私たち

を愛してくださったのです。このイエス様の愛は、私たちの中にだんだんと溜まって、私たちを変えていきます。私たちはイエス様の愛によって、自分も愛することができるように変えられていきます。そして実際に他の人を愛することができるようになるのです。

・どうしたら愛するか悩む生活

人を愛するというのは簡単なことではありません。自分では良いことをしている、愛してあげていると思っていても、それが本当に相手のためになる、相手がして欲しいことであるかどうかはわかりません。時々私たちは、自分勝手に自分の都合の良いことをして「親切してあげた」「愛してあげた」と勘違いすることがあります。親切のつもりでしたことが間違ったこと相手を傷つけてしまうことであったり、神様が願っていない悪いことであったりすることもあります。自分が本当に心からすべての人を愛することができるように、そして、その愛が本当に自分に取っても相手にとっても、そして神様に対しても良いこと、素晴らしいこと、本当の愛であるように、私たちは常に何が本当の神様に喜ばれる愛であるか、考えながら、そのような愛を行うことができるように神様に祈りながら生活をするのです。

神様の愛が注がれますように、お祈りします。

(長田詠喜)

[今週の暗唱聖句] ヨハネの手紙一 3章11節

なぜなら、互いに愛し合うこと、これがあなたがたの初めから聞いている教えだからです。

ヨハネのてがみ1 3:11～18をよみましょう

1. はじめからきいているおしえとは、なんですか。

2. カインはなぜアベルをころしましたか。

3. じぶんが死からいのちへうつったことが、なぜわかりますか。

4. あいすることのないものは、どのようなじょうたいですか。

5. きょうだいをにくむものは、なんですか。

6. イエスさまがわたしたちのためにしてくださったことは、なんですか。

7. そのことによってわたしたちは、なにをしりましたか。

8. わたしたちはきょうだいのために、どうするべきですか。

9. あなたなら、どんなおこないをもって、愛をあらわしますか。

ヨハネの手紙1 3:11～18を読みましょう。

1. 初めから聞いている教えとは何ですか。

2. カインはなぜアベルを殺しましたか。

3. 自分が死から命へと移ったことが、なぜわかりますか。

4. 愛することのない者は、どのようなどのような状態ですか。

5. イエス様が私たちのためにしてくださったことは、何ですか。

6. そのことによって、わたしたちは何を知りましたか。

7. 私たちは、兄弟のためにどうすべきですか。

8. 私たちは、どのような方法で愛を表現できますか。

テキスト	創世記 2章18～25節
子どもと親のカテキズム	問74, 75
参考教理問答	ハイデルベルク信仰問答 問108, 109 ウェストミンスター小教理問答 問70～72

問74 第七戒は何ですか。

答 「姦淫してはならない」です。

問75 第七戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 男の人と女の人との関係は、神さまの創造の祝福です。神さまは、思いと言葉と体をきよく保つことを求めておられます。また、結婚生活においては、結婚の誓いを守り、きよい家庭を築くことを求めておられます。

〈はじめに〉

十戒の七番目は「姦淫してはならない」という教えである。姦淫とは、男女間における不適切な肉体関係のことである。姦淫というヘブライ語が表しているのは、主に男が他人の妻と関係を持つことである。もう少し広く理解することも可能で、その場合は配偶者以外の異性と交わる行為であると定義できる。そうしたことから、この戒めが目指すのは、聖書が教える祝福された結婚関係である。そのための秩序として、姦淫は禁じられている。

姦淫してはならないという教えは、ともすると性（SEX）に対してネガティブな印象を与えがちである。性に対して、正しい秩序も順序も大切だが、性に対して否定的な印象を持つ必要はない。性もまた、神が極めて良かったといわれた創造の一部である。そうしたことを踏まえた上で、より積極的に結婚の意義について考えるのがよいだろう。

〈聖書テキストの解説〉

創世記2:18～25は全部で3つある結婚について教えている聖書箇所の中の1つである（他にはマタイ19:3～11、エフェソ5:15～6:4）。創世記の1章から2章は、この世界を神がお造りになったことを記しているが、創造の冠として最後にお造りになったのが人間である。そして、神は人間を男と女に創造した。それは、『神は御自分にかたどっ

て人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。』（1:27）という創造である。人は神に似せて造られた。これは、神のような形態（フォルム）を持っているのではない。神の本質を反映する（イメージ）を持つものとして創造されたのである。その神のイメージとは、交わりを持つということである。神は、この世界をお造りになり、この世界とまた人間と関わりを持たれる。その神に似せて造られた人間は、他者との交わりを持つ。その交わりを持つ存在として、男と女ということなる性をもつ存在として人間を創造された。

最初に創造されたのは男であった。そして、神は人が独りでいるのはよくないとお考えになった。神は交わりをもつ存在である以上、そのかたちに造られた人間が独りでいるのは好ましくない。そこで、神は彼にあう助けるものを造られた（18節）。それが、女である。すでに創造されていた動物は人間のまことの助けてとはなり得なかったのである。ここでの助けるものとは、これはヘルパーではない。本来の意味は向き合うという意味である。ある神学者は、この助けての意味を、「ダンスをすること」と定義した。男女がダンスをする時には向き合うが、そのような存在としてこの時男と女は創造されたのである。

このように、男と女が創造された。そして23節には、男から女へのラブ・ソングが収められている。私の骨の骨、肉の肉とは、男にとって女が

まさに、自らにとって無くてはならない存在であるということを表している。骨太な愛のメッセージがそこにはある。こうして結婚というものが、創造の秩序の中に置かれた。神が結びあわせた二人は一体となる。それはお互いに恥ずかしがることがないほどに、お互いを受け入れ合う関係である。

〈子どもカテキズムの解説〉

こどもカテキズムでは、第七戒が結婚の祝福と結びつけられている。そのために大切なのは、思いと言葉と体をきよく保つことである。思いをきよく保つということについては、マタイ5:27～29での主イエスの言葉を参照。ここでは、みだらな思いで他人の妻を見ることが戒められている。みだらな思いそれ自体は仕方がないことかもしれない。しかし、その思いを異性に向けることを主イエスは戒めておられる。言葉は、思いが外に現れたものである。体をきよく保つのは、私たちが聖霊の宮だからである（Ⅰコリント6:15～20）。体をきよく保つとは、狭い意味では姦淫をしないということ、つまり結婚関係において配偶者以外の異性と関係をもつことである。広い意味で取るならば、独身の時の身の持ち方、特に性的関係のあり方について身を慎む、ということである。

そして、結婚は家庭形成に向かう。結婚の誓いには当然、お互いに愛し合うことが含まれる。そしてきよい家庭を築くように問75は励ましている。

〈黙想〉

現代において、性倫理の乱れが著しい。そのよ

うな中で第七戒の教えを今一度、心に刻む必要性があるだろう。現代の日本では夫婦間の問題、若者の乱れた性生活、街中にあふれる不適切な本や映像などがあふれている。そのような社会において、秩序を守ることは良き証しとなる。

そして、第七戒は結婚と結びつけて考えられてきた。結婚は神からの祝福である。その祝福を一身に受け取るために、この第七戒の教えは重要である。ことがらそれ自体がデリケートなので取り扱いが難しいと思われるが、だからこそ丁寧に伝えたい。以前、お世話になっていた大学生宣教団体の主事の方が、「就職と結婚はたとえクリスチャンの学生であったとしてもこの世の価値観が巧みに入り込む」とお話になっていた。だからこそ、結婚の祝福をつたえたい。

〈子どもたちに対して〉

第七戒は性を扱うので、ことがらがデリケートである。だからといって必要以上に気をつかう必要はなく、結婚について語るという仕方で積極的にメッセージを取り次いでいただきたい。可能であれば、説教をする教師の方が結婚の証しをしてくださってもよいかもしれない。ただし、生徒の中には離婚した家庭でそだった者や、両親が未婚者のものもいるかもしれない。思春期特有のむずかしさの中にいる子どももいるだろう。そうした中で多かれ少なかれ、罪悪感をもっている子どももいるかもしれない。悔い改めれば赦されると聖書は伝えているのであるから、悔い改めに導くこともあるだろう。性や結婚について正しく語るとは、信仰者としてふさわしい方向へと子ども達を導くことになるだろう。（小宮山裕一）

テキスト 創世記 2章18～25節
子どもと親のカテキズム 問74, 75

〔単元のねらい〕

十戒の七番目は「姦淫してはならない」。テーマ自体は扱いに難しさを覚える主題かもしれない。しかしながら、こども達を取り巻く状況は大変なものとなっている。聖書は、性についてどのように教えているのか、なによりも神があわせてくださる結婚の祝福について子ども達に伝えたい。

二人は一体となる

おはようございます。このところしばらく、十戒について学んでいます。十戒は、神さまを信じて歩む私たちが、絶えず思い出すものです。神さまに対して、感謝を表すとき、私たちは十戒を感謝とともに守ります。

今日は、第七番目です。それは先ほどのカテキズムにもあるように「姦淫してはならない」という教えです。十戒には色々なことが教えられています。「殺してはならない」「盗んではならない」など。でも、姦淫という言葉は殺すとか盗むとかと比べてあまり馴染みがないかもしれません。姦淫の姦という言葉をご覧ください。この姦という言葉に「女」という言葉がありますね。このことからわかりますように、この姦淫というのは、男女の関係が正しくないことを表す言葉です。結婚している人が、自分のパートナー以外の異性と関係をもつことを姦淫といいます。この第七戒では、そうした不適切な男女関係を禁じています。

今、この場所に集っているみなさんはまだ結婚していませんね。それでは、結婚をしていない皆さんには、この戒めは関係ないのでしょうか。そうではないのです。この第七戒は、よりよい結婚関係、ただしい性の用い方についても教えていきます。ですから、皆さんもこの七戒についてよくよく考えてもらいたと思います。皆様の周りには、性について、男女の関係について様々な情報が流れています。学校でも習うと思います。でも聖書がどのように教えているのかを、今日は一緒に考えてみたいと思います。

今日は創世記の2章のところから、最初に女が創造されたところを学びました。神さまは、7日間でこの世界をお造りになりましたが、最後に人間を造りました。人間は最後に造られたので、創造の冠と呼ばれます。そのような創造の冠である人間を、神さまは男と女に創造されたのです。

最初に造られたのは男でした。男は独りででした。しかし、神さまは、人が一人ではいるのはよくないとお考えになりました。そして、彼にあう助け手を造ろうと決意なされました。どうして、人は独りでいるのはよくないのでしょくか。それは、人が神さまのかたちに造られたからです。神さまのかたちってなんでしょう。神さまは私たちのように、手や足があるわけではありません。神さまの性格のことです。神さまは、この世界を造って、この世界といつも関わりを持っておられます。そして、人間をつくり、私たちとも関わりを持っています。そうした神さまの性格。この世界を造り、愛をもって私たちに関わってくださるその性格を神さまは人間にも与えました。だから、人間は独りでいるのはよくないので。神さまが、絶えず交わりを持っているように、人もお互いに関わり合う関係としてつくりました。

ところで、助け手という言葉は、ヘルパーやお手伝いのことではありません。この言葉は向き合うという言葉です。みんなは学校でフォークダンスをしたことがありますか。ダンスをする時に二人一組になると思います。その時に、二人は向き合います。これが、助けてという言葉の意味なん

ですね。お互いに向き合い、目と目を見つめ手と手を取り合うのです。それが、男と女なんですね。こうして、男と女が創造されました。これが、最初の結婚なんです。助け手として女が与えられた時、男は喜びました。それは、助け手があたえられたことを神さまに感謝したのです。

このように、男と女が創造されました。このように、結婚とは神さまの創造に根拠があるのです。そこには、神さまのお考えがあり、順序と守るべきものがあります。それを守る時に祝福があたえられるのです。

今日のお話は、第七戒のお話です。姦淫は結婚を壊すものです。ですから、神さまは姦淫を禁じています。それは、結び合わせている二人を離すものだからです。

姦淫してはいけない、という教えが結婚と結びついていることがよくわかると思います。ですから、この第七戒を、ただ単に結婚している人の問題だとは考えるのではなくて、祝福された結婚に向かうためのものだと考えてみたいと思います。

祝福された結婚のために、相応しい関係を異性との間にもつことが大切です。それは、自分の思いを中心にするのではなくて、何を神さまが望んでおられるのか。このことを最優先にすることです。そのために、きよく体を保ちたいと思います。神さまを第一とする時、私たちは何を大切にすることが見えてきます。

結婚すること、家庭を持つことは神さまからの祝福です。この祝福に向かうためにも、第七戒の言葉を心にとどめましょう。 (小宮山裕一)

〔今週の暗唱聖句〕 創世記 2章18節

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

そうせいき2:18～25をよみましょう

1. かみさまはなんといわれましたか。

2. 人は、けものやとりにたいして、なにをしましたか。

3. 人は、じぶんにあうたすけるものを見つけることができましたか。

4. そこで、かみさまは人をどうしましたか。

5. 人は、女を見たとき、なんといいましたか。

6. 人は、せいちょうするとどうなりますか。

7. 神さまがあたえてくださったたすけるものに、どうせつするのがよいでしょうか。

テキスト エフェソの信徒への手紙 4章25～32節
子どもと親のカテキズム 問76, 77
参考教理問答 ハイデルベルク信仰問答 問110, 111
ウェストミンスター小教理問答 問73～75

問76 第八戒は何ですか。

答 「盗んではならない」です。

問77 第八戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 私たちの持ち物は、私たちの体もお金も時間も、すべて神さまからの贈り物です。神さまは、それらに感謝し、ふさわしく管理し、神さまの栄光のために用いることを求めておられます。神さまの贈り物を自分勝手に使ったり、他の人のものを盗んだりしてはいけません。

〈聖書テキストの解説〉

本日は十戒の第八戒である。聖書テキストはエフェソの信徒への手紙4章25～32節を扱う。

エフェソの信徒への手紙では、3章より教会論が始まる。4章の主題もいわば教会に関する教えであるが、前半部分では教会の頭なるキリストと教会に集う一人一人が結びあわされているという奥義について語る。そして、後半部分では新しくされ、教会に集い神に結ばれたものがどのように歩むのかが語られる。そして、光の子として歩むようにというおすそめが5章より始まる。

4章25節から32節で語られていることを取り上げると「偽りを捨てること」(25節)、「怒ったままではないこと」(26節)、「盗んではいけないこと」(28節)、「悪い言葉を口にしないこと」(29節)である。これらは、普遍的な善悪の基準に照らしても、悪いものであるということはいわずもがなであろう。しかしながら、この箇所が一般的な倫理基準とはことなるのは、「神の聖霊を悲しませてはいけません」(30節)といわれていることである。聖霊が与えられたのは、御国を受け継ぐための保証(エフェソ1:14)であり、贖いの日の保証である(30節)。ここでいう保証とは、手付金を意味する言葉(ギリシャ語：アラボーン)である。その意味するところは、私たちが地上で聖霊を与えられているのは、天の御国を確実に与えられており、その前味であるということ。そして私たちの救いが完成に確実にいたるということである。

ある。そのような存在として、私たちは盗んではならないという教えを聞く。その結果、この教えをただの倫理基準ではなく、聖霊が与えられている者として、相応しく歩むために、この教えを実行していくのである。

そうした聖霊が与えられた者にとって、盗むなどという教えは、隣人との関係において、大切なものであることは言うまでもない。しかしながらその根底には、神が私たちにくださった贖いの業がある。この贖いの御業に感謝をするとき、感謝の具体的な現れとして、盗むなどという行為が信仰生活の中で実現されていく。

〈子どもカテキズムの解説〉

この世界にはたくさんのものがあふれている。特に、日本のような豊かな国では(もちろん各人によって程度はあるにせよ)人々は多くのものを所有している。こうした社会にあって、教会に集う子ども達の中で、例えば万引きといった窃盗行為を実際に行ったことがある子どもは少ないのではないだろうか。しかしながら、盗むなどという教えの射程はただ窃盗行為を禁じているだけではなくもっと広いものである。

本文問の答えの冒頭にあるように、私たちに与えられているもの全ては神様からの贈り物である。聖書は、「地とそこに満ちるもの世界とそこに住むものは、主のもの」(詩編24:1)と語る。この世界の全てを収めておられる神が、私たちに

必要なものを相応しく与えてくださるのである。あらゆる所有物が自分のものではなく、贈り物であるということは、私たちが持っているものを神様に喜ばれるように管理するという、他人のものを不正に奪ってはならないということの基礎になる。

答えにある「神様の栄光のために」とは神様に栄光をお返しすること。それは、神様が喜ばれることを実行していくということ。第八戒との関わりでいえば、与えられた物を、神様のために、さらに隣人のために用いることが、神の栄光を現すことの具体化ではないだろうか。

〈黙想〉

第八戒は、狭い意味でいえば他人のものを盗んではならないという教えであるが、本問で問われていることはより広いものである。

もっとも身近なお金を例にして考えてみると、金銭に対して聖書は注意するようにと教えている。それは、金銭がただの紙切れでもなく、金属でもなくそれは霊的な力を持つことがあるからである。それは、イエスさまがお金を「マモン」という異教の神の名前をもって表したということからも明らかである。与えられたものを正しく管理し、盗んではならないと教える第八戒は、ただ単に倫理基準を教えるわけでも、経済観念を教えるためのものでもなく、神を信じる時に私たちにとって時に誘惑となる金銭に対しても、正しい距離を取るようおしえている。もちろん、そうしたあり方は自らの力によってなしえるのではなく

て、聖霊なる神の力によって行われる。聖化の歩みが続くなかで、与えられた物を管理し、適切に扱うようになっていく。もちろん、それは神の栄光のために。

そして、与えられた物を正しく管理することだけではなくて、他人のものを不正に奪わないということも第八戒の射程に入っている。それは、隣人愛の実践である。私たちは他人のお金を奪うことはないにせよ、時間を奪ってはいないだろうか。他人にストレスを与えることは、他人の健康を奪うことになってしまう。

もっと積極的に第八戒を理解するならば、エフェソ4:28でいわれているように困っている人に対して分け与えることである。これは「受けるよりは与える方が幸いである」(使徒20: 35)というイエスさまの教えに結びつく。神の栄光を表すための所有物管理の最たるものは、他人に与えることではないだろうか。

〈子どもたちに対して〉

盗むなという教えは、こども達にとってもわかりきっていることではないだろうか。しかし、その教えの範囲は広く、あらゆるものが神から与えられた物であること、正しく所有すること、他人のものを盗んではならないこと、与えることを含む。こうした第八戒の精神を伝えたい。

具体的には、お小遣いをどのように使うのか。献金の仕方について。さらに、困っている人を助けるということ。そうした事にふれていただきたい。
(小宮山裕一)

テキスト エフェソの信徒への手紙 4章25～32節
子どもと親のカテキズム 問76, 77

〔単元のねらい〕

十戒の第八戒を扱う。「盗んではならない」との教えは極めてシンプルで、疑いようもない。盗んではならないというのは、法律においても、世間の常識においてもよく知られている。しかしながら、十戒の文脈でこの八戒を考える時、それらはただの倫理基準ではなくて、神と人とを愛するために大切なものとなってくる。単純だからこそ、第八戒の意味についてこどもたちと分かち合いたい。

盗むのではなく、与える

皆さん、おはようございます。

このところしばらく、十戒について学んでいます。今日は8つめの教えです。

十戒の八戒は「盗んではならない」です。盗みをしてはいけません。こんなの当たり前ですね。例えば、他人のものを盗んだらどうなるでしょうか。警察に捕まります。他人のものを盗んではいけないというのは、誰でもが理解していることだと思います。

それでは、どうして神さまはこんな当たり前のことを教えたのでしょうか。それは、この八戒がただの善悪を問題にしているのではなくて、隣人との関わりの中で、神さまとの関係の中で大切だからです。ですから、自分は盗みをしたことがないからといって、この八戒とは関係ないと思わないで、しっかりと学びましょう。

今日の聖書は、エフェソの信徒への手紙の4章25節から32節でした。このエフェソの信徒への手紙は、教会について、そして教会に結ばれている私たちがどのように歩むべきかを教えています。この手紙を書いたパウロは、キリストに結ばれて、教会に集う人々のことを「新しい人」と呼んでいます。イエスさまを救い主として信じますと、私たちは新しい人になります。もちろん、姿はそのままで。でも、聖霊によって、私たちは新しくされていくのです。それは、神さまに結びあわされて、天の御国に向かって歩む人です。自己中心から神中心に向かう人です。そうした新し

さを、教会に集う一人一人は持っています。新しい人には、新しい人らしい歩みというものがあります。今日の聖書箇所、パウロは新しい歩みについて、いくつか教えています。古い人（神さまを信じる前）との比べることによってそのことを教えています。その中に盗んではならない、という教えがあります。でも、これはただ悪い事を教えているではありません。30節にあるように、聖霊を悲しませていけない。この理由で、盗んではいけないと教えています。そして、ただ、盗みが悪いからこのようなことをしてはいけない、ということではなくて、もっと積極的に、自分できちんと働くことや、困っている人を助けることを教えています。

聖霊なる神さまは、私たちの助け主として、イエスさまが送ってくださったお方です。この聖霊なる神様に助けられながら、私たちは信仰生活を送っています。聖霊は私たち一人一人に与えられていますので、私たちが盗みという行為をすると聖霊が悲しまれるのです。なぜ、聖霊が悲しむのかといいますと、盗むということは、神さまが望んでいることではないからです。盗むことは、全てのものを与えてくださる神さまを裏切ることであり、周りの人々との関係を壊す第一歩になります。

それでは、神さまは私たちにどのようなことを望んでいるのでしょうか。カテキズムを鍵にいくつかの事を確認しましょう。

一つ目は、私たちに与えられているものは、全て神さまからの贈り物であるということを覚えて感謝するということです。体も、時間も、お金も神さまが私たちに与えてくださったもので、本来は神様のものです。私たちは、神様からのプレゼントを、自分勝手にではなくて、感謝しつつ神様が喜ばれるように用いていくのです。

二つ目は、神さまの栄光のために、与えられた物を用いるということです。これは、神さまが喜ぶようにということです。神さまは、私たちが持っているものを、周りの人のために用いるようにといわれました。有名なイエスさまの言葉を覚えたいと思います「受けるよりは与える方が幸いである」。この言葉を覚えましょう。盗むなという教えは、より積極的に、周りの人々に対して、与えるということに結びつきます。

こうした教えを踏まえて、八戒を私たちの生活にどのように役立てていけば良いでしょうか。みんなも、お小遣いとか、たくさんのお金とか、多くのものを持っていると思います。

盗むなという教えですから、他人のものを盗んではいけないということはいまでもありません。友達のものが欲しいと思っても、盗むことをしてはいけません。そして、お金に関してもしっかりと管理しましょう。お金はとても強い力を持っています。神さまと富の2つに仕えることはできません。もちろん、お金それ自体が悪いわけではありませんが、お金に集中してしまう、お金の一生懸命になってしまう私たちです。神様に正

しく管理できるようにお祈りしましょう。また、教会に献金をすることは良いことです。お小遣いの中から少しでもよいので、神さまにおささげしましょう。

次に、時間について考えてみましょう。時間も神さまから与えられた物ですから、きちんと管理したいものです。1日のうち、少しずつでもよいので、神さまにお祈りをしたり、聖書を読んだり礼拝したりする時間につかいましょう。そして、もう少し大きくなって、大学生や社会人になったら、困っている人のことを思ってボランティアにいくと良いかもしれません。

次に、体について考えましょう。私たちが神さまから与えられているものの中で肉体はとても大切なものです。健康に過ごして二体を正しく管理したいものです。他人をいらいらさせることは、その人の健康を奪うことにつながりますから、周りの人々と平和に過ごすことができるように、聖霊なる神様にいのりましょう。

そして、周りの人に与えられているものを欲しいと思うのではなくて、今あるものに満足しましょう。神様の恵みは、確かに私たちにあたえられていますから、神さまから与えられているものに注目してみましょう。

このように、私たちは神様からたくさんのお金を贈り物として与えられています。そうしたものに感謝しつつ、少しずつでも神さまが喜ばれるようにもちいていきましょう。(小宮山裕一)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 20章35節

受けるよりは与える方が幸いである。

エフェソのしんとへのてがみ 4:25～28をよみましょう

1. わたしたちは、なにをかたうようおしえていますか。
2. いかることがあったとき、なにをしないようにきをつけるべきですか。
3. ぬすみについて、どうおしえていますか。

エフェソのしんとへのてがみ 4:29～32をよみましょう

4. ことばをはなすときに、きをつけることはなんでしょうか。
5. どんなとき、かみさまのせいいはかなしみますか。
6. おたがいに、どういうたいどをとるようにおしえていますか。

エフェソの信徒への手紙4:25～32を読みましょう

1. わたしたちの口はどのように用いるべきですか。「語る」という語を探しながら考えてみましょう。
2. 盗みについて、何と書いてありますか。
3. 怒りについて、何と書いてありますか。
4. 「悪魔にすきを与える」のは、どういう時ですか。
5. 聖霊によって保証されていることは何ですか。
6. 私たちは何を捨てるよう教えていますか。
7. 他の人との関係は、どうあるべきだと思いますか。

テキスト
子どもと親のカテキズム

マタイによる福音書 26章69～75節
問78～79

十戒の第九戒は「隣人に関して偽証してはならない」です。この戒めは、たんに偽証しないことだけを求めているだけではありません。嘘をつかないでいることでこの戒めが守れるのであれば、早い話がだれとも交わらず、山にこもっておればよいのです。十戒の前半の四つは神を愛すること、後半の六つは隣人を愛することにかかわるわけですが、第九戒もまた隣人との関係において守られるべき戒めです。

この戒めはもともと裁判の法廷で証言することを考えてのものであったとされています。証人の証言はきわめて重いものです。そのひとことが隣人を守ることに也成了り、反対に傷つけることに成ります。また、隣人の一生を左右することにも成ります。それゆえ証人が偽りの証言をしたことがあきらかになったら、重い刑罰を科せられるのです。

もちろん、この戒めはただ裁判法廷だけを考えているわけではありません。私たちが生活するあらゆる場所、あらゆる場面で、神さまの真実を身に帯びて真実をつらぬくことを求めているのです。

では、わたしたちはどのようにしたなら神の真実に生きることができるのでしょうか。そのことをマタイによる福音書26章69～75節から学びたいと思います。

ここには主イエスの弟子たちの中でも一番弟子であるペトロが、主イエスを三度否認したことが記されています。驚くべきことです。一番弟子であるペトロが、わたしは主イエスとは関係がないと言ったのです。

しかし、わたしたちはペトロをこの自分とほかにして考えることはできません。ここでのペトロの中にあるものは、わたしたち自身の中にも見出せるものです。わたしたちもこのようにして神を裏切り、人を裏切る者です。ここでのペトロは決してわたしたちにとって別人ではありません。む

しろここでのペトロは、自分自身の姿を映し出す鏡のような存在です。ここでペトロがさらけ出している姿にこそ、あらゆる人間の問題があるので

す。なぜペトロは主の真実に生き抜くことができなかったのでしょうか。主イエスが弟子たちに、あなたがたはわたしを何者だと言うのかとお問いになった時、ペトロは弟子たちを代表するかたちであなたこそメシア、生ける神の子と答えました(16章16節)。主イエスはこれをお喜びになって、彼にペトロ、すなわち岩という意味をもつ名をお与えになったのです。

それはどういうことでしょうか。主イエスをメシア、生ける神の子と信じ、告白する信仰こそが岩なのです。主イエスこそ、人間が本当にその命と存在の土台と、もといとするにふさわしいお方です。

実はペトロはこのこと、この信仰のいちばん大切な事柄について、思い違いをしてしまっていたのです。彼は自分を岩のように揺るぎない存在と思い、信仰とは自分の力で主イエスに従っていくことだと考えていたのです。自分は一番弟子だから、自分が一番すぐれた弟子だから、ほかの弟子はいざ知らず、自分だけは最後まで主イエスに従いとおすことができると考えていたのです。

しかしペトロは主イエスが予告されていたとおり、鶏が鳴く前に三度主イエスを否みました。彼は主イエスが今しも十字架に引いていかれようとするそのとき、自分の弱さ、やりきれなさ、そしてはかり知れない罪深さを知りました。いちばん大事なときに、自分の信念も確信も何の役にも立たなかったことを思い知らされたのです。そして自分の貧しさとみじめさに、悔恨の涙を流したのです。

けれどもこの涙はペトロにとって、本当に必要な涙であったのです。この涙によって、彼は自分は決して岩ではない、より頼むべき者ではないと

いうことを身をもって知ることになったからです。自分が岩だと思い込んでいる間は、彼には信仰とは何かということがわからないままであったでしょう。自分の知恵や力、自分のわざや功績、自分が神の前に積み上げた何物かが自分を救うのだと、これこそが自分の誇りだと信じているかぎり、彼にとって主イエスは遠い存在、それこそ無関係なお方にとどまり続けたでしょう。それゆえ、自分のふがいなさを泣くこのペトロの涙は、神のみこころに沿う涙であったのです。彼のこの悲しみは、神のみこころにかなう悲しみであったのです。

人間が最もみじめなとき、最も低くくずおれたとき、もはや自分を支えるすべもないとき、主イエスはなおも彼を支えておられます。守っておられます。人間がご自分を裏切るとき、それにもかかわらず神はなお人間を愛し、赦し、彼の岩であらうとされるのです。彼とともにあらうとされる

のです。何と大きな愛、何と深い憐れみでしょうか。

信仰とは自分で自分を支えるのではなく、神の愛と慈しみに支えられて生きることです。そのことがわかったときにこそ、本当の信仰のいとなみが始まります。古いシモンは過ぎ去り、真にペトロと呼ばれるにふさわしい人間が誕生するので

す。そしてそこでこそ、第九戒を守り行って生きるわたしたちの道、命の道が開かれていきます。主イエスが十字架に死なれ、復活されたことにより、わたしたちは罪贖われ、新しい命を生きる者とされました。生きているのはもはやわたしたちではなく、キリストがわたしたちの内に生きておられるのです（ガラテヤ2:20）。神がわたしたちを霊の人、神と人において真実をつらぬく人間に造りかえてくださったのです。（木下裕也）

テキスト マタイによる福音書 26章69～75節
子どもと親のカテキズム 問78, 79

〔単元のねらい〕

「ペトロの否認」の箇所が語り示している事柄は明瞭である。わたしたちは自分を土台としているかぎり、真実に生き得ない。主イエスを信じ受け入れ、主イエスの恵みによって新しい人とされ、聖霊に生かされることによってはじめて神の真実に生きることを得る。第九戒を守り行って生きる者とされる。この事実を子どもたちとともに確かめたい。

イエスさまの真実によって

今回は十戒の第九戒を学びます。第九戒は「隣人に関して偽証してはならない」です。

この戒めは、ただ嘘をつかないことを求めているわけではありません。嘘をつかなければこの戒めを守ったことになるのなら、だれともお付き合いをしなればよいのです。人に会わなければよいのです。

けれども、わたしたちは神さまとの交わり、隣り人との交わりの中で生きています。この戒めも、隣り人との交わりの中で守り行うべきものです。さらに、第九戒は嘘をつかないことにとどまらず、もっと積極的なことを求めています。「子どもと親のカテキズム」問79を見ましょう。

問 第九戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 神さまは真実な方ですから、私たちにも真実をお求めになります。悪いうわさを流したり、うそをついて、友だちを傷つけてはいけません。いつも愛のうちに真実を語りましょう。

このように、第九戒はわたしたちに神さまの真実に生きるべきことを求めています。真実に生きることは、愛することと深く結びついています。真実を語ることによって人の命が守られることもあります。真実をつらぬいて生きることは、神さまから与えられた命の幸いに生きること、神さまにあって人を愛し、人の命を大切にすることとひとつなのです。

ただ、あなたは真実に生きていますかと尋ねられるなら、わたしたちは必ずしも自信をもって「はい」と答えられないところがあるのではないのでしょうか。わたしは一度も嘘をついたことがない、わたしは一度も約束を破ったことがない、わたしは一度も人を裏切ったことがないと言える人は、わたしたちの中にひとりもないのではないのでしょうか。

パウロという伝道者は、わたしは善きことをなしたいと欲しているのに、望まない悪を行ってしまう、それは生まれつきわたしの中に罪の法則が宿されているからだと言っています。このように、わたしたちの中にある罪が、わたしたちが真実に生きることを妨げていることも確かなのです。

では、わたしたちはどうしたら真実に生きることができるのでしょうか。

今朝の聖書箇所、マタイによる福音書26章69節以下には、イエスさまの弟子たちの中でも一番弟子であるペトロがイエスさまを裏切ってしまったことが記されています。ペトロはイエスさまが捕らえられ、十字架につけられる直前に、こわくなってイエスさまなんか知らない、会ったこともないと言ったのです。それも、三度も繰り返してそのように言ってしまったのです。

驚くべきことです。けれども、わたしたちはペトロをわたしたち自身とほかの人だとは考えることができません。この人の中にある罪と弱さ、真

実に生きられない悲しみは、わたしたちの中にもあるものだからです。わたしたちにも身に覚えのあるものだからです。

なぜペトロは真実に生き抜くことができなかったのでしょうか。「ペトロ」とは、イエスさまがこの人に与えてくださった名前です（もともとの名は「シモン」と言いました）。「ペトロ」とは「岩」という意味です。それは、イエスさまこそが救い主、わたしの命のもとい、わたしを揺るぎなく支えてくださるお方ということです。ペトロがそのようにイエスさまを信じ、告白したことをお喜びになって、イエスさまは彼を「ペトロ」と名づけてくださったのです。

けれどもペトロは十字架を前にしたこのとき、大きな思い違いをしてしまっていたのです。つまり自分自身を岩のように揺るぎない人間と思い、イエスさまを信じるとは自分の力でイエスさまに従っていくことだと考えていたのです。自分は一番弟子だから、自分が一番すぐれた弟子だから、ほかの弟子はいざ知らず、自分だけは最後まで主イエスに従いとおすことができると考えていたのです。

しかしペトロはイエスさまがあらかじめ告げて

おられたとおり、鶏が鳴く前に三度イエスさまを裏切りました。そして激しく泣いたのです。イエスさまに真実をもっておこたえすることができなかった自分のみじめさに泣いたのです。

このつらい経験の後、ペトロはイエスさまの真実を知ることになります。ペトロはイエスさまが自分のためにも十字架にかかってくださったこと、自分のためにも復活されたことを知ったのです。そしてイエスさまを信じるとは自分の中の真実に頼ることではなく、彼を愛し、彼を生かしてくださるイエスさまの真実を新しい、高価な着物のように着せられて生きることなのだとことを知ったのです。

イエスさまが十字架に死なれ、三日目に甦られたことにより、わたしたちは罪贖われ、新しい命を生きる者とされました。神さまがわたしたちを霊の人、神さまと隣り人とを真実に愛する人に造りかえてくださったのです。

わたしたちは新しい人とされました。神さまの恵みによることです。そしてそのことによって、わたしたちが第九戒を守り行って生きる道が開かれたのです。
(木下裕也)

〔今週の暗唱聖句〕 申命記 32章4節

主は岩、その御業は完全で／その道はことごとく正しい。

真実の神で偽りなく／正しくてまっすぐな方。

マタイ26:69をよみましょう。

1. ペトロがいたのはどこの中庭ですか？なぜ、ここに来たのでしょうか？（26:57, 58もよんでみましょう）

2. 女中はペトロに何と言いましたか？

マタイ26:70～74をよみましょう。

3. ペトロは何とこたえましたか？どんな気持ちで、そう言ったと思いますか？

4. ペトロは合わせて何回「分からない」「知らない」と言いましたか？

マタイ26:75をよみましょう。

5. にわとりがないとき、ペトロは何を思い出しましたか？（26:34, 35もよんでみましょう）

6. なぜ、ペトロはいたのですか？何がかなしかったのでしょうか。

マタイ26:69を読みましょう。

1. ペトロがいたのはどこの中庭でしたか？なぜ、ここに来ましたか？（26:57, 58参照）

2. 女中はペトロに何と言いましたか？どんな気持ちで言った言葉でしょうか？

マタイ26:70～74を読みましょう。

3. 女中の言葉に対して、ペトロはどのように答えましたか？

4. その後起きたことと、ペトロの反応を説明してください。この時、ペトロはどんな気持ちだったでしょうか？

マタイ26:75を読みましょう。

5. ペトロが思い出したイエス様の言葉は何でしたか？

6. なぜ、激しく泣いたのですか？

7. 26:34, 35を合わせて読みましょう。34, 35節、70～74節、そして75節のペトロの心の変化について話し合しましょう。

テキスト マタイによる福音書 6章25～34節
子どもと親のカテキズム 問80, 81

問80 第十戒は何ですか。

答 「隣人の家を欲してはならない」です。

問81 第十戒で、神さま私たちに何を求めておられますか。

答 神さまは、私たちにすべて必要なものを与えてくださいます。むさぼりは、この世のものを神さまとする偶像礼拝です。神さまは、私たちが、他の人のものをねたまず、自分の持ち物に感謝し、満足し、人の幸せを願うことを求めておられます。

〈カテキズムの解説〉

第十戒の解説である81問の答えは、三つの主張から成っている。第一の部分は、「神さまは、私たちにすべて必要なものを与えてくださいます。」という前半部であり、ここでは、必要を備えてくださる神様の配慮と支えが確かに存在することが訴えられている。第二の主張は、「むさぼりは、この世のものを神さまとする偶像礼拝です。」という中間部であり、ここでは、むさぼりは神ではなく世に頼り、それを支えとする根本的な方向性の結果であることが語られ、その態度は偶像礼拝に当たるという批判がなされている。第三の後半部は、第十戒が語る禁止事項を、上記の二つの主張を基として繰り返している。

第十戒は、十戒の最後の結論だとも言えるが、81問の答えにあるように根本的なところからその戒めを理解する時、それは、神を唯一の神とし偶像には仕えないという、第一戒の主張から導き出される唯一神信仰の具体的な適用の意味をも含み持つものとして理解されることができる。

〈聖書テキストの解説〉

当該箇所の前には、「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」という主イエスの言葉が既にある。ここには、神以外のものを宝とすることで、私たちが偽りの神を作り上げ、それに仕えてしまうという偶像礼拝への方向性が指摘されている。

主は語られた。「だから、言っておく。自分の

命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。」(25節)。

命の尊さはどんな食べ物にも勝り、体の尊さは、どんな衣服にも勝る。私たちが食べ物や衣服にいくら気を配ったところで、それが根本的に命と体を支えているのではない。このことを知れど、主は言われる。もし神様が、私たちに命と体とを与えてくださらないのなら、いくら私たちが食べ物や衣服に思いわずらったところで、それが何の役に立つのか。私たちが思い煩う食べ物や衣服は、神様がわたしたちに下さった命や体に比べたら、ほんの小さなものにしか過ぎない。神が私たちに命と体とを与えてくださったお方であるならば、それに続く食べ物や衣服などのものも、神様が与えて下さらないはずがない。

そこで主は、思い悩む者に視点の転換を迫られる。聞き手の視線を自分から離し、それをグイと自然界へと向けさせられる。「空の鳥たちをよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。」(26節)。

これは神を信頼せよとの招きである。鳥たちは、私たちが持つような思いわずらいを知らないが、神によってすべてを備えられ、健やかに養われている。それゆえに、あなたは神を一体何者であると捉えているのかと、主は問われる。

そして主イエスは、思いわずらいを乗り越える

ための方策、私たちへの大いなる約束を示される。「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存知である。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」(31～33節)。

異邦人が求めているものと、「あなたがた」が、「何よりもまず」求めなければならないものが対比させられている。「何よりもまず」というのは、ただ単に時間的に最初にそれをせよという意味だけに留らず、それは、他の全てに勝って、それを第一に据えよということである。

そして主イエスは結論として、最後にこう言われた。「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」(34節)。

思いわずらいに支配されている者は、今日という一日を感謝と満足をもって手にすることができず、また、今を生きる自分自身をも、ありのままに受け入れることができない。そこには常に不満、不足感が生じてしまう。しかし神は、私たちがかけがえのない今日の中で、そこで命を充実させて、神様の前に目覚めて生きることを求めておられる。

主が語られたことは、ひと言で要約するならば、委ねるということ。絶えず生じてくる思いわずら

いを、重荷を担ってくださる神に向けて、神を信頼しつつ、その方にお渡しするということである。

〈子どもたちに対して〉

思い煩いは誰にでもあり、子どもたちにとっても小さな問題ではないはずである。マタイ福音書が語る思い煩いは、第十戒の語るむさばりと符合している。むさぼることで、他人のものを奪うことで、他人と張り合い、追いつけ追い越せという関係で他者を見ることで、思い煩いの解決への、胆略的で、エゴイスティックな糸口を、私たちは見出してしまいがちであり、またそのような道筋が、罪ある私たちにはすぐに見える。けれども、主イエスが視点を鳥や花に向けさせ、大きな神の御業に着目させられた。このことに注目したい。主イエスの御言葉に導かれることで、私たちはハッと我に返ることができ、その時に、自分の本来の立ち位置、自分にとって本来的に何が最も大切なものであるのかに、気づくことができるようになる。自分の思い悩みや近視眼的な思考によって、内へ内へ、また細部へと、悩みの淵にはまり込んで行ってしまうがちな子どもたちを、主イエスが示された神を見上げる道筋へと招き、神が全てを備えてくださる方であり、神こそがその力をお持ちの方であるので、その方に信頼することこそ、悩みやむさばりの欲望からの活路があるのだということを、子どもたちに伝えたい。

(吉岡契典)

子どもと親のカテキズム 問80, 81

思います。

そしてイエス様は、「空の鳥を見てみなさい」と言われて、自分のことや自分身の回りのことばかりに心が問われている私たちの目を、ぐいっと自然の世界に向けさせてくださいます。そしてそうする時に、一番大切なものは何か、私たちは何をこそ一番に考えなければならないのかが分かります。

26節です。「空の鳥たちをよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。」

空の鳥は、種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。でもしっかり生きている。とても不思議です。彼らには冷蔵庫もなければ、お財布もない。けれども、空にはたくさんの鳥がいて、元気そうにしている。冷蔵庫がないのに、お腹が減って飛べなくなって、鳥が空からバタバタ落ちてくるということはない。なぜでしょうか？その秘密は、神様が鳥たちを養ってくださっているからなのだと、主イエスは言われるのです。

そして、28節からのところでは、野の花を見てもよと言われて、明日は抜かれて焼かれてしまうような、野の花でさえ、花は何も着飾っていないのに、綺麗だと言われる。あのような空の鳥でも、明日のことを心配せずに、楽しそうに生きている。野の花も、そのまま凄く綺麗だ、ましてや、あなたがたは、なおさらではないか。空の鳥は気楽でいいあとか、そういうことではなくて、あなたこそ、どんな時でも、空の鳥以上に喜んで、

楽しげに鳴きながら生きて欲しい人だ。あなたこそ、あの野の花よりも、もっともっとも綺麗で美しい存在として、歩んで欲しい。そのために、神様はあなたのすべてを支えて、すべての必要を与えてくださる。だから心配いらない。空の鳥や、野の花よりもずっと価値があり、美しく、綺麗なあなたが、衣服のことで思い悩んだり、明日のことを思い煩ったり、眠れないほど悩んだりしてしまうのは、もったいないと、イエス様は言ってくださっているのです。

31節以降には、こういう言葉もあります。「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。」

異邦人というのは、神様のことを知らない人たちという意味の言葉です。その人たちは、何を食べるかで自分は、決まる。何を飲んで、何を着るかで、自分は決まる。自分の価値がそれで左右されてくる。そう考えるのです。でも、あなたがたが神様のことを知っているならば、大丈夫だ。心配する必要はありませんという、イエス様の言葉です。

命懸けで、十字架にかかってまでして私たちの面倒を見て、守って、愛してくださるイエス様が、あなたにはついていきます。そのことが、自分にとっての一番大切なことです。その一番大切な支えを与えられている私たちは、安心して、深く悩み過ぎずに、あれが欲しい、あの服を着たいなどという思いに強く縛られてしまわずに、自由な心で、安心して歩むことができます。（吉岡契典）

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 6章26節

「空の鳥たちをよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。」

マタイ6:25～27をよみましょう。

1. イエスさまが教えてくださった、食べ物より大切なものはなんですか？服よりも大切なものは？

2. 鳥はどうやって食べるものを手に入れますか？人間はどうですか？

マタイ6:28～30をよみましょう。

3. 野の花はどうしてきれいにさくのですか？

4. 神さまは、わたしたちにひつようなふくをあたえてくださいますか？

マタイ6:31～34をよみましょう。

5. どんなことで、思いなやんではいけないのですか？

6. 神さまは、なにをごぞんじなのですか？

7. わたしたちが、まずもとめなければならないものは何ですか？

マタイ6:25～27を読みましょう。

1. 食べ物・衣服よりも、大切なものは何ですか？
2. 空の鳥を養っているのは誰ですか？人間は？
3. 私たちは、悩んで、自分の寿命を延ばすことができますか？

マタイ6:28～30を読みましょう。

4. 野の花が美しく咲くのは、どうしてですか？
5. ソロモンとは、どんな人ですか？
6. 「信仰の薄い者たち」とは、どんな人のことですか？

マタイ6:31～34を読みましょう。

7. 神の国と神の義を求めるとは、どんなことですか？
8. 私たちの命と体に必要なものは、どのように与えられますか？

テキスト	ローマの信徒への手紙 7章14～25節
子どもと親のカテキズム	問82
参考教理問答	ハイデルベルク信仰問答 問114, 115 ウェストミンスター小教理問答 問82 ウェストミンスター大教理問答 問149

問82 あなたは、このような神さまの戒めを完全に守れますか。

答 いいえ、それどころか、毎日思いと言葉と行いによって神さまの戒めを破っています。私たちはイエスさまによって罪が赦されていますが、今も罪を犯してしまいます。ですから、いよいよイエスさまにより頼み、罪の赦しときよめを求めます。

〈聖書テキストの解説〉

今回与えられた聖書箇所は、ローマの信徒への手紙7章14～25節です。パウロは、この箇所で自分の内にある罪について、率直にその悩みを告白しています。

この箇所は、パウロが復活の主イエスに出会う前、すなわち、キリスト者に回心する前の状況を告白しているものではありません。パウロは、復活の主イエス・キリストに出会う前は、自分は律法に従って生きているとの自負を持っていました。フィリピの信徒への手紙3章6節で、パウロは、「律法の義については非のうちどころのない者でした」と語っています。

パウロは、復活の主イエスに出会って、自分がいかに罪深い人間であるかを知るようになりました。そして、自分が律法の通りに、すなわち、主なる神の意志に従って生きていないことを思い知らされました。「わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。わたしは、自分のしていることがわかりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです」(7:14, 15)。

パウロは、自分の中に罪が働き、自分が望まないことをいつのまにか行ってしまうとその悩みを語ります。「もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、私の中に住んでいる

罪なのです」(7:16, 17)。

パウロは、救い主である主イエスとの出会いを通して、いかに自分が罪に対して無力であったかを思い知らされました。主イエスと出会う前は、「律法の義については非のうちどころのない者」と思っていたのですが、主イエスに出会ってからは、こう思うようになりました。「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善を行わず、望まない悪を行なっている」(7:18～20)。

こうして、パウロは、主イエスとの出会いを通して、自分が救われなければならない人間であることを思い知らされました。パウロは、罪人である自分の内に神の意志に反する罪があることをしっかり見つめてこう嘆きます。「それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。『内なる人』としては神の律法を喜んでいます。わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」(7:21～24)。

パウロは、主イエス・キリストによって自分がこの惨めな罪の状態から救われたことを心から喜んでこう言います。「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、

わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです」(7:25)。

このパウロが今まで語ってきた「わたし」とは、パウロ自身のことであることはもちろんですが、私たちそれぞれの現在の状況でもあります。私たちは、絶えず救い主イエス・キリストを見上げて、生きて行く必要があります。主イエス・キリストによる救いのすばらしさを知ったならば、惨めな罪の状態から救われていることを神に感謝せずにはいられません。

〈カテキズムの解説〉

子どもと親のカテキズム問82は、「あなたは、このような神さまの戒めを完全に守れますか」と問います。「このような神さまの戒め」とは、今まで告白してきた十戒の内容です。私たちは、十戒にあらわされている内容を模範として信仰生活を送ります。

しかし、この十戒の内容を完全に行って生きていける人は、この地上には、主イエス以外、誰もいません。私たちは、この十戒を行って生きていけないどころか、日々破って生きています。

私たちは、罪がなくなったのではなく、罪があるにもかかわらず、そのままの状態では罪赦されました。主なる神は、救い主イエス・キリストのゆえに、わたしたちがあたかも罪がないかのようにみなしてください。また、主イエスが行った完全な行いをあたかもわたしが行ったかのようにみなしてください。

ですから、私たちは、いよいよ主イエスにより頼み、罪の赦しときよめを求めつつ、信仰生活を送っていきます。

以上の関連として、ウェストミンスター小教理問答問82は、下記のように告白しています。

問82 だれか神の戒めを完全に守ることができるか。

答 単なる人間は、墮落以来、だれもこの世において神の戒めを完全には守れない。かえって思いと言葉と行いにおいて毎日にこれを破っている。

ウェストミンスター大教理問答問149は、下記

のように告白しています。

問149 だれか、神の戒めを完全に守ることができるか。

答 だれも、自分自身でも、あるいはこの世で受けたどのような恵みによってでも、神の戒めを完全に守ることはできない。かえって、思いと言葉と行為において、それを日ごとに破っている。

ハイデルバルク信仰問答問114、115は、もっと詳しく下記のように告白しています。

問114 それでは、神へと立ち返った人たちは、このような戒めを完全に守ることができるのですか。

答 いいえ。それどころか最も聖なる人々でさえ、この世にある間は、この服従をわずかにばかり始めたにすぎません。とは言え、その人たちは、真剣な決意をもって、神の戒めのあるものだけではなくそのすべてに従って、現に生き始めているのです。

私たちは、私たちの主である救い主イエスを模範として、神の戒めに従う生活を始めたにすぎません。信仰生活は、常に失敗の連続です。その失敗の中で、よりキリストのみに頼るという思いが日々強められていきます。

問115 この世においては、だれも十戒を守ることができないのに、なぜ神はそれほどまで厳しく、わたしたちにそれらを説教させようとなさるのですか。

答 第一に、わたしたちが、全生涯にわたって、わたしたちの罪深い性質を次第次第により深く知り、それだけより熱心に、キリストにある罪の赦しと義とを求めるようになるためです。第二に、わたしたちが絶えず励み、神に聖霊の恵みを請うようになり、そうしてわたしたちがこの生涯の後に、完成という目標に達する時まで、次第次第に、いよいよ神のかたちへと新しくされてゆくためです。

私たちは、十戒を学ぶことで、頼るべき方がただ主イエス・キリストのみであることを知らされます。(浅野正紀)

テキスト

ローマの信徒への手紙 7章14～25節

子どもと親のカテキズム 問82

〔単元のねらい〕

神さまが「愛の生活の規準」として示してくださった十戒を完全に守れる人は、この地上には、イエスさま以外にはいません。私たちは、ただ神さまの義を満たすことのできるイエスさまを通して罪が赦されています。神さまは、ただこのイエスさまを通して、私たちをあたかも罪がないかのようにみなしてください。ですから、私たちは、ただイエスさまに依り頼んで、信仰生活を送っていきます。

イエスさまに頼って生きよう！

今まで、十戒を第一戒から第十戒まですべて学びました。十戒は、神さまが神さまの言葉である聖書を通して、私たちに教えてくれた愛の生活の規準です。

もっとわかりやすく言うと、私たちは、十戒を学ぶことで、どうやって神さまと人を愛することができののかを知ることができます。

ですから、十戒の一つ一つの教えは、私たちが神さまを信じて生きていくため、また、お父さん、お母さん、お友だち、その他のいろいろな人たちに親切にして生きていくためにとても大切なものです。

ところで、十戒を守って生きていくことがとても大切なことであると教えられた後に、今日の子どもと親のカテキズム問82をみると、少しびっくりするようなことが書いてあります。質問をみてみましょう。

問82 あなたは、このような神さまの戒めを完全に守れますか

ここで質問されていることは、「十戒を完全に守れますか」ということです。一部分ではなくて、全部を完全に守れるかということです。少し言い方を変えると、「神さまと人を完全に愛して生きていくことはできますか」ということが質問されています。この質問の答えは、こうです。途中までみてみましょう。

答 いいえ、それどころか、毎日思いと言葉と行いによって神さまの戒めを破っていま

す。

先程も言った通り、私たちが十戒の言葉を学ぶことは、本当に大切なことです。ところが、十戒を学べば学ぶほど、自分が十戒を破って生きていることを思い知らされます。

私たちは、罪を持っていますから、神さまと人を完全に愛して生きていくことはできません。それどころか、毎日、思いと言葉と行いによって十戒を破り続けています。

パウロは、いくらよいことを行おうとしても悪いことをしてしまう自分の罪を嘆いてこう言います。「わたしは、自分のしていることがわかりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです」(ローマ7:15)。

私たちは、この世界で生きて死ぬまで、ずっと自分の中にある罪とたたかうことになります。神さまを知らない時は、自分に罪があるということも知らなかったので、神さまと人を愛さず自分勝手に生きていることが罪だとは思いませんでした。自分に罪があるとは思いませんから、罪とのたたかいもありませんでした。

ところが、聖書を通して、神さまを知り、自分が神さまと人を愛することができない罪を持っていることを知った時から罪とのたたかいが始まりました。

ただ、私たちは、聖書を通して、この罪から救われることができることも教えられました。神さまは、私たちを罪から救うために、御子イエスさ

まをこの世界に送って下さいました。この救い主イエスさまは、私たちを罪とのたたかいに勝利させてくださいます。

私たちの救い主であるイエスさまは、私たちを罪から救うために、私たちの罪の身代わりとして十字架にかけられ死んでくださいました。こうして、イエスさまは、神さまの義を満たして、私たちの罪の完全な償いをしてくださいました。

イエスさまは、罪の償いをして下さっただけでなく、完全な愛の行いを私たちに示して下さいました。神さまが「愛の生活の規準」として示してくださった十戒を完全に守れる人は、イエスさまだけです。

神さまは、このイエスさまのよい行いがまるで私たちが行ったかのようにみなしてくださいませ。神さまは、私たちに代わって、完全なよい行いをしてくださるイエスさまを通して、私たちを受け入れてくださいます。

ですから、私たちは、ただこのイエスさまに頼って生きていきます。問82の答の続きをみてみま

しょう。

答　ですから、いよいよイエスさまにより頼み、罪の赦しときよめを求めます。

パウロもこう言っています。「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」（ローマ7:25）。

私たちは、罪から救われたことの感謝をこの世界で神さまに行って生きていきます。私たちは、この感謝の行いを十戒に基づいて行います。私たちの感謝の行いは、なお自分の中に残っている罪のために不完全なものでしかありません。

しかし、神さまは、私たちの救い主イエスさまが行った完全な愛の行いのゆえに不完全な私たちの行いをも受け入れてくださいます。私たちは、何度、失敗しても、何度でも悔い改めて、私の救い主であるイエスさまに頼って生きていくことができます。

ぜひ救い主イエスさまに頼って、これからも十戒を学び続け、愛と感謝の行いを続けていきましょう。（浅野正紀）

〔今週の暗唱聖句〕　ローマの信徒への手紙 7章25節

わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。

このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。

ローマ7:14~25をよみましょう。

1. あなたは、りっぱう（十戒）を守りたいと思いますか？
2. なぜ、「わたし」は自分のしていることが分からないのですか？
3. 「わたし」が、自分ののぞまないことをしてしまうのは、何のせいですか？
4. 「内なる人」は、どんなものですか？
5. 「わたし」をすくってくださるのは、どなたですか？

2. なぜ、「わたし」は自分のしていることが分からないのですか？

3. 「わたし」が、自分ののぞまないことをしてしまうのは、何のせいですか？

4. 「内なる人」は、どんなものですか？

5. 「わたし」をすくってくださるのは、どなたですか？

ローマ7:14～25を読みましょう。

1. あなたは、律法（十戒）を守りたいと思いますか？

2. なぜ「わたし」は自分が憎んでいることをするのですか？

3. わたしの「内なる人」は、どんなものですか？

4. 「惨めな人間」とは、誰のことですか？

5. 救ってくださるのはどなたですか？

6. 私たちは、神様に何を感謝するのですか？

テキスト エフェソの信徒への手紙 5章6～10節
子どもと親のカテキズム 問84
参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問87
ウェストミンスター信仰告白 16章2節

問83 「十戒」は、罪を気づかせるためだけにあるのですか。

答 いいえ、「十戒」は、父なる神さまの愛の親心です。私たちは、救いの完成に向かって、祈りつつ、聖霊に助けられながら、光の子どもらしく、喜んで「十戒」を守って歩みます。

〈聖書テキストの解説〉

エフェソの信徒への手紙の5章6～10節を今回は取り上げる。エフェソ書は、1章と2章においてキリストに結びあわされる幸いを教えている。そして、キリストに結ばれたものとして相応しく歩むようにとはげましている4章の17節以下では、古い生き方を捨てるといこと、25節からは新しい生き方について教えているのだが、この2つはキリストに結びあわされて生きるということがどのような歩みかを教えている。それは、4章の17節によれば「異邦人と同じように歩んではなりません」といことであり、5章8節でいわれている「光の子として歩む」といことである。

5章6～10節では、光と暗闇が対比されている。これは1世紀のユダヤ人達の言葉使いで、神を信じている人々のことを光の子と表現した。その意味で、本当の子どものことだけを指しているのではない。神を信じる私たちが、光の子となるのはなぜか。それは、キリストが光りだからである。このお方に結ばれているから、光となるのである。これはたとえば言うならば、太陽と月の関係に近いのかもしれない。月はそれ自身では光を放つことはないが、太陽に照らされて光る。私たちも、本当の光であるキリストに結ばれてこそ光の子としていただけるのである。

光の子として歩むためには、むなしいことばにまどわされてはいけない(6節)。むなしいとは、からっぽということであり、中身がないということ。光の子として歩む時には、このようなむなしいことばにだまされそうになる。そうした言葉に

だまされてはいけない。そのためには、神の言葉を絶えず聞く事が何よりも大切。

7節には、仲間に引き入れられないようにという教えである。人間、弱いので朱に交われば赤くなる。そうした危険性を指摘している。神につながっているのなら、神に留まることが大切なのはいうまでもない。

こうして、8節で光の子として歩むことの大切さを教えている。手紙の作者は、あなたがたは以前には暗闇にいたという極端な言い方をしている。これは、キリストを信じる前は神を知らない世界にいたということで、そこから光の世界へと入れられた。もう暗闇にもどることはできない。そして、光のこどもには光のこどもらしい歩みがある。それが、善意と正義と真実の歩みであり、主に喜ばれる生き方である。それはむなしい言葉にまどわされる生き方とは比べものにならないほどの恵みの生き方だといえるだろう。

〈子どもカテキズムの解説〉

問83は、十戒の最後に位置する問答である。十戒のただしい用い方ともいえるだろう。十戒の一つ一つを読む時に、罪が指摘され、悔い改めに向かうのは自然なことである。それは十戒の大切な機能に他ならない。しかし、十戒の役割はそれだけではない。十戒は、罪を指摘するために与えられたのではない。出エジプトを経験したイスラエルが、その恵みを覚えつつ異教の神に迎合しないようにというまさに親心である。十戒は罪を指摘するだけでなく、神さまとの関係において心に留めるときに、律法ではなくて感謝の応答と

しての役割を果たすようになる。

十戒は、答えが記すように、救いの完成に向かうために不可欠である。それは、信仰者としての生活と十戒は深く関わっているからである。もちろん、十戒で全ての問題をカバーしているわけではない。しかし、偶像崇拜の問題、神礼拝の問題、親子の問題、性や結婚、財産の管理といった問題は避けられない。こうした問題に対処する時に、十戒の教えを心にとめることによって、神さまがなにを望んでおられるのかを知るのである。

十戒を感謝の応答として受け取るためには、祈りと聖霊の導きが不可欠である。罪赦された者を少しずつ清めてくださる聖霊の導きに従って、十

戒を心にとめていきたい。そうすれば、光のこどもらしく歩む歩みを生涯続けることができるであろう。

〈黙想〉

エフェソの信徒への手紙5章10節は、何が主に喜ばれるのかを吟味するようにと教えている。主に喜ばれるために、私たちに与えられているひとつの基準が十戒である。十戒を守る道を、主は祝福してくださるだろう。そのような歩みを行う人のことを光の子と聖書は呼ぶ。光の子として歩む時、十戒は良き道しるべとなって私たちを照らし出す。

(小宮山裕一)

テキスト エフェソの信徒への手紙 5章6～10節
子どもと親のカテキズム 問83

〔単元のねらい〕

十戒をただの倫理基準ではなくて、信仰者として歩む時の感謝の応答と十戒を守りたい。それは光の子として歩むということであり、聖霊と共に歩むみちである。

光の子として歩む

おはようございます。今日も一緒に聖書の御言葉を味わいましょう。

今日は、エフェソの信徒への手紙の5章6～10節をよみました。そして、カテキズムは問83でした。これまでずっと学んできた十戒の最後の教えです。みんなは十戒を覚えましたが、十戒は私たちが信仰者として歩む時の一つの道しるべです。この道からそれないように、十戒をいつもおもい込めましょう。

皆さんは、小さい時には小さい時の、大きくなってからは大きくなった時の、そしてもっと成長したら、成長した時の、それぞれにふさわしい行動というものがあります。小さい時にはお父さんとお母さんに手伝ってもらいながら、色々なことをしました。でも大きくなった自分でできるようになります。大きくなったのに、何もかもお父さんやお母さんの手を借りる必要はありません。それぞれの年齢にふさわしい生活というものがあるのです。

信仰生活も同じです。神さまを信じるようになったら、ふさわしい歩みというものがあります。それは、神さまにてらされて歩むことであり、神さまが喜ばれる道を歩み、神さまの喜びを自分の喜びとすることなんです。

そして、その時に十戒がとても大切なんです。十戒は私たちが神さまのこどもとして歩む時に道しるべとなります。この道をいけば大丈夫です。それが、十戒なんです。十戒をこれまで学んできました。十戒を全部守るなんて無理だとおもったかもしれません。十戒を読むと自分の罪を指摘

されたような気分になって、心が痛むかもしれません。確かに、十戒から自分の罪を考えることは大切です。でも、私たちは十戒を完全に守ることはできないのです。でも、神さまのことを覚えながら、十戒を読む時に、十戒はただ罪を指摘するだけではなくて、十戒を通して神さまのことを深く知るようになっていくのです。

エフェソの信徒への手紙は、神さまと結ばれて歩む人の幸いを教えてくれる手紙です。神さまと結ばれて歩む人のことを、光の子として歩む、といっています。神さまの光をうけているということです。月を思いうかべてください。月はなんで光っているのか、わかりますか。そうです、太陽の光を受けているからです。光それ自体が光りを放っているわけではありません。私たちも同じです。私たちも神さまからの光を受けて光ることができます。こうして、光の子として歩むようになるのです。

光の子としてあゆむのは、むなしい言葉ではなくて、中身のしっかりある栄養のある神さまの言葉に聞くことから始まります。この世界には様々な言葉があります。でも、一番大切なのは神さまの言葉に思いをむけることなんです。これが、むなしい言葉にまどわされないために大切になります。

そして、むなしい言葉にまどわされないということよりも、もっと積極的に、光の子として歩むということがいわれています。その歩みとは、善意と正義と真実による歩みです。それは、神さまに喜ばれる歩みを続けるということなんです。

さっき読んだカテキズムに、十戒は神さまが
あたえてくれた「親心」と表現しています。みんな
のお父さんやお母さんも、みんながまちがった道
にいくことが無いように、言葉をかけてくれます。
時には、親の言葉はうざったいと思うかもしれな
い。でも、とても大切なんですね。私たちに必要
な言葉が、私たちの思っているものどおりとは限
らないのです。十戒も、神さまの親心として、必
要な言葉がきちんと入っているのです。

でも、これって本当に感謝なことだと思います。
神さまは、私たちに期待をしていなかったら、わ
ざわざ言葉を掛けてくれるはずがありません。神
さまは、私たちにふさわしい歩みをしてもらいた

い、と心から願っているから、十戒を与えてく
ださったのです。

そのように考える時、十戒を感謝して受け取る
ことができるのだと思います。神さまは、イスラ
ルの民をエジプトから脱出させてくださいまし
た。それと同じように、私たちを罪から脱出させ
てくださったのです。そして、罪から少しずつ離
れるためにも、十戒があるということを覚えたい
と思います。

光の子として歩む時、十戒は良き導き手です。
十戒を心に留めたいと思います。そして、十戒を
忘れることがないように、聖霊なる神様に祈りつ
つ、光の子としてあゆみます。 (小宮山裕一)

〔今週の暗唱聖句〕 エフェソの信徒への手紙 5章8節
光の子として歩みなさい

エフェソ5:6～10をよみましょう。

1. 「むなしいことば」とは、どんなことですか？

2. 神さまのいかりは、どんな人にくだるのですか？

3. わたしたちが「くらやみ」から「光」となったのは、どうしてですか？

4. 「光」とは、だれのことですか？

5. どんなことが、主によろこばれることでしょうか？ あなたにできることは何ですか？

エフェソ5:6～10を読みましょう。

1. 「むなしい言葉」とは、どんなことを指していますか？

2. 日々の生活の中で、「惑わせられる」ことはありますか？

3. 神の怒りは、どんな人に対して下るのですか？

4. わたしたちが「暗闇」から「光」となったのは、何によってですか？

5. 「光」とは、どなたのことですか？

6. 「光の子として歩む」とは、どのように生きることですか？ そのような歩みのためには、何が必要でしょうか？

テキスト	マタイ6章7～15節、ルカ11章1～4節
子どもと親のカテキズム	問84
参考教理問答	ウエストミンスター小教理問答 問99 ハイデルベルク信仰問答 問118

問84 神さまが聖書を通して示された祈りの規準はどこにありますか。

答 イエスさまが祈りの手本として教えてくださった「主の祈り」の中にあります。

〈聖書テキストの解説〉

主の祈りはイエスさまが弟子たちにお示しになった祈りである。では主の祈りが示されるに至ったいきさつについて、マタイ6章、ルカ11章はどう記しているのか。

マタイ福音書6章は、その前の5章から始まる「山上の説教」の一部を成す。1～4節では善行、施しが取り上げられ、それに続き7～15節で祈りが取り上げられ、イエスさまから主の祈りが提示される。この後16～18節では断食が取り上げられる。これらの箇所では共通して人からの賞賛や報いを求める偽善的行為が戒められ、人目につかないよう隠れてなされる行いを天の父なる神様が見て報いて下さることが訴えられる。

その上で7～8節では異邦人のように言葉数が多ければ聞かれるという態度でくどくどと述べる祈りが戒められ、天の父なる神に聞いていただくにはこれだけで十分という祈り、不必要なものをそぎ落とし本質的なところにだけ集約させた祈りの手本として主の祈りが提示されていく。

「異邦人」はここでは天の父なる神様とは異なるものを神として祈る人を指す。天の父なる神と異なる神とは、人間の想像の産物である偶像の神である。つまり人間の延長線上に形作られる神ということになってしまうから、この神への祈りは普段周りの人々に訴えかけ説得する時にも似て言葉数が多い祈りになってしまう。イエスさまは祈り方の誤りが神認識と深く関係していることを見抜き、「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」(8)とおっしゃって神認識を正して下さい。

他方ルカ11章では、弟子から「主よ、ヨハネ

が弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」とリクエストされたことに応え、イエスさまが主の祈りを提示されている。当時のユダヤのラビ（宗教指導者）は祈祷文を編んで弟子たちに教えたと言われ、洗礼者ヨハネも弟子たちに祈りを教えていたようである。マタイ9:14ではヨハネの弟子たちがイエスのもとに来て、「自分たちは断食するのにあなたの弟子たちは断食しないのか」と問いかけたことが記され、ヨハネ1:40ではペトロの兄弟アンデレが始めはヨハネの弟子であったことが記されている。「ヨハネが祈りを教えていた」との情報はこうしたルートから仕入れたことが推測される。

主の祈りを提示された直後の5節以下では、本来に必要なよいものについて、しつように根気よく願い続ければ天の父なる神は祈りに応え与えてくださる、とのメッセージが語られていく。その締めくくりは「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」(13)である。そこを踏まえると、ルカ福音書における主の祈りは天の父に祈り願うべき項目を精選し提示するという意味合いを持つ。更に主の祈りで祈り願う御国の到来、日々の糧、罪の赦し、誘惑からの救いは、聖霊との関連で与えられることになる。

マタイ、ルカ両福音書に共通する時代背景として、何代にも渡って信仰継承の歩みが重ねられてきたユダヤ人の信仰共同体、言い換えれば生まれた時から祈りというものがあることが当然と見られていた社会であったことを指摘しておく。特別に意識する必要もないほどに祈りという行為が浸透しているために、どう祈るか、及び祈りの対象である神がどんな方であるかについて神の言葉に基づ

いて改めて学ぶ必要を感じない、それゆえに各自で勝手に考えてしまい、知らないうちにあるべき祈りから逸脱してしまうこともままあったのではないか。現代のクリスチャンホームに生を受けた子どもにも同様の落とし穴が潜んでいる可能性があり、注意を払いたい。

〈子どもと親のカテキズムの解説〉

問84は、「第三部 感謝しつつ歩む道」の「3 祈りに生きる道」の冒頭に置かれている。それに続く問85～87では祈り全般についての問いを取り上げ、問88から主の祈りに立ち帰って細かく取り扱う構成となっている。従来の教理問答で祈りを扱う際には最初に祈り全般について扱い、次いで祈りの規準として主の祈りが与えられたこと、そして主の祈りの各論へと進んでいた。これは、聖書が示す望ましい祈りのあり方は主の祈りに集約的に十分に示されており祈りの規準として適切である、と確認した上で主の祈りの学びに進むという道筋である。それと比べると、祈りの規範が主の祈りであるとの問答を冒頭に持つてくるのは異例と言える。その意図は、子ども向けに祈りを教えるにあたっては、聖書に数多く記されている祈りのうちから、まず主の祈りを主眼に教えていくということを示すためと思われる。イエスさまも弟子たちに祈りを教えるにあたって、旧約聖書の詩篇など祈りに関する聖書箇所が様々あったにも関わらず、「祈るときには、こう祈りなさい」と言ってまず主の祈りを示しになった。祈りについて扱う聖書箇所をすべて総ざらえて学ぶことは一見正論であるが、その学びが終わるまでに時間がかかり、その間も日々生活は続いていく。学び終わるまで生活の場で適切に祈ることができる、というのでは人が祈りに生きることを願われる神様の御心からすれば本末転倒となってしまう。そこでまず主の祈りを学び、主の祈りを規範として早速祈りに生きる道へと踏み出して、祈った経験も踏まえつつ聖書の他の箇所から更に祈りの学びを深める（それは地上の生涯の終わりまで続くであろう）、というプロセスをたどることが実践的でもある。

イエスさまが祈祷論だけでなく、そのままな

ぞって使用することもできる「主の祈り」という祈祷文をも示してくださったことに、まずは生活の場で実際に祈りつつ生きるようにとの主の御心をみることができる。

〈黙想〉

世間一般において「祈り」は、祈る対象がばらつくことを別にすれば、「人間の根源的な欲求に基づいた活動様式であり、人間の社会において普遍的である」と見られている。それだけに、祈りは特に教えなくても誰もが行えるもの、と見る向きも多いかと思う。年の初めの初詣で祈り、追いつめられて「困った時の神頼み」をする姿を見ることはその証しと見られる。けれども神の御言葉の光に照らし出される時、罪に歪んだ心によって祈る対象が逸脱し、祈り方が逸脱し、祈るべき中身が逸脱していることが示される。天におられ、人間ではない神に祈るべきであるのに、私たち人間の地平へとひきずり降ろしてしまうのである。更には人間自身ではこの逸脱から脱することができない。弟子たちが祈りについてイエスさまから教えを受けようと願ったのは、弟子入り直後のことではない。弟子入りしてイエスさまとしばらく共に過ごす中で今までの祈りに疑問を抱くようになったであろう。併せて、その疑問の解決を自分たちだけで見つけ出すことができないことをも弟子たちは知り、立ちつくす思いとなっていた。そこにイエスさまが「祈るときには、こう祈りなさい」と、主の祈りを示してくださったのであった。

今回の説教例は、マタイ6章をベースに作成することにする。ルカ11章では天の父なる神様への祈りに絞りこまれて話が展開するのに対し、マタイ6章では7節で天の父なる神様とは異なるものに向かって祈る異邦人の祈りをも取り上げつつ話が展開することによる。日本においてはキリスト者の祈りだけでなく異教の神仏への祈りにも否応なしに接しながら生きていくことになる。そうした日本の状況の下で、「主の祈り」が真実の祈りの規準であることへと導き、主の祈りを学ぶ動機付けとなることを目指す説教としたい。

(吉田 崇)

テキスト マタイ 6章7～15節
子どもと親のカテキズム 問84

問84 神さまが聖書を通して示された祈りの規準はどこにありますか。

答 イエスさまが祈りの手本として教えてくださった「主の祈り」の中にあります。

皆さんは神様にお祈りしていますか。どんなことをお祈りしているかな。この「お祈りする」ということは、キリスト教会に来ている人だけができることではありません。日本では1年のはじめに神社やお寺に出かけてお祈りする初詣というのがあって、結構な人が出かけてお祈りをしています。学校などでも、明日は遠足です、運動会です、でもお天気が悪ければ中止です、という場合にはてるてる坊主を作ってお祈りするお友達がいるんじゃないかな。

あと年配の方から神社で「お百度参り」というお祈りをする人がいる、という話を聞いた人もいるかもしれません。お願いごとをかなえてもらおうと100回、いやそれ以上に神社に通ってお祈りをするものです。また冬場にテレビのニュースを見ていたら、冷たい滝の水に打たれながら必死にお祈りしている人の姿が映ることもあります。

他の人がやっているこんなお祈りの姿をみると、わたしたちがやってきたこの祈りで本当に大丈夫なんだろうか、と心配になる子もいるかもしれません。実はイエスさまのお弟子さんたちも、周りの人たちの祈りの姿を見聞きするうちに、本当に神様が喜んで聞いてくださるお祈りとは、どんなお祈りなのかな、と思い始めたのです。イエスさまとお弟子さんたちが生きていた今から2000年ほど前のイスラエルには、会堂や大通りの角に立ってお祈りする人がいました。会堂や大通りは人が一杯通っていきますから、祈る姿は多くの人の目に入ることになります。また聖書の神様、天の父なる神様とは違うものにお祈りする人もいました。そのお祈りは、一つのことを祈るのでも、あれこれ言葉数を重ねて祈るもので、人目にはすごく熱心に祈っているなあと映るものでした。

一体どういうお祈りがいいのかな、そう弟子たちが考え出していたある日、イエスさまが祈りについてお話をしてくださいました。「会堂や大通りの角に立って祈りたがる人は、他の人に見てもらうことにばかり気が向いている偽善者です。人に見てもらえた時点で、もう満足だと思っています。皆さんがお祈りする時には、人目に付かない奥まった部屋に入って扉を閉め、隠れたところにおられる天のお父様に祈りなさい。天のお父様は隠れたことを見て祈りに応えてくださいます。」

イエスさまのおっしゃる通り、お祈りは人目を気にしながらするものではないのです。それでは天の父なる神様よりも人目の方を大事にしてしまうことになるでしょう。

またイエスさまはこうもおっしゃいました。「祈る時は、天のお父様とは違う神に祈る人たちのように、くどくどと言葉数が多いだけにならないようにしましょう。彼らは、神様には一生懸命あれやこれやと手数をかけて語りかけないと聞き入れてもらえない、と思いこんでしまっています。でも天のお父様はそんなお方ではありません。あなたがたの天のお父様は、あなたがたが願いを言う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのです。」人に何かをお願いする時には、熱心に、一生懸命に、あれこれ手数を尽くしてお願ひする、というのでないと聞いてもらえないことがあるかもしれません。でも天の父なる神様にお祈りする時はそうではありません。お祈りの時に私たちが必死の努力を見せないで神様は聞いてくれない、というのではないのです。天の父なる神様は私たち一人一人生まれる前から心にかけ、手塩にかけてお作りくださり、深く愛してくださる神様です。皆さん一人一人が神様の子どもとしてよい人生、すばらしい人生を生きていってほしいと心から

願っておられます。そのために救い主としてイエスさまを送ってくださるまでしてくださいました。ですから、天の父なる神様は皆さん一人一人が今何を思っているんだろうか、何が一番必要なんだろうかということに深く関心を寄せ、的確に見抜いて分かっておられます。

そんな父なる神様に対して、どうやって祈ればいいのでしょうか。イエスさまは「だから、こう祈りなさい」と言って一つのお祈りを教えてくださいました。それが、教会でいつもお祈りしている「主の祈り」です。主の祈りは長々としたお祈りではありません。またこれをお経や呪文のように何度も繰り返さないといけないなどとも言われません。そんなことをしなくても天の父なる神様は確実にこの主の祈りに応えてくださるのです。またこの祈りには私たちにとって本当に必要なものが含まれています。神様のお名前が崇められるように、神の国、神様の御心がこの地上でも行われるように、毎日必要な糧を与えて下さるように、私たちの罪をお赦しください、どれも実は私たち

にとって本当に必要なものばかりなのです。「本当にそうなの?」「今先生に言われただけではわからないよ」という子もいるかもしれません。主の祈りについてはこれから何回かかけて丁寧に学んでいこうと願っています。そうすることで、主の祈りがどれだけすばらしいお祈りなのかをより深くわかってほしいと思います。

主の祈りは、教会の礼拝の時にだけ使うお祈りではありません。イエスさまは「教会でお祈りするときに主の祈りを祈りなさい」とはおっしゃっていません。どんな時にも、どんな場所でも「こう祈りなさい」とおっしゃって主の祈りを示されたのです。おうちをはじめ、いつでもどこでも、お祈りするときには、主の祈りに沿ってお祈りをしましょう、と求めておられるのです。ですから、主の祈りを学ぶことは、私たちがするお祈り全体を天の父なる神様に一層喜んでいただけるお祈りへと磨いていくことにつながります。主の祈りを通して、皆さんの祈りがよりよい祈りとなることを願っています。 (吉田 崇)

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 6章8節

彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、
願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。

マタイ6:7, 8をよみましょう。

1. 神さまは、ことばかずの多い長いおいのりだとよろこばれるのですか？

2. みじかいおいのりでもだいじょうぶなのですか？それはなぜですか？

ルカ11:1~4をよみましょう。

3. おでしさんがイエスさまにおねがいしたことは何ですか？

マタイ6:9~13をよみましょう。

4. イエス様が教えてくださったおいのりのお手本は何ですか？

5. おいのりは、だれにするのですか？

6. 「みながあがめられる」とは、どんなことですか？

マタイ6:14, 15をよみましょう。

7. わたしたちが人のあやまちをゆるさないと、どうなりますか？

マタイ6:7, 8を読みましょう。

1. イエス様は祈りについて、どんなことを注意されていますか？
2. 短い、言葉足らずのお祈りでも良いのですか？それはなぜですか？

ルカ11:1～4を読みましょう。

3. 弟子はイエス様に何を願いましたか？また、それはなぜですか？

マタイ6:9～13を読みましょう。

4. 初めに、誰へ、何を祈りますか？
5. 地の上で御心が行われる、とはどんなことですか？
6. あなたは日々の必要をいただいていますか？他の人はどうですか？
7. 誘惑に合うことがありますか？また、誘惑から守られた経験はありますか？

マタイ6:14, 15を読みましょう。

8. なぜ、わたしたちは人の過ちを赦さなければならないのですか？

テキスト

マタイ 1章1～17節

〈聖書テキストの解説と黙想〉

アドベントの季節、私たちを罪から救い出した、キリストへ心をむけたい。系図からメッセージを汲み取るための、ポイントは以下の通り。

- (1) アブラハムとキリストへとのつながり。
- (2) キリストの系図の中の様々な人々。
- (3) (2)と重なるが、イスラエルの全盛期から低迷期までのすべてがあること。

キリストの紹介の仕方としては、キリストとは、が神のアブラハムに結ばれた契約を、成就する者。その成就のされ方を説明するものが、(1)～(3)の背景であり、神が人に結ばれた契約に対する誠実さ、憐れみ深さが表れている。

(1) アブラハムからキリストへの系図

神はアブラハムに契約を結ばれた。(創世記 20:18) その契約を、神は常に守り続け、長い歴史を経て、キリストが成就させることになった。アブラハムの子孫として、またダビデの子孫として、キリストは間違いなく誕生している。キリスト出生の預言が成就されている。

(2) キリストの系図の中の様々な人々。

系図の中には、様々な罪人や、偏見を持たれた立場の人がいる点が重要。この中には、名だたる信仰者もいれば、聖書に一度も登場しない者もいる。主の御心を表わした者もいれば、大きな罪を犯した者もいる。そのように、罪が入り混じる歴史である。個々人の歴史を振り返れば、その罪は具体的にすることができる。

また、一方で、系図に女性いる点は重要である。タマル、ラハブ、ルツ、バト・シェバ、マリア。

タマルは、自分に子孫を残せるようにして欲しない義父ユダに対して、タマルは娼婦に変装して、好ましくない形でヤコブに近づき、ヤコブの方もこれを受入れた恥ずかしい歴史がある。そもそもユダのタマルに対する扱いに問題であった。一連

のこのような罪を神は贖うことを考える時、キリストがエジプトで総理大臣となったヨセフの子孫からではなく、ユダとタマルから生れたことの意義がわかる。

ラハブは遊女である。ヨシュアらを助け、憐れみを受けた。しかし、仕事として堂々と遊女をしていたのである。ラハブが遊女をしていた事情は不明だが、この女性の存在も、キリストの贖いの意義を鮮やかにさせる。

ルツは異邦人の女。キリストには異邦人の血が入っている。これは、日本人も異邦人であるわけで、私たちの血がキリストに入っているといえることができる。だから、人種に救いはよらないことがここでも証しされる。また、ルツは、モアブの地で、モアブの神を拝んでいた。過去にどれほど偶像礼拝を重ね、忌み嫌うべき風習を持ち、その文化が体に染み付いていたことだろう。しかし、そのような者を神は選んで、キリストが誕生している。そのキリストが十字架にかかり、復活したことは、人種が日本人であっても、たとえ偶像礼拝を過去に重ねていたとしても、信仰によるのであれば、私たちもキリストと同じように、本当に復活し栄光化される。この見方においても、私の救いは、キリストの十字架と復活に表れている、という説明は強い説得力を持つ。ルツが、異邦人の救いを証ししていることは慰め深い。

バト・シェバは、ダビデがウリヤから奪い取る形で被害を受け、またウリヤはダビデが意図的に戦死させ、結果、夫婦となった女性。ダビデの極めて愚かで醜い罪をぶつけられた存在であり、ある悲しみを背負うようになった者である。この者からキリストが誕生する約束は、慰めになったであろう。

そして、キリストの母、マリアである。12,13歳の少女にすぎない。社会人として未熟な少女を神は用いて、神の契約の力を現わした。神を信頼するときに、神は全面的に導いて力を与えて下さる事を証ししている。この証しは、マリアの立場

だからこそ証し出来たのである。

こうして、キリストの系図は、人間の暗い歴史、愚かな歴史、また人の弱さの歴史を通してこそ、神の契約が光を放つことを示している。人間の地上の功績の上にあるのではなく、キリストの誕生があるわけではなく、神の憐れみである、契約によっていることを教えている。

(3) イスラエルの全盛期から低迷期までのすべてがあること。

(2)が、個々人の歴史であるのに対して、(3)は社会の全体の歴史である。アブラハムからダビデまでの14代は、イスラエルが全盛期へ向かう上昇期。その後、14代かけてバビロン捕囚へ向かって下降する。ソロモンの罪、そして北と南に分裂。その中で、王たちの悪がしばしば重ねられていき、それぞれの街が陥落しバビロン捕囚となる。バビロン捕囚後、状態は特に改善されることなく、イスラエルは、ベルシャに支配され、ローマ帝国に支配され、そのまま新約時代が始まる。

国の状態は下降しきった状態と言えよう。キリストの待望をしながら、他国の支配がなお続く。ここで、神はイスラエルを見放さなかった。国の状態の良し悪しによって、キリストの到来が決まるのではない。神の約束によって、キリストはこられたのである。

国の信仰的な状態についていえば、ルカ19:42で、主イエスがエルサレムに向かって「もしこの日にお前も平和への道をわきまえていたなら」と語られているように、信仰が偏り、鈍くなってお

り、主イエスをお迎えするには相応しくないような状態に見える。信仰面において、下降してしまった状態でもあるのだが、そこにキリストの到来という神の一手があった。これは、現在の私たちがキリストの再臨へ備えるために重要なことを教えている。

以上を踏まえてクリスマスのメッセージを考える。

ここの黙想・聖書研究で記したことすべてをメッセージするのは量が多いため、絞る必要がある。

いずれにせよ、アブラハムからキリストに至る契約のつながりが、2000年を越えて存在している点を、強調することで、メッセージの軸ができるだろう。これは、第一に、人間ではできないことであり、人間はただか数十年の約束を守り続けることも難しいものである。第二に、あらかじめ預言されていた点も、人間にはできない。せいぜい、後付で、実はこうだった、というのが関の山。

系図は、子供たちにとって、新鮮なものだろう。クリスマスに、この系図を通して、2000年という壮大な神の働きに目をむけることができれば、クリスマスが、壮大な物語を語るものだ、という印象が伝わるのではないか。それができれば、世の中のクリスマスと、良い意味で差別化された教会のクリスマスを伝えることが出来るのではないか。
(酒井啓介)

(単元のねらい)

系図を通して教えられることに、的を絞る。アドベントだけに、イエス様の救いの業を語るわけなので、その切り口として、アブラハムからイエス・キリストまでの約2000年間、神様の約束は忘れられずにきちんと守られた、ということが、いかに偉大な事かを、子供たちに実感してもらいたい。そして、イエス様が、アブラハムの子孫に約束どおりに誕生したということも実感してもらいたい。

救いの約束を守る神様

イエス様の誕生を記念する季節になりました。イエス様は、救いという、神様からの特別のプレゼントをもって来て下さいました。今日の説教では、系図というものを使って、お話しします。

系図とは、誰某さんは誰から生れてきたか、というものをずーっと昔から順を追って書かれたものです。みなさんだったら、お父さんとお母さんから生れてきた。昔はお父さんの名前を家の代表者にしたので、誰某さん（お父さんの名前）の子、誰某くん（ちゃん）、となるわけです。みんなだったらどうなるでしょうか。ずっと昔から言える人はいいますか。(笑)

イエス様にも、系図がちゃんとありました。実は、イスラエルの人たちは系図をととても大切に記録する人たちだったのです。今日の系図を見ると、たくさんのお名前がありますね。最初と最後の名前にはどなたがかかれていますか。——アブラハムとイエス様ですね。アブラハムからイサクをもうけ、と続き、ずーっと続いていき、そして「イエスがお生まれになった」とあるとおりです。こんな繋がりになっていて、間にある名前は、聞いたことがあったりなかったりするだろうけど、多くの時代があって、多くの人たちがいました。この間、2000年です。

ところで、イエス様は、アブラハムの子孫に、たまたま生れたのでしょうか。イエス様なら、なんでもできるお方だから、どこからでも自由に生れてきたらいいのでしょうか。

実は、イエス様は、生れる前から、それもアブ

ラハムの時代から誕生を預言されていたのです。イエス様の偉大な点は、誕生が預言されていたことです。これは普通の人と、大きく違う点ですね。神様は、イエス様を誕生させる約束の預言を、アブラハムの時代にしていました。創世記20:18「地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。」「あなたの子孫」という言葉で、一番示しているお方が、イエス様です。イエス様によって、すべての人は祝福を得る、と言われています。イエス様のお名前そのものが預言されたのは、生れる何ヶ月か前ですけれども、特にイエス様の働きについて、アブラハムの時代にすでに預言されていたわけで、「この方によって、すべての人々が神の祝福を与えられますよ。」と、預言されていた、ということですね。だから、イエス様の誕生を、大勢の人たちが待ち望んでいました。神様のこの約束を、少しも疑う必要はないわけで、神様は約束されたとおりのイエス様を地上に送って下さいました。

ただ、2000年も経つと、約束を忘れられてしまったかもしれない、と疑ってしまう人がいるかもしれません。時効というものが社会にあります。例えば、仕事で病気になってしまった場合、5年とか10年とか、色々ですけど、その間に、仕事で病気になったら補償しましょう、という制度があります。でも、何年も経ってしまったら、補償する約束はなくなってしまいます。

お買い物にも時効があって、お店がお客さんに代金を、請求できるのは10年間だけです。

何年か経ったら、約束は無効になってしまう、というのが社会の約束事なんですけども、神様は、100年どころか、何千年たっても、御自身の約束事を無効にしないで、ちゃんと守るお方です。ということから、何千年たっても約束を完全を守る、というのは神様にしかできない業なんですわね。

神様が約束を果たしてくれる、というのは嬉しいのだけれども、もし自分たちが大きな過ちをしたり、人より優れていなかったりしたら、こんな自分のために神様は約束をちゃんとまもってくださるのか、不安になってくるでしょう。不安になるってしまうような事柄が実際にありました。系図の中で7節から11節には、王様の名前がでてきていて、聖書では、良い王と悪い王を次の言葉で表現しています。

- ・主の目に適う正しいことをことごとく行なった。
- ・主の目に悪とされることを行なった。

この「主の目に悪とされることを行なった」王様が、レハブアム、アビヤ、ヨラム、マナセ、アモス、アハズなんですね。うっかり一人とか二人登場しちゃった、という事ではなく、何人も主の目に悪を行う王が現れてしまい、国全体を神様に背くようにして、めちゃくちゃにしまったわけです。また、こうした王様が、あんまりにも神様に背くので、神様は怒って、イスラエルの民を、バビロン捕囚という、外国の奴隷にさせました。その後、解放されますけど、イスラエルの民は以前のような元気がないまま、イエス様の時代を迎えるわけです。こんなイスラエルに、神様は救いの約束を果たしてくれるのだろうか、と不安に思う人はきっといたことでしょう。でも、その間も神様は聖書を通して、ずっと語っていたことは、約束通り、イエス様を送りますよー、ということです。それを、礼拝で何度も読まれたり説教されたりすることを通して、神様は語っていました。人間が、色んなことをしてしまったのだけれども、神様は約束通りイエス様を送って下さったわけです。途中で、国がなくなったり、礼拝する場所の神殿がなくなったり、外国に占領された

りと、色んなことがあって、世の中がどんどん変わったのだけれど、でも神様の約束は本当に実現したんですね。イエス様は、神様の変わらない真実な愛を表しています。この神様の愛が、私たち一人一人に用意されています。

説教例2（補足分）

せっくなので系図をもう少し見てみましょう。ここに登場する人たちは、いい人ばかりではありません。大きな罪を犯した人もいます。でも、そういう罪人の子孫に、イエス様が誕生しています。これは、罪人を赦すために、お生まれになったことを表わしています。それから、この系図の中には異邦人も登場します。日本人も異邦人です。

例えばルツさんは、異邦人の女性です。だから、日本人と同じ立場の人が、イエス様の先祖にいるわけです。親の血を受け継ぐ、なんて言い方もあるように、異邦人の血をイエス様は受け継いでいるわけです。ルツさんのところに、私たちの存在も入っているんですね。ルツさんは、モアブという外国で、偶像の神を拝んでいました。過去にどれほど偶像礼拝をして、イエス様が悲しむことをしていたかわかりません。そういう習慣があったことでしょう。でも、そのルツさんの子孫にイエス様がいます。イエス様は十字架にかかった後、どうなりましたか？復活しましたね。それは、異邦人の血もはいつていますから、私たちの復活も表わしています。ルツさんの存在に、私たちの存在を当てはまるわけです。こういうことをイエス様の系図は証ししてくれました。創世記20:18で「地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。」と言われたとおり、すべての民は、イエス様によって祝福を得るわけです。

私たちは、いつも色々なものを必要としています。その必要を、神様が最もよくご存じです。だから、イエス様のお名前で、神様に祈りましょう。イエス様を信じる人を、神様は祝福して下さいます。何千年も変わらない約束を守られたように、神様は約束通り私たちを祝福して下さいます。

（酒井啓介）

〔今週の暗唱聖句〕 創世記 22章18節 a

地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。

マタイ1:1をよみましょう。

1. イエス・キリストは、だれとだれの子ですか？

マタイ1:2～16を読みましょう

2. アブラハムは、どんな人ですか？せいしよのどのあたりに出てきますか？

3. 神さまはアブラハムにやくそくをしました。そうせい記22:18をよみましょう。「あなた(アブラハム)の子孫」とは、だれのことですか？

4. この中の、旧やくせいしよの一つに書かれている女の人はだれですか？

5. 他に、名前を知ってる人はいますか？どんな人ですか？

マタイ1:17をよみましょう。

6. アブラハムからキリストまで、合わせて何代ですか？何年くらいでしょうか？

7. 神さまは、アブラハムにしたやくそくをまもられましたか？

マタイ1:1を読みましょう。

1. イエスキリストの祖先の代表として、名前が挙げられているのは誰ですか？

マタイ1:2～16を読みましょう。

2. アブラハムとは、どんな人物ですか？

3. 創世記22:18「あなたの子孫」とは、誰を指していますか？

4. この中に、ユダヤ人でない人は含まれていますか？ それは誰ですか？

5. ダビデ王とウリヤ、その妻との関係を説明してください。(サムエル記下11章) なぜ、神様の御心にかなわない行いによって生まれた子が、キリストの系図に含まれていると思いますか？

6. バビロンに移住させられたイスラエルの民は、どんな立場だったのでしょうか？

マタイ1:17を読みましょう。

7. アブラハムからキリストまで、どのくらいの期間ですか？

8. 神さまは、アブラハムとの契約を守られましたか？

テキスト

マタイによる福音書 1章18～25節

子どもと親のカテキズム

問26

参考教理問答

ウェストミンスター小教理問答 問22

問26 私たちを、罪とほろびから救い出してくださる救い主とはだれですか。

答 イエス・キリストです。この方は、父なる神さまの独り子であり、まことの神さまです。また、私たちの救いのために、聖霊によっておとめマリアより罪のない方として生まれ、まことの人となってくださいました。イエスさまは、まことの神さまであり、まことの人です。

1. まことの神であられるキリスト

キリストは、父なる神の独り子であり、まことの神であられる。なぜなら、救い主はまことの神じゃなければならないからである。十字架の上で神の怒りと呪いを受け切ること人間には不可能である。たとえ人間ができたとしても、それは誰か一人の人の身代わりとなるだけで、全人類の身代わりになることはできない。ただ、神であられる救い主だけが、全人類のための償いを十字架の上で成し遂げるのできるお方である。つまり、「救いを与えてくださること」、これは神のみができることなのである。

2. まことの人であられるキリスト

1) まことの人としての誕生

こうして、まことの神であられるキリストが、人となられたのである。「このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。』」(20節) マタイによる福音書はキリストの誕生をとりわけダビデの子ヨセフの立場で描くことによって、キリストが血統においてダビデの子孫として生まれたことを明確に表している。

ところが、キリストの「人性」を認めない人々は、「キリストの人としての誕生と世での歩みや死はみな、人の目にそのように見えただけだ」と言う。いわば、キリストは人の体を借りて仮の体で現われただけで、本当は人間ではなかったと主張している（仮現論）。しかし、キリストは、肉

体的疲れや欠乏の苦しみ、死に至る肉体の苦しみを知っておられた真実の体を持っておられたまことの人であられた。

また、キリストの「人性」を認めない人々は、「キリストの体は人であったけど、魂は神であった」とも言う。しかし、キリストは人間の魂（理性的靈魂）を持っておられた。初めに神様が人間をお造りになった時、神様は人間を「理性的靈魂」を持つ者として創造された。これは、動物にはない人間だけの徴である。この人間の理性的靈魂を持っておられたキリストは、人間の精神的悩み、例えば、人から誤解される苦しみ、弟子から裏切られる悲しみ、十字架を前にしての恐れと悩みを知っておられたのである。キリストは体においても、また、魂においても、まことの人となられたのである。

では、キリストはどのようにして、まことの人として生まれになったのか。「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」(18, 19節) ヨセフは、自分と婚約したマリアが、まだ一緒にならない前に、身ごもったことを知った。夫ヨセフは正しい人であったため、マリアのことが公けになることを好まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。当時の婚約の概念は今と違って、法的に結婚に等しかったので、二人が一緒にならない前に花嫁が身ごもるとい

ことは姦淫の罪に値することであった。ヨセフがいくらマリアのことを愛していたとしても、姦淫の罪を看過することは律法に反することになるため、正しい人であったヨセフは、律法に反することなく、また、マリアに恥をかかせることもないように、ひそかに縁を切ろうとしたのである。しかし、天使によってマリアの胎の子は聖霊によって宿ったことを知ったヨセフは、主の天使が命じたとおり、妻マリアを迎え入れ、キリストが生まれるまでマリアと関係しなかったのである。このような、聖霊による働きによって、まことの神であられるキリストは、まことの人としてお生まれになったのである。

2) 罪のない人としての誕生

さらに、キリストはまことの人でありながら、罪のない人としてお生まれになった。けれども、キリストのきよさは、処女から生まれたからではない。なぜなら、マリアも私たちと同じく罪人であったためである。キリストがまことの人でありつつ、その人間性において罪がない方として生まれることができたのも、聖霊による特別なお働きのためであった。すなわち、キリストはマリアから生まれて、マリアから人性を引き継がれたが、人をきよめる聖霊が、キリストが人となられた時に完全に働かれて、キリストの人間性を罪から守られたのである。処女受胎は、キリストが聖霊によって生まれたきよい方であるということを表すためであって、キリストは、聖霊のお働きによって罪のない方としてお生まれになったわけである。

3) なぜ、罪のない人として生まれたのか

では、まことの神であられるキリストがなぜ、罪のない人間としてお生れになったのか。

それは、罪人を救うためには人でなければならなかったからである。アダムの墮落以来、人は罪人として神の怒りと呪いの下におかれ、神の刑罰を受けなければならなくなった。償いは動物が代わりにできることではない。もちろん、旧約時代、神様は羊や牛を人間の罪の身代わりに捧げると、それによって罪を赦すこととして下さったが、しかし、究極的に動物には人の罪を身代わりに背負

う力がない。神様は、まことの人としてやがて来るキリストによって人間の罪を完全に償うおつもりで、それまでは動物によって罪を赦すこととして下さっただけである。神の義は、人間の罪の償いがただ人間によってのみなされることを求められる。なお、罪のある人が、罪人のための身代わりになることはできず、ただ、罪のない人のみが、罪人のための身代わりになることができるわけである。そのため、つまり、キリストは人の罪を完全に償うため、罪のないまことの人としてお生まれになったのである。

3. キリストが世に来られた理由

「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」(21節)「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は、神は我々と共におられるという意味である。」(23節)

目に見える姿としては罪のないまことの人であられ、その見えない本質においては、まことの神であられる、キリストの名は「イエス」と「インマヌエル」である。

*イエスの意味「自分の民を罪から救う」

*インマヌエルの意味「神は我々と共におられる」

この名からキリストが世に来られた理由が明確に分かる。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(フィリピの信徒への手紙2章8節) キリストは私たちをあまりにも愛されたゆえに、全人類を罪とほろびから救い出すため、神としての力と栄光をすてて、僕の身分になり、人間と同じ者になられたのである。そして、キリストは、私たちと共におられるため、この世に来られたのである。私たちと共におられるため、高い天からこの地に來られたキリストは、昔も今もそして、これからもずっと私たちと共におられるまことの救い主であられる。(金昭貞)

子どもと親のカテキズム 問26

まことの神であられるイエスさまは、まことの人になられるほど、私たちを愛しておられる。

な悩みや恐れを知っておられた、体においても、また魂においても、まことの人となられたのです。

さらに、イエスさまは罪のない人としてお生まれになりました。人はみんな罪人です。最初の人、アダムの子のためアダムから生まれたこの世のすべての人は生まれる時から、罪人として生まれるのです。ところが、まことの人であられるイエスさまは、私たちと違って罪のないきよい人としてお生まれになりました。それは、男の人を知らないマリアから生まれたからではないですね。マリアも私たちと同じく罪人だったからです。イエスさまが、まことの人でありつつ、罪のない人として生まれることができたのは、聖霊のお働きによります。人をきよめる聖霊は、イエスさまが人となられた時に完全に働かれて、イエスさまの人間性を罪から守られたのです。この聖霊のお働きによって、イエスさまは罪のない人としてお生まれになったわけです。

2. なぜ、人となられたのか。

では、神であられるイエスさまは、どうして、人となられたのでしょうか。それは、私たちのためです。私たちを罪から救うため、イエスさまはわざと人となられました。

アダムの墮落以来、人は神の怒りと呪いの下におかれ、神さまの罰を受けなければならなくなりました。人は罪を償わなければならないですが、それは、動物やいかなるものが代わりにできることではなく、ただ人によってのみできるのです。それに、罪のある人は、罪人のための身代わりになることはできません。ただ、罪のない人のみが、罪人のための身代わりになることができるのです。それで、イエスさまは人の罪を完全に償うため、罪人である私たちの身代わりになるため、罪のない人としてお生まれになったのです。

みなさんの中で、犬や猫を飼っている人がいる

と思いますが、犬や猫はすごく可愛いですね。ペットは単に動物に過ぎるのではなく、家族のような存在であって、家族みんな、すごく大事にしていると思います。ところが、もし、家の犬が死にかけていて、犬の命を助けるためには、持ち主が犬にならなければならないと言われたら、みなさんは犬になることができるのでしょうか。それはできないですね。いかに犬を愛していても、犬になるほどではないでしょう。それなのに、神であられるイエスさまは、私たちのことをあまりにも愛したため、人となられました。イエスさまが人となられたのは、まるで私たちが犬になるような、いや、それとは比較できないほど、とても大きな愛のゆえでした。イエスさまは私たちのことをあまりにも愛されたため、神であられながら、神さまとしての力と栄光を捨てて、僕の身分になり、私たちと同じく人間になられたのです。「神さまが人になれる」ということほど大きな愛がほかにあるのでしょうか。しかも、イエスさまは十字架の上で命を捨てるまで、私たちを愛してくださったのです。

●終わりに

最後に、23節を見ますと、イエスさまの名前の意味が書かれています。イエスの意味は、「自分の民を罪から救う」という意味があります。また、イエスさまは「インマヌエル」というもう一つの名前がありましたが、それは、「神は我々と共におられる」という意味です。イエスさまの名前から私たちはなぜイエスさまがこの世に来られたのか明確に知ることができます。つまり、イエスさまは、「自分の民を罪から救う」ため、そして、「私たちと共におられる」ため、まことの神として、そして、まことの人として、この世に来られたのです。今年のクリスマスは、人となられるほど私たちを愛してくださったイエスさまの大きな愛に感謝しつつ、イエスさまのお誕生を共にい祝いましょう。

(金昭貞)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 1章21節

マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。

この子は自分の民を罪から救うからである」

マタイ1:18, 19をよみましょう。

1. イエスさまのお母さんはだれですか？

2. 結婚していないマリアのおなかに赤ちゃんができたのはなぜですか？

3. ヨセフはどんな人でしたか？

マタイ1:20～23をよみましょう。

4. ヨセフのゆめにあらわれたのはだれですか？

5. 赤ちゃんに何と名づけるように言いましたか？それはどうしてですか？

6. 「インマヌエル」とは、どんな意味ですか？

マタイ1:24, 25をよみましょう。

7. ヨセフはてんしがめいじたことをまもりましたか？

マタイ1:18, 19を読みましょう。

1. 結婚していないマリアは何によって身ごもったのですか？ それは、イエス・キリストがどのような存在であることを示していますか？

2. ヨセフはどんな人ですか？マリアと縁を切ろうとしたのはなぜですか？

マタイ1:20～23を読みましょう。

3. 主の使いのメッセージはなんでしたか？

4. 「イエス」と名付ける意味は何ですか？

5. この子にはどんな役目が与えられていますか？

6. イエスの誕生はどのように預言されていましたか？

マタイ1:24:25を読みましょう。

7. 天使の言葉を聞いたヨセフはどのように変わりましたか？

8. あなたにとって、イエスの誕生はどんな意味がありますか？

テキスト
子どもと親のカテキズム

マタイによる福音書 2章1～12節
問26、49

問26 私たちを、罪とほろびから救い出してくださる救い主とはだれですか。

答 イエス・キリストです。この方は、父なる神さまの独り子であり、まことの神さまです。また、私たちの救いのために、聖霊によっておとめマリアより罪のない方として生まれ、まことの人となってくださいました。イエスさまは、まことの神さまであり、まことの人です。

問49 恵みを与える方法としての御言葉とは何ですか。

答 聖書の朗読と説教です。これらを用いて、イエスさまは、聖霊によって私たちに語りかけてくださいます。ですから、よく備えて礼拝に出席し、御言葉を受け入れ、心にたくわえ、毎日聖書を読み、御言葉に従うことが大切です。

〈聖書テキストの解説〉

マタイによる福音書は、その読者としてユダヤ人を念頭に置いていると言われますが、それは本福音書が、キリストの福音を伝える時に、旧約聖書を多く引用し、新約の福音が旧約聖書の預言の実現である側面を強調している特徴から指摘されることです。キリストの降誕の記事においても、この特徴が指摘されます。降誕物語はマタイとルカの福音書に記されていますが、それぞれの福音書で大きく異なるエピソードが記されており、両者に共通する主題としては、当時の常識からすると、本来救いの中に入れられていないと見做されていた人々に福音が告知されること、その人々の方が、本来救いが告知されていた人々よりもふさわしい応答をし、福音を受け入れる逆転が生じることが記されます。その主題の中でマタイによる福音書は、上記のように特に神の民ユダヤ人に注目しており、すでに神様を知っていたはずのユダヤの民と、福音を知らないはずの異邦人である「東方の博士」たちの救い主の到来の知らせに対する対応の違いが記されています。

「東方の博士」が何者であるかは、聖書には記されておりません。パレスチナから東方にあたり、天文学が発展していたメソポタミア地方から来たと思われますが、定かではありません。伝統的には高齢の白人、若い東洋人、壮年の黒人の図像が描かれることがありますが、これは後の時代になって世界のすべての人種とあらゆる年齢を表す

表象として作り出されたものであり、聖書的な根拠がありません。三人という人数も贈り物の数から想定されたものであり具体的な根拠はありません。特にイラストなどを用いる場合は、聖書の記述を補うように心がけ、間違ったイメージや不要な限定を加えることがないように注意しましょう。

〈子どもカテキズムの解説〉

クリスマスの出来事は、イエス・キリストが、人として、すなわち肉の体と誘惑にさらされる弱さを持って生まれ、私たちと共に生きてくださったこと、人の経験するすべての苦しみを共有し、すべての人に仕える低さを持ってくださったことを表しています。しかしその弱さの中でもイエス・キリストは罪を持たず、実際に罪のない生涯を送られました。そのことを象徴的に表しているのが、処女マリアからの誕生です。

今回は、キリストの受肉について挙げている問26と同時に、問49を挙げました。聖書テキストの解説に記しましたように、本テキストは、人が神の告知に従うことの重要性を指摘するテキストです。「恵みを与える方法」としての「御言葉」は「よく備え……受入れ、心にたくわえ、……従うこと」すなわち、私たちの応答を求めます。御言葉が私たちに福音（喜ばしい知らせ）として与えられていることを覚え、感謝と喜びをもって、御言葉を受け入れ、従っていくことができるよう

に心がけることが大切です。

〈黙想〉

クリスマスはわたし達に与えられた最大の恵みである御子の降誕の出来事であり、アドベントはその最大の恵みを待つ期間です。与えられるプレゼントが大きければ大きいほど、それを待つ期間は楽しみに過ごすことができます。イエス・キリストの救いが私たちにとってどんなに大きな恵みであるか。私たちがそれをどれほど心待ちにしているか、むしろそのキリストを賜らなければ、私たちにいのちはなく、希望もないことを強く自覚すれば、そのキリストの到来を待つアドベントは、本当に期待に満ちた期間となります。アドベントとクリスマスは、単にかつていらっしゃったキリストの降誕を記念した期間であるばかりでなく、やがて再びおいでになる再臨のキリストを待望する期間であることを覚えることも重要でしょう。

この偉大なプレゼント、私たちの命が与えられることを知らせる知らせが、神の御言葉です。東方の博士達は星の動きにその知らせを読み取りましたが、私たちは、神の言葉である聖書の言葉にその知らせを明確な形で示されております。神様は私たちがその神の御言葉に耳を傾け、心に蓄え、それに従うことができるように求めておられま

す。しかしその応答もまた、私たちが積み上げるものではなく、神様からの恵みとして与えられるものです。神様は、私たちが御言葉をきちんと受け取ることができるように、先立って聖霊なる神様を注いでいてくださいます。聖霊なる神様は、私たちが御言葉に耳を傾け、心に蓄え、それに従うことができるように整えてくださいます。ですから、私たちは自分自身の能力のなさにもかかわらず、安心して御言葉に耳を傾けることができますのです。御子も、御子の救いも、その救いを告知する御言葉も、その御言葉を受け入れる心も、すべて神様から一方的に頂いた贈り物であることを覚えることができれば、その恵みはますます大きなものとして感じられるでしょう。

〈子どもたちに対して〉

教会のクリスマスも子ども達にとっては楽しいものです。けれども、その本質を知り、より本質的により豊かにクリスマスを喜び、クリスマス待つことができるようになれば嬉しいことです。イエス様が一体どういうお方であり、そのお方が私たちにとってどんな意味を持っているかを知る。その知らせに私たちが応え、待つことの喜びを伝えることができればと思います。

(長田詠喜)

テキスト

マタイによる福音書 2章1～12節

子どもと親のカテキズム 問26、49

〔単元のねらい〕

クリスマスの恵みが私たちに与えられた御子の救いの恵みであること、その恵みを正しく知り、より鮮やかに知ることによって、クリスマスの恵みは正しくより豊かになること。そのためにも私たちは福音のみ言葉に耳を傾け、応答するように努めることを知る。

良い知らせに恵まれた人たち**・クリスマスを楽しんだ人とそうでない人**

今日はクリスマスの礼拝です。この後の大人の礼拝も特別な礼拝を献げますし、礼拝の後には祝会もあります。多分みんなも楽しみにして、今日教会に来たのではないかと思います。

今日お話の中で読みました占星術の学者たちも、そんな風にクリスマスを楽しみにしていた人々です。ただしこの学者たちは、クリスマス礼拝の案内をもらったわけでも、聖書でクリスマスのことを知ったわけでもありませんでした。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです (2:2)」どんな星を見たのか、その星を見ると何でユダヤ人の王が生まれたことがわかるのか、そんなことはよくわかりませんけれども、とにかく、学者たちは自分たちの住んでいる東の国から遠く離れた西の国ユダヤで王が生まれたことを知り、どうしてもその王を礼拝しなければならないと思ったのでした。長い旅をしてユダヤに来て見ると、新しい王様が生まれたという知らせは誰も知りませんでした。王様の住むエルサレムの都に行ってみても、都の人々も王様も誰も知りませんでした。ようやく古い聖書を調べてもらって、新しい王はベツレヘムに生まれることがわかります。学者たちは急いでベツレヘムに行き、そこで、生まれたばかりのイエス様と出会うのです。

一方、ヘロデ王は、口ではその新しく生まれた王様を礼拝したいと言うのですが、実際には、イ

エス様の命を奪おうとし、実際にこの後たくさん子どもたちを殺してしまうことになります。結局ヘロデ王はイエス様を見ることはできませんでした。イエス様がお生まれになったことを一緒にお祝いしたり、喜んだりすることもできませんでした。

同じクリスマスの知らせを知っても、イエス様にお会いできた学者たちに対して、ヘロデ王はイエス様にお会いすることも喜ぶこともできませんでした。それは、ヘロデ王がこのクリスマスの知らせを喜ぼうともお祝いしようとも思っていなかったからなのです。

・クリスマスの恵みの大きさ

どんなに素晴らしい知らせを聞いても、どんなに素晴らしい贈り物をもらっても、その素晴らしさを見ようとせず、感謝することもなければ、その素晴らしい贈り物を喜ぶことはできません。この時のヘロデ王がまさにそうでした。わたしたちを救ってくださる救い主、私たちに命をくださる神の御子、私たちの苦しみや悩みを癒してくださるお方がお生まれになったのに、ヘロデ大王はそのことを喜ぶことも感謝することはありませんでした。そのお方が自分にとってどんなに必要なお方であるのか分かっていなかったのです。

イエス様がどんなに素晴らしいお方であるか、私たちに必要なお方であるか、イエス様を信じる人がどんなに素晴らしい恵みをたくさんいただけるか、そういったことは聖書の中にたくさ

ん教えられています。私たちは毎日、また日曜日に教会に来るたびに、その聖書の言葉を聞き、そのお話を聞き、イエス様の素晴らしいことを教わります。でももし私たちがそれを感謝せず、ヘロデ王様のように、イエス様を信じようとも礼拝しようともしなければ、この素晴らしい素晴らしいイエス様の喜びは私たちに与えられないのです。

・イエス様はもう一度来る

イエス様はもうお生まれになって、もう十字架について、もう天国に帰られてしまったから、今更「イエス様が与えられます」なんて聞いても、関係ないと思うかもしれません。けれどもそんなことはないのです。たしかにイエス様はもう既に一回この世界にお生まれになって、私たちのところにおいでになりました。けれども、復活したイエス様が天国に帰って行かれた時に、み使いは、「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる（使徒1:11）」と言われました。私たちは、もう一回いらっしゃるイエス様をお待ちしているのです。一回目にイエス様がお生まれになった時は私たちに救いを実現してくださったのですから、それはとてもとても素晴らしい出来事でした。けれども、もう一度イエス様がいらっしゃる時も、それはそれでとてもとてもとても素晴らしい出来事なのです。東方の学者たちがユダヤの王がお生まれになることを

知って、それを本当に心から楽しみにして、そのお方を礼拝しようと旅をしてきたように、私たちもこのイエス様が再びおいでになることを知ったら、それを本当に心から楽しみにして、そのお方を礼拝しようとするならば、本当にその喜びをいただくことができるのです。

・日々応える

東方の学者たちは、星を見つけた後、長い旅をしてイエス様に会い、黄金、乳香、没薬を献げてイエス様を礼拝し、イエス様の喜びを手に入れました。私たちがイエス様の喜びを手に入れるにはどうしたらよいでしょう。神様は私たちがイエス様の喜びを手に入れるために必要な方法についても準備して私たちに与えていてくださいます。それは、私たちに与えられている聖書であり、私たちが集まる教会であり、その教会で献げられる礼拝です。私たちがこうして今礼拝に集って、神様のみことばを聞き、イエス様を礼拝している時、私たちにはイエス様の喜びが一番たくさん豊かに、素晴らしく与えられているのです。そして、神様は私たちがそんな風に神様を礼拝することができるように、聖霊なる神様を私たちに与えていてくださっています。私たちに聖霊なる神様が与えられているならば、私たちは神様のみことばを受けるための準備をすることができますし、心構えをすることができますし、そうやってその恵みと喜びを充分に受けることができるのです。

（長田詠喜）

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 2章11節

家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。

彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

マタイ2:1,2をよみましょう。

1. イエスさまが生まれたばしょはどこですか？

2. イエスさまをおがみに来たのはだれですか？

3. どうして、イエスさまが生まれたことが分かったのですか？

マタイ2:3~8をよみましょう。

4. 学者たちの話をきいて、ヘロデ王やエルサレムの人々はよろこびましたか？

5. さいし長たちはなぜ、イエスさまの生まれたばしょが分かったのですか？

マタイ2:9~12をよみましょう。

6. 学者たちはどうやって、イエスさまのいるところが分かったのですか？

7. 学者たちは、イエスさまに会ってよろこびましたか？

8. なぜ、イエスさまをおがんだり、おくりものをしたのですか？

マタイ2:1, 2を読みましょう。

1. イエスのお生まれになった時代と場所は？
2. 占星術の学者たちはどこから、何のために来ましたか？

マタイ2:3～8を読みましょう。

3. なぜ、ヘロデ王は不安になったのですか？エルサレムの人々はどうでしたか？
4. メシアが生まれることについて、祭司長・律法学者たちはどのような反応を示しましたか？

マタイ2:9～12を読みましょう。

5. 学者たちはどうして幼子のいる場所にたどり着けたのですか？
6. そこについた時の、学者たちの様子はどうでしたか？
7. なぜ、遠くからイエスを探しにきて拝み、贈り物をささげたのですか？
8. 「ヘロデのところに帰るな」と告げられた理由は何だと思えますか？
9. ヘロデ王とエルサレムの人々、学者たちの違いはどこですか？

2016年度 年間カリキュラム（第61～64号）

— 『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第2年—

（2016年4月～2017年3月）

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2016年 第61号	4月3日		再臨・天国を目指す歩み	問39
	4月10日		死後の祝福	問40
	4月17日		体の復活	問41
	4月24日		教会と共に歩む道・キリストの体	問42
	5月1日		母なる教会による命の養い	問43
	5月8日		教会の使命	問44
	5月15日	聖霊降臨祭		
	5月22日		主の日の祝福	問45
	5月29日		礼拝式の祝福	問46
	6月5日		恵みの方法	問47・48
	6月12日		みことばの恵み	問49
	6月19日		礼典の恵み	問50
	6月26日		洗礼の恵み	問51
第62号	7月3日		幼児洗礼の恵み	問52
	7月10日		聖餐の恵み	問53
	7月17日		信仰告白を目指して	問54
	7月24日		恵みの方法としての祈り	問55
	7月31日		感謝して歩む	問56
	8月7日		感謝の生活の規準	問57
	8月14日	平和主日		（問91）
	8月21日		感謝の道しるべ・十戒	問58
	8月28日		十戒の心・神と人を愛する	問59
	9月4日		十戒の心・父の愛の戒め	問60・61
	9月11日		第一戒 神のみを神とする	問62・63
	9月18日		第二戒 偶像礼拝とは何か	問64・65
	9月25日		第三戒 神の御名	問66・67

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第63号	10月2日		第四戒 主の日の安息	問68・69
	10月9日		第五戒 父母を敬う	問70・71
	10月16日		第六戒 殺すな	問72・73
	10月23日		第七戒 姦淫するな	問74・75
	10月30日		第八戒 盗むな	問76・77
	11月6日		第九戒 偽証するな	問78・79
	11月13日		第十戒 むさぼるな	問80・81
	11月20日		憐れみを求めさせる戒め	問82
	11月27日		神の愛の戒めを喜ぶ	問83
	12月4日	待降節	祈りの手本、主の祈り。 祈りとは何か	問84
	12月11日	待降節		
	12月18日	待降節		
	12月25日	降誕祭		
2017年	1月1日	元旦	神の子らしい祈り	問85
第64号	1月8日		祈りに生きる道・神との会話	問86
	1月15日		祈りに生きる道・主の御名による祈り	問87
	1月22日		祈りに生きる道・祈りの内容	問88
	1月29日		主の祈り・わたしたちの父よ	問89
	2月5日		主の祈り・御名を崇める祈り	問90
	2月12日		主の祈り・御国を求める祈り	問91
	2月19日		主の祈り・御心を求める祈り	問92
	2月26日		主の祈り・ゆだねる祈り	問93
	3月5日		主の祈り・赦され、赦す祈り	問94
	3月12日		主の祈り・神の子の勝利の祈り	問95
	3月19日		主の祈り・確信の祈り	問96
	3月26日		主の祈り・神の真実による祈り	問97

救済史に基づく二年サイクル

	月 日	教会暦・行事	主題	聖書箇所
2016年 第61号	4月3日		復活を疑うトマス	ヨハネ20:24～29
	4月10日		ペトロを励ます復活のキリスト	ヨハネ21:1～19
	4月17日		大宣教命令	マタイ28:16～20
	4月24日		着座・主が王となられた	詩編110
	5月1日		油を注がれた方が成し遂げられた	イザヤ61:1～4
	5月8日		霊が臨むとき	エゼキエル37:1～14
	5月15日	聖霊降臨祭		
	5月22日		イサクとリベカの結婚	創世記24:1～67
	5月29日		エサウとヤコブ	創世記25:27～34、27:1～40
	6月5日		ヤコブの夢	創世記27:41～28:22
	6月12日		ヤコブの結婚	創世記29:1～30
	6月19日		エサウとの再会	創世記32:4～33:20
	6月26日		ヨセフの夢	創世記37:1～11
第62号	7月3日		エジプトに売られるヨセフ	創世記37:12～36
	7月10日		ヨセフとポティファルの妻	創世記39:1～23
	7月17日		夢を解くヨセフ	創世記40:1～41:46
	7月24日		イスラエル、エジプトへ	創世記41:47～46:27
	7月31日		エジプトでの苦難	出エジプト1:1～21
	8月7日		モーセの召命	出エジプト3:1～4:17
	8月14日	平和主日		
	8月21日		十の災い	出エジプト5:1～12:42
	8月28日		葦の海を渡る	出エジプト14:1～31
	9月4日		十戒の心・父の愛の戒め	問60・61
	9月11日		第一戒 神のみを神とする	問62・63
	9月18日		第二戒 偶像礼拝とは何か	問64・65
	9月25日		第三戒 神の御名	問66・67

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	聖書箇所
第63号	10月2日		第四戒 主の日の安息	問68・69
	10月9日		第五戒 父母を敬う	問70・71
	10月16日		第六戒 殺すな	問72・73
	10月23日		第七戒 姦淫するな	問74・75
	10月30日		第八戒 盗むな	問76・77
	11月6日		第九戒 偽証するな	問78・79
	11月13日		第十戒 むさぼるな	問80・81
	11月20日		シナイ契約の締結	出エジプト24:1～11
	11月27日		金の子牛	出エジプト32:1～34:28
	12月4日	待降節	言は私たちの間に宿られた	ヨハネ1:1～14
	12月11日	待降節	キリストの系図・神が共にある歴史	マタイ1:1～17
	12月18日	待降節	インマヌエル	マタイ1:18～25
	12月25日	降誕祭	異邦の学者による礼拝	マタイ2:1～12
2016年	1月1日	元旦	幕屋建設	出エジプト35:4～40:38
第64号	1月8日		地の塩・世の光	マタイ5:13～16
	1月15日		敵を愛しなさい	マタイ5:43～48
	1月22日		隠れたことを父が見てくださる	マタイ6:1～6
	1月29日		主の祈り	マタイ6:9～15
	2月5日		思い悩むな	マタイ6:25～34
	2月12日		聞いた言葉を行う	マタイ7:24～29
	2月19日		嵐を静めるキリスト	マタイ8:23～27
	2月26日		悪霊を追い出す	マタイ8:28～34
	3月5日		ペトロの信仰告白	マタイ16:13～20
	3月12日		迷い出た羊のたとえ	マタイ18:10～14
	3月19日		子どもたちを祝福する	マタイ19:13～15
	3月26日		エルサレム入城	マタイ21:1～11

子どもと親のカテキズム

神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

『子どもと親のカテキズム』の目指すもの ～「あとかき」より～

このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子ども伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014年10月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会



2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格 **400**円（税込）

書店での販売価格は540円（税込）ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円（税込）です。

申込先 E-mail shintoko_ch_pastor@yahoo.co.jp 長田詠喜

振込先 01620-8-39213 長田詠喜

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 FAX03-5250-5107
HPをご利用ください。 <http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/> 【呈・図書目録】

●ここ何号かお詫びばかり掲載しており申し訳なく思っています。編集者の賜物不足を痛感しております。ぜひ小さい働きのために祈りください。

(長田詠喜)

●巻末に並行して用いることができる「救済史カリキュラム」を付けてあります。それぞれの教会学校の状況に合わせて、参考にしてくだされば幸

●今号も、IBUKI の中村未生兄、高橋乃亜兄が表紙デザインのためにご奉仕くださいました。感謝いたします。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡下さい。

E-mail: vukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

収入を増やすためには、なによりも購読数を増

教案誌は、次代の改革派教会を担う子どもたちを育て上げるために与えられている大きな賜物です。この賜物の灯を消してしまうことが無いよう、お祈りくださればと願っております。

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき

小宮山裕一（ひたちなか教会牧師）

巻頭説教

長田詠喜（新所沢伝道所宣教教師）

教会学校訪問

名古屋岩の上教会

絵本に心を耕されて

望月鈴子（浜松伝道所信徒）

教会・国家・平和・人権

木下裕也（名古屋教会牧師）

神様のみこころを祈る

保田広輝（長丘教会信徒）

ポストモダン社会と若者たち

大嶋重徳（KGK 総主事）

聖書黙想・説教展開例

常石召一（大阪教会牧師）

長田詠喜（新所沢伝道所宣教教師）

小宮山裕一（ひたちなか教会牧師）

木下裕也（名古屋教会牧師）

吉岡契典（板宿教会牧師）

浅野正紀（江古田教会牧師）

吉田 崇（坂田飯山教会牧師）

酒井啓介（宿毛伝道所宣教教師）

金 昭貞（板宿教会協力牧師）

分級展開例

島野美佳子（坂戸教会所属新潟伝道所信徒）

愛智 愛（新座志木教会信徒）

イラスト作画

表紙 中村未生（春日井教会信徒・IBUKI）

高橋乃亜（湘南恩寵教会信徒・IBUKI）

本文 岡野美佳（青葉台キリスト教会信徒）

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長） 名古屋岩の上教会牧師・大会教育委員会

小宮山裕一 ひたちなか教会牧師・大会教育委員会

長田詠喜 新所沢伝道所宣教教師・大会教育委員会

木下裕也 名古屋教会牧師

辻 幸宏 大垣伝道所協力牧師

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会『教会学校教案誌』

2016年10・11・12月号（季刊）

第63号

2016年10月1日発行

発行 日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

発行所 日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎

〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

郵便振替口座 00890-2-148183「伊藤治郎」

編集・印刷 株式会社あるむ

頒価 900円（本体価格）

Reformed Church in Japan
Board of Education

